



Illustration : SATOSHI GOMA



小説 さかき傘

挿絵 ごまさとし

序章	月下美人	006
第一章	臥雲神社の巫女	017
第二章	異変と海蛇	059
第三章	毘の真意	101
第四章	悲哀の姉妹	139
第五章	落花	180
終章	覚醒	244

登場人物紹介

Characters



みずき
水輝

臥雲神社に住む若い巫女でありながら、陰では妖術師を狩ることを生業としている陰陽術の使い手。

あかね
茜

水輝の血の繋がらない妹。人懐こい幼女と、冷酷なくノ一の二面性を秘めた少女。

やみ
夜巳

来鑄家の一人娘。長い黒髪に豊満な肉体を備えた美女。

くるい どうえもん
来鑄 藤衛門

捺谷地方を治める地主。農民を搾取し私服を肥やしている。

かしんこじ
果心居士

稀代の妖術師。

序章 月下美人

太閤殿が病に倒れたことで朝鮮制圧の夢も無に帰り、後に桃山期と呼ばれる乱世も、ようやく終焉を迎えつつあった。

だが現し世にはいまだに、血で血を洗う地獄が暴利を貪る一部の人間のためだけに存在している。それが戦国の世である。中には史に名も残せぬ凡百な悪鬼たちが、善良な人々の生き血をすすすることも多くありえた。

特に顕著な例として、城主成瀬殿なるせの統べる阿口の国の端、播斗するとの里がある。

村には古くから続く風習として、『血卸ちちおろし』という儀式があった。女性の月のものが不吉だという仏教世界の考え。それが転じて新婚の家庭において性具から滴る血、即ち破瓜のそれを交えて夫婦がつなると、二人には災いが降りかかるといふ。それを払拭するため、村で最も権威のある人間である長老が、いわゆる『初夜権』でもって、婚約の儀において初夜の相手を新郎の代わりに務めるのだ。女性が最も無防備な刻をさらす、餓鬼が付け入るには、おあつらえ向きな儀式を。

月明かり以外に照らすもののない室内に、一組の男女が向かい合って座っていた。

男のほうは頭の禿げ上がった、骨と皮しかなさそうな老人である。ぎよろりと浮かび上がった目玉や、酒を飲んでいのか赤らんだ頬が、気色悪いほど不気味な印象を与えた。着衣の類は一切着ておらず、枯れ木にも似た老体を見せており、股座には高齡にもかかわらず隆々とした逸物をそびえさせている。

女のほうは、男の三分の一も生きていないだろう若い娘だった。こちらは真つ白な薄い浴衣一枚だがまだ服を着ている。背まで伸びた艶髪や、双眸から顎へと至る顔立ちの整いは、随分な器量よしであることをうかがわせるが、いまは俯いて、悲しそうに眉根をひそめていた。

村一番に綺麗な座敷はこの一晚の間だけ、その日最も幸せになった女のために使われる。しかし真ん中に敷かれた清潔な布団を挟んで向き合うのは、夫ではない。女が顔を歪めているのもそのためである。

「ほれ、いつまで待たせるつもりじゃ。さっさと脱がなか」

老人はいかにも好色な笑みを浮かべて言いつつ、その言葉でさらに強張る彼女の顔を楽しげに覗き込んだ。

「も、申し訳ありません……」

か細い声で謝りながらも、さらに顔を俯かせるばかりでなにもしない女。

初夜権を持つ長老である弘政ひろまさは、その躊躇いをまた楽しんでるようだが、これより裸

になって、この老人に身体を預けなければならぬおまちにすれば、嫌がるのも仕方のないことであつた。

花婿との愛を誓つた日に、身体が一番深い部分を、他人と接触させなければならぬのである。村内でも常識的に考えればおかしな儀式であるを取りやめの声はあるのだが、長老である弘政が頑なに譲らず、またなぜか、彼に処女を奪われた熟年層の女たちも取りやめ反対派に回つてゐるため、今日までなぜか残されてゐた。考えの根本には仏教が絡んでゐるため、過度に反発することもできず従つたが、いざ肌をさらす段階になると、無垢な乙女には耐えきれない屈辱感があつた。

「ほれほれ、この邪魔なものを取ればよいのじゃ」

日ごろの畑仕事で鍛えられ引き締まつた太腿を撫でながら、男の手が、真つ白な着衣を引つ張つた。その瞬間おまちは、不快感に耐えきれず立ち上がる。

「や、やっぱりやめます！　こんなのは絶対におかしいです！」

逃げるように裾を整えつつ、女は出入り口の障子に駆け出そうとした。だがその途端、老人の枯れ木のような腕が足首を掬め捕つた。思わぬ力で両脚を止められて、その場に尻餅をつくおまち。途端に男が上にのしかかってくる。

「ククク……。あの親にしてこの娘ありか。まちよ、お前の母親も、こんなふうにてこずらせてくれたよ。もつともすぐに大人しくなつたがな！」

うつぶせの少女を、意外なほどの力で押さえつけながら馬乗りになり、大笑いしだす弘政。その手にはまるで彼女が逃げ出すことを知っていたように、小さな筆が握られていた。それは軽やかに振るわれ、ひいっと息を呑む女の背に紋を描く。

目玉をひん剥いた男を見て、恐ろしくなつたおまちは、這つてでもこの部屋から逃げ出そうとした。だが背筋に毛筆の柔らかな感触が走つた途端、へなへなとその場に寝そべつてしまう。背中全体に、ひどく重いなにかがのしかかつてきたようだった。

「いつ、いや……っ。いやあああッ！」

悲鳴をあげながら、力の入らない身体を芋虫のように引きずつて逃げようとする少女。

「もう遅いのじゃ！ 五通神ごつうしんはおいでになつた。もう逃れられんのだ！」

老人は狂つたように笑いながら、おまちの細い背中に手をかけて、白い着衣をひっぺがした。不思議なことに衣服にはなにもついていないが、乙女の肌の上には、さきほど筆がなぞつた跡がつけられている。なにかの文字にも見える、黒い跡が。

「ふあ……、あああ……。ちよ、長老様。これは一体……」

肺の裏側から、なにかおぞましい汚液のようなものが染み込んでくる感覚があつた。逃げ出そうにも全身から力が抜け、悲鳴をあげようにも、喉にすら力が入らない。

「悦びも満足に味わえぬ小娘の身体では、不憫じゃからのう。五通神の力をお借りしたのだよ。さあ肉をこなししてやる。嫌だったら、出ていってよいくれてよいのじゃぞ」

新妻の小さな背中をいとおしげに摩さすっていた老人の両手が、前面に伸びた。白い着衣ははだけ、申し訳程度に腰下を隠している程度なので、まるやかに隆起した胸肉は完全に露になってしまっている。抱き上げるように両乳房を掴まされると、それまで脱力していた柔肌に、電気でも通したかのような緊張が走った。

「あはあッ！ あ……。ああああああつ」

親指にぐりぐりと押される乳首から、狂おしいほどの甘い情感が湧き起こる。半開きになつていた唇から、ひとりでもれた自分自身の声音に、おまちは信じられないといった様子で顔を赤らめた。自分の身体になにが起こったのか、さっぱり分からない。

「よい反応じゃ。ほれ、こちらも熱くしておるのじゃろう」

乳房を弄りつつ女の上半体を持ち上げ、膝立ちの格好にさせると、無防備に開いた腿の付け根へと指先を滑らせる弘政。腰に絡まって脱ぎきれていない着衣に覆われたその部分は、すでに黒い淡毛が汗露に濡れるほどの熱気を湛えていた。生娘特有の清純さは消え、ひし形に開いたそこには、牝じみた匂いすら漂い始めている。

「だ、だめです。いけません長老様……。や、やめ……。ああん……」

全身を襲う異常のことなど、気にしていられなかった。なんとか否定の言葉を口にしても、こぼれ出る甘い吐息は本音を物語っている。

秘芽を軽くつつかれると、ぬるりと熱い粘液が指先を汚した。男は頃合だと見て、ニン

マリと相好を崩しつつ、お尻側から布切れと化した着衣を払いのける。そしてひん曲がった無様な陰茎を、じつとりと温かく柔らかかな、新妻の内腿に擦りつけてきた。

「さあ、まちよ、これが欲しかろう。今日婚約した夫なんぞより、わしのこれが愛しゅうてたまらんのじゃろう」

(ち、ちが……。そんなこと……。ああ、でも……)

邪悪な誘いが耳をつくくと、身体が勝手に嘘のない反応を返し、おまちは朦朧とした頭で首を縦に振っていた。股下に熱い滾りを感じると、子宮を疼かせる淫らな熱が抑えきれないのだ。いつしか生娘の新妻はくねくねとお尻を揺らして、背中を男に押しつけだす。

「フフフフ……。これでお前も、わしのものじゃ……」

逸物の亀頭部が花卉を割り開き、中に入ろうとした。その、瞬間だった。

弘政はなにが起こったかも分からず宙に放り出された。血を卸すという神聖な儀の行われているこの部屋に侵入者があったことにすら、気づいたのは壁に叩きつけられたあとだ。

「え……。あ、あひいいいいいっ！」

顔を上げた途端に老爺は、あまりの恐怖から屋敷中に響きわたるほどの悲鳴をあげる。そこには白い体毛が全身を覆う、天井に届くほど巨大な二足歩行の獣が立っていたのだ。瞳孔が縦に割れた血の色の眼が、いまにも食らいつかんばかりに獲物を睨みつけている。

つまり、叩きつけられた衝撃で身体を起こすことすらままならない哀れな男のことを。

「間一髪って……、トコね。その娘は返してもらおうわ」

どこか気だるそうだが、鋭く怜悯にすら取れる声が響いた。いつの間にか、音も風も感じさせないほどのうちに襖が開いていて、声の主だろう女が立っている。

助けを求めるため彼女のほうを向いた老人は、その一瞬、いまがどんな状況であるかも忘れ目を奪われていた。

月明かりの後光に照らされて、頭の後ろでひとまとめにした、腰を覆うほどに長い艶髪を翻す。それだけで網膜に焼きつくような、絶対的な存在感を持つ女だった。ややつり目がちの上品な瞳や、表情を読ませないためか無造作にほころんだ口元からは、敵意の排除された殺意が漂っている。

神社で神主などが用いる巫服を基調としているが、胸を覆う程度の上かけ白衣を着込み袖をたすきで上げている、活動的な胴衣に身を包んでいた。純白の生地が月明かりに神々しく輝いている。

見惚れるとは少し違う、まさに目を奪われたとしか言いようのない男は、天の御使いが降り立ったのだと錯覚する。確かにそれだけの存在感、迫力があり、目の前にいる怪物と見比べれば神聖な類と見間違えるのも無理はなかった。もつとも、鋭利な刃物のように冷たい微笑を浮かべた彼女が本当に天より遣わされた使者だとしても、どういった目的でこ

ここにいるのかは分かうものだが。

「悪いわね、この世で最後のお楽しみを邪魔して」

長い髪をかき上げながら、冷めた口調でそう言い放った。

「——！」

その言葉を聞いて、弘政はようやく我に返った。突如、老いた双眸であるから以前に人間の視力では捉えきれない速さの黒い疾風が走る。それは布団の上で呆然としている全裸の女体を抱えると、一瞬でも人目につかないように跳躍すると天井の板を蹴破って屋根裏へと消えた。

「な……。ど、どうということなんだ……。貴様まさか……」

自分がどんな状況にあるのか、ようやく解せてきたらしい。恐怖に声を震わせる弘政。女が身を包んでいる俗世離れた着衣は、よく見れば非常に古くから伝えられており現在では廃れつつある、陰陽道衣と呼ばれるものだ。

そして眼前に立つ、女の登場以来ピクリとも動かなくなった白毛の怪物。呪道に心得のある弘政ならば感覚に訴えるものがある……。『式神』^{しきがみ}と呼ばれる、呪道的な調伏によって術師に使役される鬼神類に違いなかった。

それらは、できる限り術師の望む形態を取り、術師の望む能力を持つため、用途は各々によってかわる。中でも陰陽道系術師が扱うものは、大抵の場合が戦闘目的であるという

が……。

これほど禍々しい姿の怪物となると、どんな目的で使われているかなどすぐに想像がつく。まして古い風習である初夜権を利用し邪淫にふける以外、戦う力も持たぬ老人でさえ本能的に感じるほど凶悪な殺気を放っていた。

「血を卸すためと偽って、村の娘たちの性衝動を『五通神法』ごつうしんぽうで縛り上げ、心まで我がものにしてきたのね。村の半分を奴隷にして好き勝手やってきたんでしょ。頭いいわ」

五通神法。確かに弘政がおまちに、そしてこれまでの数十年間村の女たちに使ってきた術法の名である。悪鬼の力が宿った呪文を刻み込みかにかに純な乙女とて術師の虜にする。

「ただ迂闊なところは否めないわね。どうも女たちの様子がおかしいって、村の人たちは随分前からあなたのこと嫌ってたみたいよ。村長さんたちが何人も揃って神社まできて、神様にあなたを消してくれて頼むんだもの」

涼やかな声音で決定的な単語を口にする女。月明かりの後光がさした、天女にも見えるほど美しい彼女が、なにをしにきたのか改めて理解した老人は、ヒッと息を呑んだ。

「たっ、たす——ッ……!!」

けて。まで言えなかったのは、やかましそうに女が耳を塞ぐ動作をした途端、二本足の猛獣がその豪腕を振り上げ男のか細い首を握り締めたからだ。一瞬にして言葉はおろか呼吸までも止められ、逃げ出すことができなくなる。

「ごめんね。私、断末魔の悲鳴ってのがこの世で四番目くらいに嫌いなものよ」

少しおどけたような上目遣いになった女の口元には、相変わらず邪気のない笑みが浮かんでいた。男は息ができないこともあり顔を真っ赤にする。だがなんとか抵抗しようにも、彼自身の胴体より太い腕はとても振りほどけそうになかった。

「ちなみに二番目に嫌いなのが、血を見ること。だからね、拷問とかしたくないのよ。ひとつ質問させてもらうけど、お願いだから素直に答えてね」

喉に加わる圧力が少しだけ緩まり、老人は必死でコクコクと首を縦に振った。

「果心居士……。この名前に心当たりはない？」

女の目が、これまでにないほど鋭い輝きを放った。だが何十年もこの村から出たことのない弘政にはまったくなじみのない名である。

「し、知らない……。知らないから……」

殺さないでくれ。言おうとしたのだが、女が残念そうに目を伏せた途端に熊のような腕がまたしても首を押さえつけ、声が出なくなった。

「知らないなら、あんたに存在価値はないわ。これまで女を食い物にしてきた報いを受けることね」

冷徹に言っただけ、女が踵を返して部屋から出ていく。

癖なのだろう、長い髪をかき上げながら立ち去るその姿を、涙目で見つめていた老人は、

直後目の前で野獣が口を大きく開けたのを見、逃げ場のない闇の中に放り込まれた。

村一番に綺麗な御座敷の中では、しばらくの間、ボリッボリッと硬いものの碎ける音が響いていた。やがて食べる部分のなくなったことを確認して巨大な鬼は、満足そうに部屋から退散する。

残されたのは、わずかに畳に染み込んだ赤い液体だけだった。

第一章 臥雲神社の巫女

地方に靈山と呼ばれる場所は沢山あるが、城主成瀬殿が続べる阿口の国の果て。穂村山ほむらやまほど不思議な場所はない。

中腹は年中を濃霧に閉ざされているが、ふもとはもちろん、ただだきに登ればどうしたわけか、霧はすべて晴れてしまう。もつと不思議なのは、日はさえぎられるにもかかわらず作物や木々が見事に成長することだ。いまのように秋の終わりには、銀杏や紅葉が衣を替える。もう取り尽くされたが、少し前には柿の木が甘く大きな実をつけていた。

そんな山の頂上付近。ちょうど霧が晴れたあたりに、臥雲ふくもという大きな神社がある。

これも不思議なところで、敷地内を綺麗な紅葉が取り囲み、二千の石段から連なる正門以外からは中を覗くこともできない。季節柄そろそろ葉が落ち始めるが、枯れきっても木々は壁になっていし、中の様子もまたおかしいのだ。石畳の道を左右から見下ろすように台に乗った稲荷の像が十数体並び、神聖というか異様な光景を呈している。

地元の人間たちは随分と昔からあるこの神社を、いまもまだ、なんの神様がいてどのような理由でこんな場所に建てられたか知らない、生齧りのままありがたがっていた。

ただ行き来するだけで苦行に近い立地条件にもかかわらず、参拝者はあとを絶たない。

それは珍しいからと旅行者が訪れるわけではなく、信心深い村人が毎日のように山の上と下を行き来するためである。

なぜか、と問われれば、色々と魅力的な部分が多いからと返ってくる。霧に覆われた奇天烈な雰囲気、酔い遊歩を楽しむもよし。器量よしと評判の巫女さんたちに会いに行くもよし。

それから、この社を参拝すると、不安や不幸が回避されるとの噂がある。真偽のほどは定かでないが、それを信じてみるのも、またよいかもしれない。

くれないに染まり、やがて石畳の上に落ちた木の葉を、規則正しく竹ぼうきが掃いてひとつの場所に集めていく。大きな神社を囲む木々から落ちただけに、その量はかなりのものだった。火打ち用の石を数回カチカチ鳴らすだけで、すぐさま白い煙が天に昇り始める。大人でも一日二日では終わりそうにない量の木の葉を集めているのは、まだ手足も伸びきらない巫服姿の少女がたったの一人だった。つぶらな瞳は目尻が柔やわに垂れ下がり、顔立ちが全体的にふっくらしていることと髪を尻そぎやわにしていることから、幼げで無邪気な印象がうかがえる。そんな竹ぼうきも手に余るような少女が、広い境内の掃除を任されているのだ。

おなかのやや高いところで帯をとめた着衣は、やや埃などの汚れが目立つものの、真っ

白な巫女服だった。胸紐、瓔珞ようらくのように無駄な装飾はついておらず、屋外に出るときは大抵着込んでいるはずの千早貫頭衣の類も着ていない。身体が小さいためか装束は全体的に裾の丈が合っておらず、やぼったい印象があつて、『着せられている』ようで可愛らしかった。

白色上衣と、やや煤けた紅色の袴は、そこはかとなく気品のようなものを感じさせ、すましていけば貴族にも化けそうだけに余計、境内の掃除をしていることに違和感がある。「ん〜ん〜ん〜…っ、あ〜ん〜ん〜。つかれたあ〜ん〜」

自身の背の半ばくらいまで積もって煙を上げている木の葉の山を見て、可愛らしく相好を崩す少女。ようやく境内中の半分が終わったところで、達成感や満足感にひたるには中途半端なできだが、どうもそれだけが理由ではないらしい。

「おなか空いたなあ…。お姉ちゃん、まだかにゃあ…。」

鼻にかかったというか、舌足らずというか。少し頼りなげな声で呟きながら、ほうきの柄端で木の葉の山をつつく少女。なにかの感触を確かめると、さらに顔を蕩けさせる。だがかき回されたお返しとばかり焚き火が煙を吹きかけてきたので、後ろに飛びのいた。

「のわっふ！ ……けへ…っ、けほっけほっ…。あ〜ん〜びっくりしたあ〜」

ふっくらと女の子特有の曲線を描く頬に赤みがさし、涙の浮いた目をぐしぐしと擦りながら、煙の思わぬ奇襲に大きく咳き込む。

「お風呂のときも料理のときも、火の番やらせると絶対に一度はソレやるわね」

目を閉じた状態で後ろに飛びのいたため、ふらついてしまう少女を支えたのは、同じく巫服姿で、手に大きめの盆を持った女だった。

着ているものの形はまったく同じだが、身体に女性的なおうとつがあり少女よりいくらか年上のようだ。また下ろせば腰にかかるほどだろう優美な黒髪を、ぞんざいに後ろでひとまとめにしていることから、活動的な印象だった。

瓜型の輪郭や目鼻立ち、口元には、整っていないながらもどこか隙のようなものが感じられ、幼いとまではいれないが少女めいた雰囲気がある。しかし猫のように鋭さの足りない野趣なつり目や、くつきりと凛々しい眉立ちからは、聡明な落ち着きが感じられた。

静と動。少女から大人に変わる一瞬だけが持つ、どこか蠱惑的な魅力に満ちた少女だった。喉元や肩口、小さな手首は、触れれば手折れてしまいそうなほど白く華奢なのに、胸や臀部には女性らしいいまるやかな曲線が萌え出でてきている。特に朱色の帯で絞られた腰つきから背筋へと至る線の細さは、女性的な肉感と少女めいた弱々しさが同居し、神秘的なまでの美麗さを見せていた。ただ、隣で服装が同じな子供っぽい少女が煙がっているためだろう。いまは大人びた部分が出てくる。

手にした盆には、水の入った粗末な茶碗が七つ、置かれている。彼女自身と少女の二人分にしては多い。

「あ……、お姉ちゃん。えへへ、びっくりしちゃった。いきなりふわあつてくるんだもん」
乱雑に擦ったせいで目の下あたりをススで黒く汚しながら照れ笑いを浮かべる少女に、
女は目元を少し緩めつつも興味ない風を装って髪を弄りながら、からかい口調で応じた。

「気をつければ済むことよ。火は、煙が出るんだから」

「……知ってるもん。いまのはちよつと……。ちよ、ちよつとただけだよ」

「はいはい。それより、お客様がきたみたいよ」

意地悪な物言いに頬を膨らませる少女を軽くあしらいつつ、ほうきを取って焚き火の中
をつつきだす。

「んっし、いい具合に焼けてくれたわね。茜あかね、持ってくよ」

木の葉集めはこれを焼くためだったらしい。棒切れで適当に火の粉をかきまぜてやると、
塩梅よく焦げ目のついた芋が転がり出てきた。どれも子供の拳骨ほどの大きさしかない、
一般にはくずとされるものばかりだが、皮に綺麗な色艶があり味はよきそうだ。

いつどこからくるか分からない煙の襲来を恐れつつ、茜と呼ばれた少女が、袴の裾をた
くし上げて袋にする。姉貴分の女がほうきの先が分かれたほうを器用に使って、ふくらは
ぎを覗かせた妹のそこに、芋を溜め込んでいった。

「……うあつっ……。……あ~~~~っ……。っつい！ 熱い熱い熱い熱い熱い！」

巫女用の服は基本的に生地が薄い。そんな布切れしか間に挟まず、腹部に焼き芋を押し

つけたため、少女は飛び上がるように境内を駆け回りだす。

ちよつとひどい話だが、自分はお盆ひとつしか運んでいない女のほうは、癖なのだろう髪をかき上げて、少々気取った動作を取りながら、悠々と境内の中央に構えるお堂へと歩いていった。もう一方の熱がってるほうは大量の焼き芋を、身悶えしながら同じところへ運んでいき、急いで堂の外廊下に全部ぶちまける。するとちよつどそのとき濃霧に覆われた門の外から、がやがやといくつかの人影が登ってきた。大風呂敷の荷物を持った百姓たちで、数は男が五人。巫女二人を含めると、ちよつど盆に載せられた腕と同じ数である。

「おお。これはこれは、こんにちは水輝さん、茜さん。出迎えてくださったのかな？」

五人のうち先頭に立つ、やや初老の男が、揃って出迎えてくれた二人に親しげな笑顔を向けた。

「はい。なんのおまかいもできませんが、ゆつくりして行ってくださいね」

「……お・か・ま・い」

浮かれているらしく、ニコニコ顔の老人に、愛想よく微笑みながら応じる茜。水輝というらしい年上のほうも、小声で訂正しながら、濃霧の中で二千の石段を登ってきた五人に一人一人腕を渡してやった。たった一杯の水だが、飲み干すと彼らの表情からは、たちまち疲弊の色が消えていく。

なぜ自分たちの訪問をこの少女たちは知っていたのか。疑問ではあるが、それを不思議

に思っている人間は、訪問客の中にはいなかった。

なぜなら、彼らはずい先日ここにきており、同じ体験をしているのである。

「いやはや、お二人にはぜひともお伝えしたいことがありましてな。先日お話しした村の災厄が、お二人の加持祈禱かじきとうのおかげで払われたのです」

感激の声色で、まだ石畳の上に立ち尽くし、背には大きな風呂敷を抱えたままだというのに、ペラペラと話し始める男。外廊下の階段に腰掛けて、巫女二人して、五人の男たちが背負った風呂敷を下ろすのを手伝った。

その間も老人は一人喋り続けている。年甲斐もなく興奮するのも無理のない話だった。

立場的にはほぼ同じにもかかわらず、『血卸』に関する以外まったく仕事もせず享楽にふけていた長老。

何年も前から村長という立場で播斗の村を治め、里をよりよいものにしようと切磋琢磨してきた彼にとって、目の上のたんこぶだったその厄が、昨夜ようやく祓われたのだ。

弘政をなんとかしたいというのは、村の男たち全員の願いだった。だがなぜか村の女たちが彼に付き従うため、表立って追い出すことができない。そんなときに、ここ臥雲神社の噂を聞いて、まさに神頼みにやってきたのが一昨日である。

五人は可愛らしい巫女さん二人に出会い、ほとんど愚痴に近い形で悩みを打ち明けた。すると『血卸』が終わったあとの女たちの肌に奇妙な文字が刻まれていることを聞いて、

水輝がその長老は物の怪に違いないという。そして加持祈禱を行い、魔を払ってくれると言いだした。

半信半疑だった村長だが、おまちという村一番の器量よしの娘が初夜を迎えた昨夜、異変は起こった。娘の言うことには、長老様が怪しげな妖術を使いだし、その後突如として、真っ白な体毛に全身を覆われた化け物となって、なぜか苦しみだしたというのである。まさかと思いつつ長老の家を覗いてみると、そこにはもう誰もおらず、ただ畳に血が染みついていていた。そして数本、見たこともないほど太い白銀の毛が残されていたのだ。

あの巫女の言ったことは。水輝さんの言ったことは本当だった。そして加持祈禱により、長老という立場で村に巢食っていた悪鬼を追い払ってくれた。

今日はその、感激の悲鳴を聞かせにきたのである。

「やはりお二人の仰った通り長老様は物の怪の類だったようです。まちという娘が目撃したのですがね。長老様の本性は見るも恐ろしい化け物だったそうで」

目玉をひん剥いて、がおーっと『長老様の本性』の真似をする村長。年寄り特有の、緩急に富んだ話の巧みさがあり、ちょうど孫くらいの茜がきやあきやあ言って喜んでいるため、ますます興に入る……。

が、少女に比べ歳自体はさほど離れていないようだが、雰囲気は大人っぽい水輝の冷めた視線に気づき、はっと我に返った。荷物持ちに連れてきた男たち四名も、目が冷たい。

「えー……。そ、それですね。今日は感謝の印といってはなんですが……。こんな場所では食べるものの調達も難しいでしょうと思ひ、色々と持ってきました」

コホンと村長の咳払いで話が区切られ、五人は持ってきた風呂敷の荷物を差し出した。

「どうぞ、お納めください」

頭を垂れる。突然礼を正した態度を取られ、そういった格式的なものがよく分からないのだろう。茜は困ってしまい助けを求めるように姉を見る。さすがに彼女のほうは年上だけあり、膝をついた礼で畏まって、ありがたく頂戴した。

妹のほうも慌てて姉に合わせお辞儀をしてから、ちよつと自分の緊張感をなさを恥じたのか、廊下にバラバラと転がっている芋を集めだす。彼らを接待するため焼いたものだが、いくら熱い思いをして運んだからといって、こうも煩雑に置かれていたのでは出すに忍びないと思つたのだろう。ただもう無礼なところは見られてしまつたので、お愛想な笑いで誤魔化しつつ、どうぞと云つて差し出す。

「はは、それではせっかくなので、いただきましょつか」

もちろん普段は畑仕事しかしていない百姓たちは、礼節に関して面倒を言うことなどない。それより少女の慌てように破顔した。村長の許可が下りたので、喜んだのは特に重い荷物を背負つて山登りをした男たちである。もう一度階段に腰掛け、七人でみんなしてやや冷めてしまった焼き芋を皮ごと頬張りだした。

焼き芋、というだけあって、熱いうちに食べるのが一番ではあるが、上品な風味は冷えても損なわれることはない。黄金色のでんぷん質から香ばしい匂いが立ち込め、ほこほこした心地よい粘り気は、舌の上で蕩けるような甘味へと変わる。

「あまあい。えへへ、美味しいね」

全員共通の意見だろうが、一番分かりやすい反応を取るのには一番幼い茜で、まろやかな味に相好を崩している。百姓衆五人も少女の愛嬌に満ちた素直さに莞爾かんじとしていた。

一人、ちよっとだけ口をつける回数が少ないのが水輝である。どうやら熱いものが苦手らしく、ふちのほうの冷めた部分しか食べていなかった。口数少なく落ち着きを見せていた彼女の、意外な部分が垣間見え、気を遣ったのか村長は食べる手を休める。

「しかし水輝さんたちのおかげで、我が村は救われました。この神社を信じて正解でしたよ。どんな問題もここにくれば解決されるという噂は本当でした」

「そんなことないですよ。こんなボロ神社に、どんな問題も解決できる力なんてありませんって」

自らが仕え、信望すべきお社に向かって、随分な言い方をする巫女である。微妙に皮肉った部分の抜けない性格のようだった。ただ言葉尻に嫌味を感じられないあたり、言葉の意味には照れが含まれるようで、表向きでない愛嬌のようなものが感じられる。

「いやいや。地方に靈利れいきうな社寺はいくらでもありますが、ここが一番でしょう」

そんな彼女の心中を見抜いているらしく老人はさらに持ち上げてくる。彼にしてみればこの巫女も孫のように思え、照れた顔を見るのが楽しいのだろう。

「これなら捺谷地方の方々にもお教えしましょうかな。あちらは随分と石高の取立てが厳しいようですので」

「捺谷地方……？」

不意に水輝の表情からは、それまでは少なからずあった、可愛らしいなにかが消えた。話に夢中になっている老人は気づかないほどの、ごくわずかな間に。

「はい。あの地方は肥沃なことで有名でして、太閤様の石直し以降は生活が楽になると思われたのですが……。大地主の来鑄藤衛門様が、相当な量を搾取しているようです」

「来鑄……。聞いたことがあるわね……」

「一年ほど前に巫術師や占星見の人間を集めるため、この地方の神社仏閣にはほとんど、召集の令状が届いているはずですから。うちの長老様も前に召喚されたりしきことをもらしておりました」

髪をかき上げつつ、少女は無言でぼりぼりと後頭部をかいた。

「なに。関わらんほうがいいんです。偉い方がいらっしやれば、必ず込み入った面倒ごとが絡んでいるもの。それに来鑄様が名を現した一年前といえば、ちょうど捺谷地方全域で人攫いが多発し始めたころ。黒い噂は絶えませんゆえ……」

村長のほうも声を潜めるが、それは彼女とは違う事情だろう。

彼も、そして付き人だった男たち四人も。そのときすでに水輝の顔に、可愛らしい巫女さんの持つそれとは明らかに違う色が混じっていたことに、気づいていなかった。

黄昏時。播斗の里の百姓たちも帰り、夕闇に染まる境内には、巫女二人が残されていた。風呂敷に包まれた奉納品は、米、酒、芋といずれも食料だった。とはいえ乱世のご時世。俵ひとつ分の米も、樽を満たすほどの酒も、それだけで貴重品だし、芋はこの地方では栽培されていない、自生のものを採るしかない長芋。彼らの持つてきてくれたお礼の品は、貧乏な村からは想像もできないほど高価な品ばかりである。

が、どれもこれも堂内の畳の上に放置されたままだった。なにぶん、これから他にやることがある。

社内の隅に小さく奉られている掛け軸に手を伸ばした水輝は、それをめくって、裏の壁に手を添えた。隠し戸になっているらしいそこを縦に開き、中のもを取り出す。

巫服の上から羽織るように、やや分厚めの純白貫頭衣を着込んだ。巫女が用いる千早衣とは少し違うらしいそれに、一旦解いた朱袴の帯を上から通す。きつく締められた胴部からは飾り紐が、中央に一本、左右に二本ずつの計二本見えていた。そのさらに外側には、貫頭衣の裾だろう控えめながら柄つけのされた帯が垂らされている。

着替えの終わりに左右の飾り紐に手をかけると、背中に回して、着衣の裾を上げつつ脇と肩を通した。ちようどたすきを締める形になり、細い腕が肘近くまで露になり、活発そうな印象が強まる。

それからもうひとつ、隠し戸から今度は黒い装衣を取り出した。当世具足鎧によく見られる、なめし革の籠手である。手の甲から肘までをすっぽりと覆う大型のもので、鉄の仕込みは見られない随分と古そうな代物だった。左手用のものしかないらしく、手馴れた動作で装着する。

着衣は、巫女服とは明らかに違う印象があった。

陰陽道衣……。そう見て間違いあるまい。

姉が準備を終えると、今度は妹のほうに隠し戸に手を入れる。こちらは随分と重そうなお六尺はあろうという大きめの刀を引っ張り出してきた。しかし間違いなく自身の背より大きい鉄塊ながら、少女は冴えない表情をしながらもなんと片手で持ち上げている。

するりと錆びた鞘から抜き放つと、それは、珍しいことに黒塗りの太刀だった。戦国期も終盤にさしかかり、時代の主流は打ち刀へと移行しつつある現在。なにかの樹脂で黒く鈍く染められた、武士が使うには似合わないほど扱い辛そうなお太刀。

漆黒に妖しく煌くそれを見つめ、少女は一度、なにか不満がありそうに姉のほうを見た。だが彼女が首を横に振るのを見ると、諦めがついたらしい。着衣の裾に手をかける。

——瞬間。着衣の中から、おかつぱの少女が消えた。ように見えた。

正確には衣服の脱着を、目にも留まらぬ速さでやってのけたのである。

緋色袴を帯で束ねた丈の合わないだぶだぶの巫服時とは、随分と印象を異にしていた。ひたすら機能性、それも動きやすさのみに重点を置いた装衣で、覆われたところは膝までの白足袋と草履を除けば肩から腿ほどまでしかない。

胴衣はくすんだ紺色で、朱に染められた襟や袖口を除けば生地も随分薄く軽そうだった。下穿きは腿の付け根までしかなく、腰回りを包む程度にしかない。防具と呼べそうなものは、華奢な二の腕や首筋に覗いている生糸製の帷子と、肘から手の甲までを覆う水輝の着用した品より幾分小さなめし革の籠手くらいだろうか。とはいえ、帷子はあくまで生糸でできており、妖しいほど肉感的に肌をさらしていることに変わりはないし、籠手も指先を覆いきれていない。眩しいほど白い太腿や、いかにも華奢な首筋は完全に無防備だと言ってもいいだろう。若々しい脚先は足袋を少しさらしで補強してあるだけだ。

おそらくだがその着衣は、本来ならば内側に鎖帷子や、外に銅鉄の防具を仕込む戦服下着の一種であろう。前の合わせ目や裾はひらつかないよう強めに締められていた。

雰囲気が大きく変わっているが、幼めいた面立ちからして、茜に間違いない。だが人形のように凍りついた表情や、輝きの欠片も見られない瞳は、可愛らしさよりも艶めいたものを強く感じさせる。特にすらりと伸びた美麗な脚や、下穿きにくるまれた丸いお尻

の曲線は、扇情的とすら見えるほどだった。

危険な妖しさを湛えた、怜悧な風貌の美少女だけに、黒塗りの大太刀を抜き身で携えても違和感がない。

細い紐で鞆を背に括りつけつつ、肌色に近い無地の布で覆面のように口元を隠し、少女は低く、こもった声で言った。

「行こう……」

直後より数刻の間、社内から人の気配が消えた。

※

阿口の国は城主成瀬殿の統べる土地だが少々狭いので、実際に権限を握るのは地方の地主たちである。その中でも、この一年でめきめきと力をつけ、このままなら数年のうちに国長と取って変わるだろうと言われるのが、捺谷地方の来鋳家だった。

たった一年で三度の増築を繰り返し、いまでは国城にも匹敵する広さの屋敷を持つこの家門。普通に考えればありえない、としか言いようがないだろう。しかし不可能を可能にする術が、この呪道大国とも呼べる日本には存在する。

まだ巫蠱術、陰陽道が、自然崇拜からなる鬼道と呼ばれていた大和の時代より、日本の権力には常に、呪術がついて回ってきた。太古より朝廷は神具でもって神の力に守られ、平安京の時代からは陰陽師がその外堀を固める。天下の権力中枢がそもそも、呪道によっ

て策定されてきたのである。それを考えると、来鎗家にもなんらかの呪術的加護があるの
だろうことは容易に想像がつく。

ゆえに高い塀に囲われた内部は、別世界であった。

庭は深夜だけあって静かなものだったのに、勝手口から邸内に忍び込んだ途端からこれ
である。水輝は眉にかかる前髪を面倒くさそうにかき上げながら、ため息をつく。

「ったく……。やれやれね……」

『ヴォフッ……。ヴォフッ……。ヴォルヲオオオオオオオオオオッ！』

飼われているのだろうか、耳を劈くつんきような日本狼の遠吠えが屋敷中に響きわたった。

「出会えー！ーッ！ 出会えー！ー！ーッ！ーッ！」

途端に威勢のいい怒号が飛び交い、衛士の類であろう刀を携えた男たちが勝手口に集ま
ってきた。しかしすでに侵入者は逃げたらしく、なおも吼え続ける狼の姿しかない。

「どこかにいるはずだ！ 探せ！」

衛士たちは、内部に忍び込んだであろう賊を捜しに散らばっていった。なぜ放し飼いに
してある番犬が、この場に残って吼え続けているのか、分かっているらしい。

「……あの程度の連中なら……。隠れなくても全員楽に殺せる……」

「いいのよ。無駄に命を奪う必要なんてないわ。それに私、血い見るの嫌いだし」

狭苦しい空間でも優雅さ、軽やかさを損なわず、黒塗りの大剣を振りかざして物騒なこ

とを言い出す茜を、水輝は片手で制した。

「にしても狭いなあ……。茜、もうちよつとそつち詰めれない？」

「板が腐ってる。水輝の体重が乗ったらまず確実に壊れて落ちる」

「ああ……。下が釜戸になってるのね。水蒸気があたる部分だから確かに腐る……。……
ってコラあ！ 誰が重いって——！」

せつかく天井裏という狭苦しい空間に隠れているのに、大声を出しそうになった水輝を、今度は茜が片手で制した。口を塞ぐという極めて強引な手段ではあるが。

誰もいなくなったことを確認してから、二人して下に降りることにする。勝手口は床が低い分、天井から降りるのは一苦労で、水輝はこわごわ、少しだけ台の高い釜戸に足をつき、それから降りた。その真横に足場など使わず茜が、当たり前のようにいとも容易く着地してみせる。あちらのほうが何倍も身軽なのは事実である。現に先ほども天井裏に登るとき水輝は、軽く跳躍して届いた彼女に、手を引っ張ってもらい隠れたくらいなのだから。

『ヴ……。ツツツ!!』

少女の素早さはそれだけではなかった。突然のことで狼が虚をつかれてるうち、手にした獲物を翻す。漆黒の太刀筋は正確に獣の眉間を打ち据えた。

みねうちだったのだろうか、鉄塊に殴られ昏倒する獣。

「行こう……」

くいつと指で合図すると茜は、足袋しかはいていない足で勝手口の砂利床を踏み締めてしまい、痛がっている水輝の後ろに飛び込んだ。前方と側方からならちようど死角になっている場所に身を置いたのだ。

普段は自分のほうがお姉さんなのに、仕切られてしまい、なんとなく面白くない。普段着でもある着なれた袴の裾についた埃を払い落としながら、少女はため息をつく。

水輝と茜は、出身地である里で、それぞれ陰陽師とくの一として鍛えられた。特に茜は六歳まで、非人道的ともいえる修練を課せられたため、感情が一切排除された人格に育てられている。八年前、里を抜けたときから普通の生活を手に入れたため、いまではややおとぼけ気味で緩そうなところはあるものの、人並みの感性を手に入れ水輝にとって妹とも呼ぶべき存在になったのだが……。一旦思考が戦闘に向くと、頼りになると同時に扱い辛い人格になってしまう。結果、いまのように、かなり失礼なことも平気で言うようになるのだった。

「——!? こっちだ! いるぞ!」

厨房にあたる場所を出て、屋敷内廊下に入った途端に、番犬の鳴き声が消え不審に思ったのだろう、帰ってきた男たちに見つかってしまった。数は大体、先ほど天井裏に潜んでやりすごした男たちの五分の一というところか。

面倒はなるべく避けたかったが……。この状況では、避けているほうが面倒である。

「茜！ やるよ！ 援護お願い！」

陰に潜み、前方の男たちには姿の見えていない相棒に指示を出した。

数十の屈強な男たちが、刀を構えているというのに、水輝はまったく躊躇することなく全速力で突っ込んだ。同時に巫女服姿の女の陰から、黒衣を着た少女が飛び出し、大太刀を立てて天井に張りつく。衛士たちは突然現れた、可愛らしい少女二人というあまりに緊張感のない侵入者に、ぎよっとなってしまっていた。

走りながら右手の人差し指と中指を立て、その先端をそれぞれ下と上の唇にあてる、印の構えを取る水輝。太刀を突き立てて体重を支えながら天井を駆け、男たちの後方に回り込む茜。

「召霊……、白虎！」

濃紺の衣に身を包んだくの一の少女は、囧だったのだろう。男たちが目を奪われた一瞬の隙に水輝が、裂帛の気合いを感じさせる、凜々しい声で印を切った。指先を流れるように滑らせて、中空に六芒星と奇形の呪文を刻む。

——ビギ……ッ！ ビギギギッ！！

空気が裂けるようなものすごい音がしたかと思うと、はつきりと目に見えるほど太い紫電が辺りを駆け巡った。なにがあったかを捉えた者はいない。ただ光の矢が自分たちの心臓を射抜いた。そこまでしか分からなかった。次の瞬間には脳髓まで痺れがきて、ほぼ全

員がその場で気を失ったためである。

残されたのはたった二人。しかも失神を免れただけで、身体はほとんど麻痺している。容赦がなかったのが、見た目年下の忍者らしき少女のほうだった。一瞬のうちに意識がある二人を見抜き、黒太刀を振るう。先ほどの狼同様みねうちではあるが、頭部を鉄塊で殴られ、ともに一撃で昏倒した。

「……悪いわね。死にはしないとわ。それと痺れは、朝までには取れるから」
聞いている者はいないだろうが、言いつつ全速力で駆けていく巫女。相棒の少女も、彼女の陰に戻る。

生まれたときから忍者となるべく英才教育を受けてきた茜と、生まれたときから、陰陽術の天才と言われていた水輝の二人にすれば、あの程度の敵はわけないのだ。

むしろあんな雑魚は、痛めつけてしまったことを可哀相とさえ思う。この屋敷に忍び込んだのは、ただ暴れにきたわけではないのだから。

(近い……。こっち——！)

天賦の才を持つ水輝の、第六感ともいえる部分が、『目的』の接近を察知した。

長い廊下を直進し、なんら目印になるものはなかったが不意に左に曲がる。そこには、こんな深夜にもかかわらず明かりのついている部屋があった。障子を蹴破って中に入る。

中にいた『目的』は、いや『目的たち』は、驚きの表情を二人の侵入者に向けた。

悪趣味な金装飾の袈裟を着た僧侶。巫服の男もいれば、杖をついた変哲もない老人……。統一性はない。しいて言えば軟弱な男たちが数十という数、集まっているだけだ。しかし水輝の直感には、彼らの存在が痛いほど強く引つかかっていた。

一年前に来鑄家から出された召喚を受け集まった、陰陽師や法師たちである。

呪術に精通した人間は貴重なので、そのほとんどは基本的に、京にある陰陽寮や、国城の執政部、そうでなくとも神社仏閣から呼び声のかかることが多い。

つまり召喚令状とはいえ、実質的には招待に等しい来鑄家の要望に応じた彼らは、破戒僧や不良導師がほとんどであろう。そういったクズの類を一箇所に引き止めておくには大抵の場合、招集した人間に惜しみない散財が要求されるわけで。即ち、来鑄藤衛門氏が、無闇に敷地内の年貢高を引き上げたり、ろくな隠蔽工作もなしに人攫いをしているのは、そこに起因しており――。

「――どいつもこいつも、生きてて誰かのためにならない連中ってことね……」

人差し指と中指を立てて、中空に六芒星の印を描く水輝。洋の東西を問わず、霊と肉、火と水のように、似て否なるものを結合させる魔力を持った賢者の星紋である。その力は主に召喚、束縛、命従の強要に用いられる。

中央の六角形から、紅蓮色の鈍い二つの輝きが放たれた。それを見た途端に、動揺するばかりだった男たちは敵襲を悟ったらしい。方々に散って身構えた。

「……お供えものしてくれる恩のある人たちが、あんたたちのために苦しんでるのよ。だから死んでもらうけど……。その前に質問があるわ。時間短縮にさっさと答えてね」

傲慢な物言いだ、そうでなければ逆に違和感があるほど冷徹な声だった。神社で巫女をしていたときも、つい先ほど忍び込んだときとも違う。そう、それより以前。擂斗の里に行ったときの、残忍な天女の声だ。

「召鬼!!」

呪文印が切られるとともに、女の身体は宙に舞い、最も近くにいた男の眼前に降りた。同時に六芒の中より刃のように鋭く長い爪が出で、水輝が選んだ相手を心得ているように伸びて、男の首を掴む。巨軀な化け物の、白い体毛に覆われた太腕が。

「ひぎゃああああああああああああああああッッッッ!!」

次の瞬間あがった悲鳴は、彼本人のものではなかった。

近くで見っていた、若い僧侶らしき男である。白い塊が迫ってきたのに驚き、なにか、水輝に危害を加えそうな行動でも取ってしまったのだろう。術の行使のため印を切ることが絶対条件の術師にとって命ともいえる、両腕が、胴体から離れたための絶叫だ。

「大人しくしている。無駄に痛い思いをすることもない」

少女の可愛らしい、だが覆面を通してあるためくぐもった声が聞こえた。黒太刀を携えた濃紺の影は、一瞬のうちに男たちの視界から消える。

「く……っ！ で、出てこい式が……。……うぎやああああッッ！」

くの一の低く鋭い声は、警告でなく命令である。それを悟れなかった老人は、一瞬で目の前に現れた漆黒の太刀筋に、やはり両の腕を失うこととなる。

後ろから聞こえる悲鳴がうるさくて、顔をしかめながら巫女は、捕らえた男にやはり傲慢な口調で語りかけた。

「果心居士……。あの男を追っているのよ、なにか知っていることはない？」

顎や肩まで砕きそうな力で喉全体を締めつけていた化け物の力が、わずかに緩む。男は鼻の穴を広げてめいっぱい空気を吸った。

問い詰める女の表情は、真剣そのものだ。追っているという男の情報を与えれば、命だけは助かるかとも思い、男は頭を巡らせた。しかし果心居士といえば、陰陽師や法師の間ではあまりにも有名な人物である。当代きつての幻術師であり、陰陽師としての実力も神がかり。その実力はかの太閤様の耳にまで届き、大阪城に呼ばれたというが……。

「……か、果心居士……。し、死んでるじゃないか。十年も前に……。た、太閤豊臣に無礼を働いたとかで……。磔になって……」

かすれる声で呟く。すると冷血な天女は、あまりにも無慈悲な即決をした。

「……だったら八年前、誰も殺されなかったわよ……」

言葉の後半は、すでに化け物の口の中にある男の耳には届かない。

従容とした動作で乱れた髪をかき上げつつ、式神に命じ、今度は近くでなくなった両腕を探している男を捕らえた。

「ひい……い。たすけ……。たすけてくれえ……っ」

「……悪いわね」

泣き声で助けを求める男は、すでに出血量がひどく、頭がまともに働いていないらしい。質問をしても無駄だと思い、さっさと式神に食わせる。

「茜！ もういいわ！ あんたは先に、元締め居場所をつきとめて！」

血風の中心にある紺と黒色の竜巻に、絶叫のこだまする中大声で呼びかけた。補助してくれるのはありがたいのだが、いまのように情報源が減らされるのは困る。茜は言われたことに従い、軽く跳躍して屋根裏に消えた。

次の瞬間、残った水輝に向け浮浪者風の小汚い男が渦巻く火炎弾を放つ。だが――。

「無駄よ……」

――術というのは一般に、呪によって制御された力が放出されたあとの状態を言う。つまり発動中には制御するための力が働いておらず、術式そのものは極めて無防備だといえよう。そのため高位の術師にかかれば、発動中に対象の御力を上書きし、術そのものに乗っ取ってしまうくらい容易いのである。

そして、水輝とここにいる術師全員とでは、格が違う。

茜は万が一のことを考えてくれたのだろうが、実は補佐などまったく言っていないほど必要なかった。焔の弾丸はかなりの勢いで水輝に向かっていったが、彼女がなめし革の籠手に覆われた左手を差し出すだけで、先端が二又に分かれ、いずこかの方向へと散っていく。そうして断末魔の悲鳴がこだまし続け……。

やがて室内では、それを世界で四番目に嫌う少女とその僕以外、なにひとつ動かなくなつた。

賊の侵入を受け、真つ先に警護が固められたのはもちろん、主である来鑄藤衛門の寢室である。敵の正体や現在位置が掴めないため、外に逃げることはできないのだ。

布団の上で寝巻き姿のまま、脂汗までかいてブルブルと震えているふとつちよの中年。彼が屋敷の主人であろう。周りには甲冑に身を固めた近衛が三人ついている。他の護兵たちは、いざ賊がきたとき寢室内を戦場にしないためにも廊下に出払っているらしい。

予定外の人物がまぎれ込んでいた。贅肉おやじの影に隠れるように、若い女が一人。

いまは座っているが、立っても床につきそうなほど長い黒髪が目を引き。楚々とした品位を感じさせる女だった。細い眉、切れ長の目つき、鼻や頬の形など、全体的に線の細い印象を受けるが、身体のほうは女性的な豊満さを秘めていることが、寝巻きの上からでもよく分かる。

見た目からして用心棒の類とは思えない。おそらくではあるが、藤衛門の一人娘である夜巳嬢に違いなかった。最近急速に権力を伸ばした来鋳家に放蕩な娘がいるというのは、陰陽師を集めている件よりも噂になっている。

柔らかな肌をしているから……。刃が通りやすいだろう。

女でも見惚れてしまうような見事な肉体だが、茜が思うのはその程度である。いまの彼女の目に映る生物の判断基準は、殺しやすいか否か程度だ。

相棒が屋敷内のどこかで逃げ回って囿になっている間に、彼女は気配を消して動き回り、敵の中樞を狙う。いつも通りのごく基本的な隠密手段である。同じ里の出身であるが陰陽師として教育された水輝には、屋根裏を音も立てず動き回る技術はない。

鋭い眼光で室内を見渡し、罨の類がないだろうことを確認する茜。近衛の三人は全員が貧弱そうな少年で危険があるとは思えないが、それでも、骨格、筋肉のつき具合、肌の質からくる精神状況などを正確に観察していく。過ぎるほどの用心深さは忍びの絶対条件である。生後、二本の足で立ったときから英才教育を受けてきた天才くの一の習性といえよう。

そして危険はないと判断したのか、屋根板を破った。

瞬間。つまり瞬くほどの間があったのだから、少女にとっては充分すぎる隙だった。自身より重いかもしれない巨大な日本刀を片手で軽々と振るい、最も近くにいた少年近衛の

一人に脳天から切りつける。甲冑が思いのほか硬く、真つ二つにはできなかつたが、ちょうどいいとばかり刃に体重をかけて跳躍した。

身体を捻って刀身を遺体から抜き取ると同時に、少年もう一人に飛びかかると、胴衣から剥き出しになった白い膝で顔面を蹴り込んだ。鼻の部分が抉れ、顔が凹になる。

近衛三人のうち二人は、まさに瞬殺であつた。そして残つた一人の心臓に黒太刀が生えたのにも、一秒は要していまい。

水輝が側にいるときは彼女の血や悲鳴を嫌う性質から殺傷はなるべく控えるが、くの一である茜の戦闘技術は、相手の命を奪うことが基本である。息も乱さず三人を惨殺した少女は、顔にかかった返り血を拭いながら、獲物のほうを睨みつけた。

なにが起こつて近衛たちが血を噴いたのか、目で追うこともできなかつたらしい。父と娘はただ顔を青くするばかりだ。

「——ハッハッハッ！」

間髪を入れず、まだ布団の上で座り込んでいる来鏝藤衛門の間合いまで飛び込んだ。贅肉で段のできた喉を、太刀を持たないほうの手で握り締めると、彼女自身の三倍はあろうかという肥満体の中年の身体を、左手一本で持ち上げる。

「ひいっ、ひいっ、ひいっ！ よ、よせ！ 殺さないでくれえ！」

怪鳥のように間の抜けた鳴き声を出して、じたばたと暴れようとする男。しかし少女の

だったものから、寝巻きの着衣がぱさりと落ちた。首から下の胴体が液状化し、肌色の肉に手や足が溶け込んでいく。あつという間に肉の塊になると、なめくじにも似た軟体にいくつかの指らしきものが二十浮き出た、不気味な生物への変貌を遂げた。

あまりに想像の尺度を超えた事態に、茜の表情にも驚きという感情が見て取れる。

「式神なのか……？ —— ツツ!!」

肌色の肉塊に人の頭をつけたなにか、としか言いようのない化け物になった藤衛門が、凄まじい勢いで迫ってきた。畳の上を液体のような肉が滑る異様な光景に、反応が遅れた少女の腹部を、触手状に伸ばされた肉鞭が打ち据える。

「ち……っ、いッ！」

腹筋に力をこめつつ後方へ跳び、なんとか衝撃を分散させた。同時に壁際ぎりぎりまで逃れる——。だが流体の動きは思いのほか素早く、あつという間に間合いを詰められた。

『べぶガアああアアアああああアアアッ！』

脳は生きているのかいないのか、血走った眼球には明らかな殺意が灯っている。

恐怖という感情に疎い茜ではあるが本能的に怖気立つものを感じ、壁から天井を伝い、逃げの一手を取ることしかできなかった。だが……。

(なッッ！ し、しま——ッ)

固体として形成されていないため、人体とは比べものにならない弾性を持つ肉体に、大

大きく弾みをつけて、中空に舞い上がる。

重力と反対方向に足をつけて疾走していったくの一の眼前に、天井に貼りつくという形で化け物が跳び込んできた。次の瞬間、液体の密度が高まり拳骨のような形に変化したかと思うと、顔面を殴り飛ばされる。虚をつかれた今度ばかりは威力を拡散することができず、意識が霞むほどの破壊力を受け、床に落ちた。

「がは……ッ！」

その驚異的な反射神経ゆえ、敵の攻撃を受けることなど滅多にない茜にとっては、信じられない衝撃だった。目の前が歪み、首に千切れそうな痛みが走る。

化け物は休む暇も与えず、少女の真上から落下してきた。拳骨一発であの破壊力。全身にのしかかられたら、液体とはいえ、華奢な身体など簡単に潰れてしまうだろう。

だが――。

「召霊！ 玄武！」

――壁を突き破って出てきた巨大で半透明な亀の甲羅が、液体の式神を押しとどめた。それは術法の一種らしく、少女の身体を覆って化け物の体当たりを完全にさえぎる盾となっており、少女自身には重みが伝わっていない。

「……まったく、なにでこずってるのよ茜。それとこの気持ち悪いのなに？」

破壊された壁の向こう、廊下に立っていたのは、早くも次の印を切りだしている水輝で



「……悪いわね。気持ち悪い生き物が世界で五番目に嫌いなものよ、自分の容姿を恨んでね」
水輝が詫びを入れるのもおかしくない。水の勢いが強すぎたためか、先ほどまで藤衛門だった気持ち悪い生物は、断末魔の声もあげられず影も形もなくなっていた。おそらく床をひたす水に混じった、赤いなにかに変わったのだろう。式神に食わせるのも相当だが、こちらは無残なものである。

「……遅い……。無駄に頬を殴られた……」

大砲のような水流が収まると、甲羅に守られていた茜が起き上がった。ヒリヒリと痛む頬と、刀身が青龍の焔を受け目釘が緩んだ黒太刀を気にしながら、部屋の隅で呆然と立ちすくむ女のほうを向く。

夜巳嬢は、水槌が振りかざされたときの飛沫を受け、ぼたぼたと水を滴らせながら呆然と立ち尽くしていた。茜の鋭い視線に射抜かれても動じる気配はない。いや動じられる状況ではないようで、水輝が近づこうとすると、目を開けたままその場で倒れ込む。実父が遺体も残さず潰されてしまったことで、いや実父が液体になったあたりからだろうか。完全に気を失っている。

水輝が見た限り嬢はどうやら人間で、また反応からして呪道関連に免疫がないらしい。それでも陰陽師が集められていたことの情報を得られないとは思えないが……。そこで、侵入者を追って用心棒たちが廊下を駆ける音が近づいてきていた。

賊二人は顔を見合わせてしばし何事か考え、茜が板を破った天井から屋根裏に消える。あとには、夜巳嬢だけが残されていた。

※

鉄釜を竹で覆っただけだが随分と広く作った湯船なので、手足を不自由なく伸ばしてため息をついた。浮力で水面に顔を覗かせる二つの綺麗な乳丘が、たふんと大きく揺れる。

「えい」

「だああ……。コラ茜……。離れなさい。お風呂くらいゆっくり入らせてよ……」

ふゆふゆと揺れるたわわな膨らみを見て、抱きつき谷間に顔を埋める少女を、鬱陶しそうに引き剥がす水輝。

「ねへへえー。やーらかーい……。あつたかーい」

ついさっきまで人様のお宅にお伺いして大暴れしていたので、疲れている水輝に対し、茜はいつでも元気である。かなり強い力でひっぺがそうとしているのをもともせず、真っ白な乳房の狭間に顔をうずめて、ぱふぱふよぼよぼよと感触を楽しんでいる。戦地に身を置いているときは違い今は大人しめの人格が前に出ており、姉の言うことなら大抵は聞くのだが、こうして甘えたがるときだけはやたら強引なのである。

「……ったく……」

両手で突っぱねようにも、全身で抱きついてくる少女はなんともできない。湯治のとき

くらいはゆったりしていたのだが、好きにさせてやることにした。正直鬱陶しくもあるのだが、彼女の軽量に抱きつかれていると、母性がくすぐられるような、ちよつとむず痒い気分になってしまう。

一仕事が終わったあとなので、汗や汚れを落とすため風呂に入るのはいつもの習慣である。水輝としては一人でゆったりとしたのだが、彼女が入っていると勝手に茜が入ってきてしまうのだ。裸で甘えていられるのが嬉しいのだろう、一日に何度入ることになって、水輝がいれば絶対に、のぼせるまで一緒にしようとする。

湯につかって無防備にさらす姉の裸身は、下品なものを感じさせない、見事なまでに女性的な曲線を描いていた。胸乳は大きすぎず小さすぎず、ほっそりとした手や長い脚と、骨が浮かない程度にくびれた腹部が、艶めかしい容貌に花を添えている。特に肌質が若い弾力に満ちており、その分全体的にふつくとした肉づきのよさをより輝かせていた。

加えて雪のように白い肌は、湯治で火照って桜色に染まりなんとも色っぽい。こんな人里離れた山中でさえなければ男たちが放っておかないだろう。

顔立ちは整った美形だが、戦闘の緊張感から解放されたためか、とろんと眉尻を垂れ下げどこか可愛らしくも見えた。

「ふう……」

まだぼよぼよと柔らかさを楽しんでいる茜の頭を撫でてやりながら、大きくため息をつ

く。

今日も、結局いつも通りなんの収穫もなかった。全国に陰陽師は数多くいるが、ほとんどは占い師、観測士の類で、術法を使えるような人間は意外と少ない。それが三十人以上揃っている現場に行ってみたら、情報が入らないなんて……。

あの程度の不良法師どもが、おそらく現在日本最強の陰陽幻術師、果心居士についての情報を知り得ているなどと期待するのは甘かったかもしれない。太閤殿に極刑を命じられてからは闇に生きる人間なのだから、そう簡単に尻尾を見せることなどないだろう。だが陰陽師を集めようとしていた主人の来、鑄藤衛門ならば、なんらかの話が聞けるかも、と思っていたのに。地方の地主風情とはいえ、浮浪の法師類を集めるだけの情報網は持っていたはずなのだから。

ところが彼の正体は式神だった。おそらくではあるが、どこぞの術師が本物を殺して式をもぐり込ませ、地主の家を乗っ取るつもりだったのだろう。そう考えると一年前から来、鑄家が突如として破竹の勢いを見せたのにも、理由がつく。

では誰が？ 興味のあるところだが、それを知ることがはまず不可能である。情報は完全に途絶えたわけではないので、また日を改めて、あの気絶した夜、巳嬢にでも心当たりがないか聞きに行く予定だが……。父親がいなくなったばかりで精神的な痛手は大きいだろうから、しばらくはそっとしておきたいし、なにより期待はできない。だから式を圧殺した段

階で二人は、無駄な争いを避け帰ってきたのである。

……結局今日の夜襲では、なにも手に入らなかった。

「果心……居士……」

世界で一番嫌いな陰陽師と、二番目に嫌いな血と、四番目に嫌いな悲鳴。そのすべての元凶たる男の名を、憎々しげに呟く水輝。

里から逃げてきた八年前より、ずっと探し続けている。一般では死んだことになっているが、そうでないことは間違いなかった。処刑は十年前。だが八年前に、あの男は……。

「……？ お姉ちゃん？」

なにか呟いたのが聞こえたらしく、顔を上げる茜。

この娘も、八年前のあの事件の被害者である。その体験がよほど怖かったのだろう、肉体的にも精神的にも、大きく影響が見られた。

初雪のように真っ白な裸身は全体的にふくよかさが足りず、ほんの少しだけ萌えいだ胸乳や、こぢんまりとして形のいいお尻。伸びきらない手足の未成熟さは、世間様では祝言を考えてもいい年齢の水輝とは二つしか違わないのに、少なからずの発育不全である。

綺麗な肌をしているため、確かに幼めいた妖しい魅力があるのだが……。肉体的な発育の遅れが、いまのようにやたらと頼りにしている人間にくつつきたがる、精神的な発育不全にもつながっている。問題といえれば先ほど屋敷で見せた残酷な性質への、人格分裂もそ

うだが。

肉体的、精神的に幼児性が抜けきらないのは、幼児期に味わった恐怖体験の影響である。自分ではどうしようもない事態に直面し、自身を無力と思ったとき、最も無防備で最も庇護を受けていた赤ん坊のころに戻ろうとする、本能的な自衛作用の一種だ。

茜の症状はかなりひどかった。錯乱が著しく、親代わりになった水輝が懸命に面倒を見なければ、あのまま狂死していただろう。

「お姉ちゃん、どうしたの？」

「ん……。なんでもないわ」

自分の背丈ほどもある、大人が使う刀を持って、たった一人で血煙立ちのぼる中泣き喚きながら歩く少女の姿を思い出し、水輝は切なくなった。ぶんぶんと首を横に振って暗鬱な気分を追い払い、気だるそうな声で応じる。それから、その成長することを嫌がった小さな身体を、ぎゅっと強く抱き締めた。

「……？」

不思議そうに首をかしげ、上目遣いで顔を覗き込んでくる茜。半身浴の彼女にもたれかかったところで抱き締められたので、顔の半分が湯につかってしまい……。

「ぼーびぼー？」

「ふえあうっ！」

どーしたのー？ 分のボコボコがあげばらをくすぐって、思わぬところで奇襲を受けた水輝は、裏返った声で悲鳴をあげつつ飛び上がった。

「うーわー、びっくりしたあ。なにすんのお茜」

「だって、お姉ちゃんが無視するのが悪いんだもん。どうかしたのって聞いてるのに」
驚きすぎた自分の反応が恥ずかしいらしく、照れ隠しに怒った顔をする水輝に、茜は唇をへの字にして、上目遣いで睨み返した。しかし目つきの勝負では、八年前から母親代わりに育ててくれた姉貴分の彼女には敵わないと、重々承知の上らしい。すぐに諦めたように真剣な目をやめ……、にへらへらと悪戯っぽく笑った。

寒いものが背筋を走り危険を直感する水輝だが……。

「とえりやあつ！」

「うわああつ！ やめつ、こつ、こらああッ！ 茜えつ！」

逃げるにはいささか遅く、背中から羽交い締めにされる。

「えっへっへえ、につがしませーん！」

背中から脇、お腹へと回って、少女は楽しそうにボコボコと息を吹きかけてくる。

「びばはらいつてばあ、おべえばん。ばぶぶろおーっ」

なにを言っているのかは分からないが、調子づいてくる茜。肌が敏感というか……、水輝が非常にくすぐったがりなことを、妹の彼女は知っているのだ。

「くひゃ、あつ、ふえあつ！ ……うううッ、こんのおっつ、あか……つねえつっ！」
くすぐったいだけなので熱くなるのも大人気ない話であるが、基本的に水輝はこの妹分にしてやられるのが気に食わない。反撃に出るため身体を反転させ、向こうのまっ平らな胸部に口をつける。

「だぼだぼだぼだぼらあああ〜〜〜つつつっ！」

「ふいにやあああうっ！ だつ、だやああああんっ！」

自分がやりはじめたことだが、身体の芯を奮わせるようなくすぐったさは、思いのほかこたえる。反射的に逃げようとした少女は、運悪く……。

「ごえる……っ」

ガイーンッと後頭部を湯船のへり、鉄が剥き出しになっている箇所につけた。

「〜〜〜〜〜！！」

「ふう……」

声も出せず轟沈して、身悶えている彼女には悪いが、ようやく平穩が戻り水輝は改めて湯につかった。まだちよつとあばら骨のあたりにもぞもぞした感じが残っている気がする。意識をそらすため、大きくため息をつく……。

「……!?」

不意になにか、直感に奇妙なものが走った。立ち上がると湯気を逃がすための窓から外

を覗く……。しかしそこに異変はなく、老人が一人しゃがんでいるだけだった。

老人も別段怪しい人物ではない。というか人ではなく、水輝の作り出した式の種類である。いくらへんぴな場所の神社とはいえ、巫女二人しかないのではおかしいため、人型の紙術符に呪詛をかけ、神主に見えるようにしたのだ。ちなみに、少女二人の世話係を兼用しており、いまは風呂の釜焚きをしているところである。

「……いま……、なにか感じなかった？」

見張りの意味合いも兼ねている式に、神妙な顔で聞いた。直感から、外に誰かいるのではと思ったのだが。老人はなにも感じなかったらしい。首を横に振る。

「……気のせい……。かな……。？」

仕事をしたあとは神経が異常に昂ぶって、たとえば昆虫の縄張り争いのような、ごく些細な殺気でも感じ取ってしまう。それは並外れた感性の持ち主である彼女ならば、珍しいことではなかった。それでも妙に気になって外を眺めていると……。

「…………。あ？」

それよりよっぽど気になる気配が、太腿にくっついたのを感じた。見ると復活してきた茜が、腿に唇をくっつけているところである。

「ふえへへへへへえ……」

「……のっわあ！ あ、あ、あんた！ まだ続け——つつ。……あつ、ああんっ！」

そんな感じで、二戦目が始まってしまい、水輝の注意は『なにか』の気配から離れた。だがそのとき。不意に……、外で『なにか』が動く。

群青色に濡れ光る禍々しい鱗を持った、随分と小さな蛇だった。そこいらのみみずより少し大きい程度の太さ、長さしかない。

それは数秒だけ目玉をぎよろつかせながら辺りを見渡すと、草葉の茂みと消えた。

第二章 異変と海蛇

ふにふにしてあったかな感触を枕にしたおかげで、ちよつと息苦しいのはあるけど、夢も見ないほどぐっすり眠れた。そのことと昨日はかなり遅くまで起きていたことが相まって、目を覚ましたのは随分と日の高い時間だった。

茜は朝に弱いので、目が覚めた、といつてもボーっとしている時間が長い。水輝の胸に顔をうずめてムニムニしながら、頭の覚醒を待つのが日課である。といつても大体そのまま二度寝してしまうのも日課になっているが……。

今日は運がいいというか悪いというか。すぐ起きることになった。

「ぐえ……っ……！」

冬は油断すると凍死するくらい本格的に寒いので、二人は自然と一緒の布団で寝るようになっていた。それでなんとなく身体の小さい妹分が姉の柔らかい場所を枕にしている、逆に身体の大きい姉貴分は妹分を抱き枕にしているのだが……。たまにものすごい力で抱き締められて洒落にならない痛手を負うことがある。

「ばぼらあつ！ ……あ……うわあり、死ぬとこだったあ……！」

首と腰を思いきり圧迫されて気が遠くなったため逆に眠気が飛んだので、乳房のふかふ

か感を利用して脱出した。首を左後ろに回すと痛い。

「んあ……。ああ茜……。おはーよー……」

同じ布団なので片方が目を覚ませばもう片方も起きる。少女が慎重に首を回しているのを不思議そうに見ながら、欠伸混じりに挨拶して一足先に床を抜けた水輝は、寝巻きの浴衣を脱いで、ひんやりと冷たい巫服に身を包んだ。

茜のほうも、首が痛くて上手く肩を回せないうえ服が冷たいので苦戦したが、なんとか着替えが完了した。二人して顔を洗うため水場に向かおうと障子を開けて外に出る。頬に痛いほどの冷気が刺さってきた。季節柄もあるが、山頂に建立されていることが大きく作用し、朝の冷え込みは、もう寒いというか、痛い。

「水輝様、茜様……」

外には昨日、風呂焚きをしてくれた神主型式神が立っていた。神社を訪れる参拝者には好々爺の顔を見せるが、いまは必要ないと朴念仁のようなのっぺり面で一礼する。

茜はごく普通におはようと返したのだが、対して、水輝のほうは主人だけあってなにかを読み取り少し真剣な顔つきになった。

「昨夜、侵入者がありました。これです」

頭を下げて挨拶を返し、左手で摘んでいたものを差し出す男。それは、頭部があったのだから部分が踏み潰されているが、胴体から見た限り蛇のようだった。

「踏み潰したとき、逃げようとしませんでした。偵察のためだけに作られた極めて下級の式のようなです。珍しい種類の海蛇を象っていますが、おそらく実体は型紙でしょう。本物はこの付近ではごく限られた海岸に、ごく少数しかいませんので」

「ふうん……」

「ほえ……。珍しいね海蛇なんて……」

すでにその猫のように丸く鋭い目に、知的な輝きを宿らせ侵入者に興味を持った水輝。茜のほうはまだ眠そうで、蛇を見ているというより閉じそうになる目蓋を必死で開けているだけのようだ。

式の外見はほとんどの場合、術師が必要に応じた形に設定する。たとえば神社の巫女に対して神主。地主の屋敷に対して地主。といったように。

だが偵察に使う式神に海蛇の姿をつけるとは随分とおかしな話である。目立たないことが第一目的なのだから、鼠や昆虫にでもしておけばいいのに。海辺以外では目立って仕方がない生き物の姿を設定するとは。

そう考えると、この式の主は海蛇に対して特殊な感情を抱いているだろうことは想像に難くない。神主の言う『ごく限られた海岸』にしか生息しない海蛇に。

また昨日の夜に侵入を受けたとなると、昨夜の事件絡みの人間が下級式に尾行させていたと考えるのが自然だ。昨夜の事件に関わって食われなかった術者はいないはずだが、た

だ一人、地主型式神を操っていた人物だけは、関わらずして事情を知っているかもしれない。つまり……。

「その海岸ってのは……。どこなの？」

……あの藤衛門型式神を操っていた人間が、『ごく限られた海岸』にいるかもしれないということである。寝起きで少々乱れている髪を手櫛で整えながら水輝の瞳にはすでに、昨夜の黒い色が灯っていた。一方の低血圧でまだ頭が働かない茜を見ると、

「茜は朝食の用意してて、誰かきたら油断しないようにね」

長めの髪を、頭の後ろでひとまとめにしながら言う。術師を相手にするということは式神と戦うということ、昨日の肉水化した藤衛門のような人外の化け物を相手にしなければならぬ。対人用戦闘術しか仕込まれていない茜では足手まといになる局面も出てくるだろう。それに偵察されていたのだから、この神社は場所が割れている。水輝のいない間、守りを固めておく必要があった。

一旦堂に向かって、戦闘用の衣装に着替えた。歯で器用に箆手の紐を結びながら飛び出してきて、次に箆手の裏側に取りつけられた護符を、足に貼る。

万里図ばんりずという高等な霊札である。その効用は、近づくものに反発力を与えるという特殊なもの。つまり腕につければ敵の攻撃力をそぎ落とす万能の盾となり……。

「じゃ、ちよつと行ってくるから」

言うが早いか地を蹴った水輝の身体が、鳥が制する高さにまで跳び上がった。足に貼れば、足と地面とが反発し合って跳躍力、また走力を劇的に上昇させる。「行つてらっしゃい！」

難しいことは分からない茜は、ごく日常的なことなので手を振って見送った。

それから大きな欠伸をもらして、とりあえず顔を洗うため炊事場に向かう。井戸から桶に水を移すと、濡らさないよう裾をまくって手をつける。

指が凍りそうなほど冷たくて、思わず少女はひゃつと短く悲鳴をあげた。それから慎重に指先を濡らしていくと、雨の降る前の猫のように湿った手で顔を擦る。

別に指先をつけただけで眠気なら取れたし、この冷たさをそのまま顔に押しつけるような勇氣はなかった。

それからお堂のほうに向かう。そこには昨日もらったままの状態で、風呂敷包みの奉納品が置きっぱなしにしてあった。一応神様に献上されたものではあるが、感謝の気持ちならばあの里を実際に救った水輝と茜にこそ与えられるべき品々なのだ。ありがたく朝食にさせてもらうことにする。

とりあえず今日は、贅沢だけどお米を使つて……。

「粗末な社よのう……。わらわの着物が汚れるではないか」

「——ッッッッッ!？」

心臓が飛び出そうなる驚きに声もあげられない茜は、凄まじい跳躍力で後退し声の主から間合いを取った。

……昨日とは明らかに雰囲気の違う女が、乾いた冷笑を浮かべながら立っている。

夜巳嬢である。眉根と鼻梁の整った優美な顔つき、見事な肢体は昨日とまったく同じ。だが印象の随分と変わった美女が、顎を引き口元を手で押さえ、こちらを見ていた。

ことさら豪華な装いである。くるぶしを覆うほど長い髪には、珊瑚を材料にしたのだから地方民族色を匂わせる髪飾りをつけており、てっぺんには黄金の冠を載せている。

鋭い眉立ちや高貴さを漂わせる鼻梁の整いは、ただでさえ絶世の美女とも呼べるほどだったが、ぷっくりと肉厚気味の唇にさされた紅の濃さが、それをさらに引き立てていた。加えて肉体の、胸元や腰つきの豊満さ、美しさは、まだ『可愛い』年齢を抜けきらない茜や水輝の持たない艶に満ちている。

着ているものは、首筋は胸の谷間をしつかり覗けるほど開き、脚は太腿や臀部にさしかかる部分まで肌を見せた露出度の高いものだ。金銀の細工をあしらった真っ白な布地に、血の色ともいうべき紅蓮色で呪詛のような文様が塗りつけてある。着物はそれ一枚で、面積が少ないだけでなく、生地が薄いため雪肌と違い色の濃い乳首や秘毛といった部分は、透けて見えてしまっていた。

恐れ多いほど美しく、扇情的で、濃艶な容貌である。確かに着衣は、汚れるのを気にす

るのが分かるほど豪華な品だ。

しかしそれ以上に茜の興味を引いたものが、その表情だった。

昨夜の怯えていた女とは正反対の、見る者に恐怖を与えるほど凄然とした笑みを浮かべているのだ。

(ど……、どうして……?)

この神社に近づいた常人であれば、茜はほぼ確実にその気配を察知できるはずであった。いま目の前にいるこの美女が常人でないことは、狂気じみた表情を見るだけで瞭然としている。しかしここまで接近を許して気づかなかつたなどと。信じられない事態であった。

「——ッッ！」

少女は弾かれたように堂の隅にある掛け軸のもとへと走る。

水輝が籠手を取り出したときに開け放していた隠し戸の中から、愛用の得物を取り出した。

里を出たときただひとつ手にしていた、彼女が使うには大きめの忍者刀である。同時に巫服を脱ぎ捨て、昨夜の忍び装束姿になった。

その姿になるということは、八年前のあの日と同じ、血で血を洗う地獄にいと、自身に合図を送るということ。

即ち茜が茜でなくなることであり……。茜が、茜に戻るということだ。

「……何者だ。どうやって入った……」

近寄る人間は、水輝以外はみんな敵。それが彼女の行動理念、常識にあたる。

昨夜目釘を改めた際に砥ぎ直して切れ味の高まった刃を、女のほうに向けた。

……いまにして思えば昨日。来鏗藤衛門が正体を現したのは、奴自体に危害が及びそうになったときではない。彼女に刃を向けた瞬間だったではないか。

「どうやって入った……、とな？ フフ、どうということもない。入れてもらったのじゃ」
少女が戦闘の意思を示しても、夜巳は余裕の態度を崩さない。口元に手をあてた艶っぽい動作でクツクツと寒々しい微笑をこぼしながら、視線を横に向ける。

のそのそとやってきたのは……、無表情の老人。この神社の神主である。正確には神主型の式神であり、侵入者を撃退するよう命じられていて、絶対服従のはずだったが……。

(乗っ取られたか……)

茜は口の中で舌打ちした。術や陰陽道に関しては水輝に任せきりなので、あまり詳しくは知らないのだが。式神というのは根源にある部分に呪を埋め込んだ霊的な細胞物質の塊であるらしい。つまり核となる部分は、常時発動し続けている術法と同じ。となると術師が相手の場合、中枢の呪詛を上書きされる危険性もあるということなのだ。

そして水輝が作り出した式神を手玉に取るということは、相当な術師に違いなかった。

こいつは危険だ……。本能で悟った茜は、刃先を抱き込むように、身体を小さく見せる

構えを取った。忍びの戦いとは本来、逃げ回りつつ敵が隙を作るのを待ったり、相手の心理の裏をかくことに終始するものだが、茜の場合は水輝の相棒をしている以上真っ向からの実戦が避けられない。そのためたつたひとつ覚えておいた、必殺の構えだった。

「殺す……殺す……殺す……殺す……」

少女には大きすぎる刀を重心とした、動きやすく防護作用に長ける体勢。そしてなんと言っても特筆すべきは……。

「……死ね！」

……突進からなる一撃必殺性能の高さである。

ギリギリと鋭く黒光りする切っ先を向け、一直線に走っていく茜。案の定、神主型式が身を挺して夜巳を庇おうとしたが、ある意味機械的ともいえる式神の反応など計算できないはずもない。少女の刃は躊躇なく、老人の胸部を真っ二つに切り裂いた。

根源を貫かれたため物質と霊質が剥離し、式神は人型に切られた紙に戻る。少なくとも昨日の夜までは味方だった存在を切り捨ててもなんの感慨もなく、非情なくの一は瞬間的に体勢を整え、切っ先を改めて夜巳のほうへ向けた。

これだけの距離ならば一足で跳びかかれるが……。万全を期して、深く踏み込んでから突刺につなげる。

「元気な娘よ……。じゃが、わらわは、もう少し淑やかなほうが好みじゃぞ？」

巨大な太刀が一直線に向かってくるのを見ていながら、気が触れたように愉快げな笑みを崩さない女。なぜそうも余裕でいられるのか少女には分からなかったが、直後、理解せざるを得ない事態が起こる。

大振りの一撃を放った直後、少女の視線が宙を泳いだ。

いまのいままでそこにいたはずの女の姿が、見当たらなかったのだ。

避けられたどころの話ではなかった。くの一として鍛えられた彼女の動体視力を持ってしても、向こうの動きを、目ですら追えなかったのである。

「痛い思いをすることもなからう……、黙ってわらわに従うがよい。わらわはそなたらが気に入っておるのじゃ……」

聞いているだけでもおぞましい笑い声は、耳の後ろから聞こえた。直後に氷のように冷たい指先が、首筋に触れる。

「畏にかかった法師の娘には少々昨夜の償いをしてもらうが、それが終わったら、二人揃ってわらわの僕にしてやろう……」

「——ッッ！」

触れられた箇所は熱のようなものが走り、覆面に使っていた布がはらりと落ちる。首の肉が削ぎ落とされるような気がして、茜は前方に跳躍し逃げようとした——。

「少し……。落ち着くがよい」

——だが、肌をあわ立たせる少女が跳びのこうとする寸前、頸動脈に痺れが走る。そのわずか一瞬で、歴戦不敗の若きくの一は、気を失うこととなった……。

……意識を取り戻したのはすぐだった。ガンガンして不快な痛みが残る頭で、なんとか状況を把握しようとする。

「……………っ……………？」

いま自分がどうなっているかは、手を動かしたただけで分かった。正確には手を動かさそうとしただけで、両の手足をなにかに縛られ、身動きが取れなくなっていることが分かる。

着衣にはさほど汚れや傷はないものの、縄抜けができないよう肘から先、膝から下がぐるぐる巻きにされているため、縛られた部分が赤く腫れていた。床に大の字に寝かされているようだが、首以外はまったく動かせない。それどころか少しでも動こうとすると、手にヒリつく痛みが走り、茜は奥歯を噛み締めた。

(くそ……………。すまない水輝……………)

自分より素早い相手に容易くやられ、完敗。そして堂の中で縛り上げられた。という状況に関しては、すんなりと受け入れた。意味もなく感情で思考を浪費するよりも、いまだきる最善の策を探す。それが忍者の思考というものである。

堂内は暗いのでよく見えないが、どうやら周りを取り囲まれているようだ。人影が四つ。

そのうちひとつは、奇抜な服装から夜巳だと分かる。

そして残る三人を見て、少女は真っ青になった。全員見覚えのある顔だったのだ。

庄屋の息子が着るような小ぎれいな服に身を包み、歳は茜より少し上程度だろうか。整った顔立ちにひどく軽薄そうな笑みを浮かべた、不気味な雰囲気を漂わせた美少年たち。

着ているものこそ違えど、なよなよとした風貌は変わっていない。昨夜茜が切り殺した少年たちである。心臓を突いたり鼻をへこませた二人ならともかく、一人は脳天から真つ二つにしてやったはずだが……。全員そういった傷のあとは、一切見られなかった。

「おや、目を覚ましたようです。姫様」

勝ち誇ったような視線をくねながら、主に告げる少年。女は確か一地主の娘にすぎなかったはずなので『姫様』というのは、部下にはそう呼ばせているだけなのだろう。もっとも本当に『地主の娘』であるのかも、いまとなっては怪しい話だが。

「フフ。手荒なことをして悪いが、縛らせてもらったぞ。なに、内側の呪縛が完了すればすぐに解いてやろう」

膝について顔を近づけてくる夜巳に、茜は感情を知らせぬよう顔色を凍らせて応じた。実際には五感をすべて使って辺りの様子を把握し、なにか反撃の材料はないかと探索しているのだが……。どの策も手足の縄が邪魔をする。奇襲をかけるには、縄をつなげてあるこの社の柱をすべて筋力だけで破壊しなければならぬだろう。驚異的な身体能力を持つ

とはいえ、人間である茜には荷が重すぎた。

姫君はそんな彼女の攻撃性に気づいているのだろうか。逆に挑発的なほど顔と顔を近づけ、紅で艶やかに濡れた唇で頬をくすぐってくる。肺が腐るほど甘ったるい吐息がかかり、少女は寒気を覚えた。触れられている頬から首筋にかけて肌があわ立っていく。

「ククク……。すべすべした肌……。ういものよ、ひよつとするとおぼこか？」

頬に紅を塗りつけるように唇を滑らせながら、不気味に咬く女の手が、着衣の上を這い回りだした。少女の感覚や感情がすべて分かっているように指先の動きは実に巧みで、胸や腹部に冷たいものが触れ、蠢くごとに、少女の肌には鳥肌が広がっていく。

「未熟で芯の硬い身体じゃ……。たっぷりほぐしてやらんとおう」

薄い胸板の感触を確認して夜巳は、少年たちのほうに手を差し出した。応じたのは顔つきの大入りびた少年で、大きな筆を取り出して主に差し出す。その顔に、昨夜少女の蹴りで潰された跡は見れなかった。

筆を受け取ると、それまでの優雅な動作とは打って変わって、乱暴に少女の顎を掴んで引き上げる。仰け反ってさらされた白い喉に毛先を押しつけると、下腹部まで一気に引き下ろした。十字を切り、その上になにか文字らしきものを記しつけていく。

（紋呪……。くそ……。やばいか……）

帷子で覆われた胸元や二の腕を毛先が通ると、不快感とは少し違う、くすぐったさの入

り混じった怖気が背筋に冷たく走る。墨もつけられていない筆先から黒い筋跡が残されていった。どういう効用があるかは分からないが、呪術に間違いない。

「さあて、見せてやるかのう……。わらわの五通神法はそこのまがい物とは違うぞ」
筆を放り捨てると、中空に水輝と同じ動作で印を切る夜巳。

「召魔、五通神！」

青白い光を放つ指先が中空に描くのは、逆さになった五芒星だった。始点と終点を結ぶと、それは溶け落ち、禍々しい輝きを放ちながらどろりと少女の着衣や肌に刻まれた黒い呪文部に染み込んでくる。

「くくくッッ！ ……ぐ……っ」

体内になにかが侵入してくる——。その不快感に、肉体的な痛苦であればなんとも感じない茜ですら、わずかながらうめき声をもらしてしまった。

「これしきで終わ리と思うな……。見よ！ これこそが我が秘術！」

もう一度後ろに伸ばした姫君の手に、三人のうち、昨夜顔面を真つ二つにした少年がしなだれかかった。途端、彼の様相におぞましい変化が起こる。昨日の液化した藤衛門のように手足が胴体に吸い込まれ、その肌は、群青色に染まっていった。美しい面立ちは縦に伸び、目玉が黒一色になり浮き出る。

人間ではないと思っていたが、全身が鱗に覆われた、長さ太さともに人の腕ほどもある

巨大な蛇の式神だったようだ。体内に入りこんできたドス黒い感覚に身悶えする少女に、ずるっずるっとして特有の緩慢な動きで粘液を帯びた群青色の爬虫類が近づいていく。身震いするほどの悪寒に苛まれ、逃げようと四肢をばたつかせる茜だが、間接に食い込むほどきつく縛られた縄は一向に動こうとしなかった。

やがて蛇は少女の胸元に到達すると、五芒星めがけて眉間を押しつけてくる。

(うあ——っあっあっ……！)

心臓にほど近い場所に刻まれた五芒に、まるで風穴でも開いているような光景だった。鱗に覆われた生物の身体が、その部分に埋没していくのである。

見ているだけで気が狂いそうな光景だった。加えて、着衣や皮膚を通り抜け、神経や血管のある身体の内側に、なにか別の生物が触れている感触すらはつきりと分かる。ガクガクと背筋が本能的に震えた。

尻尾をくねくねと波打たせながら、蛇はものの数秒で、その長い胴体を文字の中に埋没させる。少女自身の肘から指先ほどもある体積で、身勝手に皮膚下を這いずる気色悪さが感じられた。気が狂いそうなほどの異物感が、肌の内側に蠢き、くねっている。臓器には触感を感じる神経はないが、触れられていることを示すように、胃の内容物が逆流しそうになった。

肺や膀胱や腸など、全身に体内のものを排出するための嘔吐衝動が湧き起こった。頭の

中が真っ白になるような怖気に悶えながら、少女は唇を閉じようとする。

「ほう……。声のひとつももらさぬとは、さすがにあの果心居士を追う者、というわけか」

「——ッッ!？」

吐き気、尿意、便意をこらえるためきつく目を閉じていた茜は、思わぬところで水輝が追いつける敵の名が出て、開いた瞳を夜巳に向けた。

「……知っているのか……。果心居士……」

全身が侵入者への拒否反応を示しているため、上手く働かない喉をなんとか震わせる。

「フフ……。いつか師が仰った、果心居士の生存を知るくの一の少女。やはりお前のことだったか。すると一緒にいたあの法師は……。やはり師の仰っていた……」

あの日、少女の記憶に刷り込まれた男の名を、師と呼ぶこの女……。

「残念ながらいまとなつては、わらわにもあの男の所在は掴めぬ。しかし案ずることはない……。今日からは、わらわ以外の何者も心に住まわせておくことができぬのじゃからの」
服の上に描かれた黒い紋様が、突如として猛烈な熱を放ち始めた。

「余談はこれくらいにしようか……。これこそがかの非道な幻術師より賜った秘呪!」

「~~~~~……っ……」

宙に新たな印を切った夜巳がその手を胸の上に載せた瞬間、少女の心臓は、破裂せんばかりに高鳴った。ごぼつと肺が気持ち悪い音を立てて、口から空気が逃げる。

押し出された血液に乗って、なにかひどく穢れたものが、全身の隅々までいきわたっていくのを感じた。注ぎ込まれた青白い液体上の光が、細胞のひとつひとつに汚らしく染み込んでいく。それは急速に精神を侵食していき、身悶えする少女の瞳からは、生気の輝きが失われていった。

青白く輝く汚液と、侵入者であった蛇が、同時に少女自身の最も深い部分に入り込んだのだ。それは侵入ではなく結合、同化というほうが正しい。

神経を直接羽根ぼうきでくすぐられているようなじれったさや、お腹の奥に火をつけられたような熱さが込み上げる。ひどく切ない疼きに、少女はか細く息をもらした。

「……あ……、あ……」

ほんの数秒のうちに身体の大事な部分を侵され、力尽きたようにその場がっくりと脱力する茜。異変の凄まじさは、彼女の額にじっとりと浮いている脂汗で分かる。

「クク……っ。これでそなたはわらわのもの……」

妖しく狡猾な笑いをもらしながら、勝ち誇った様子の姫君は、するすると手を伸ばして少女の服の内側に入れた。

人間味に欠けるほど冷たい容貌の少女だが、その肌は温かく、萌え出でる成長途上の少女特有の心地よい弾力がある。緊張でしこり立っている乳首に触れると、ピクッと可愛らしく身体が震える。

「いい身体じゃ……。フフフ、忍びの特性か？ 随分と神経が敏感なようじゃのう。これならわらわが仕込んでやれば、最高の快楽が味わえよう」

触っただけでいい反応の返ってきた突起を、親指と人差し指で挟んでコロコロと転がされる。恥ずかしげに口をつぐんだ少女は、ンッンッとこらえきれず鼻から吐息をこぼしたときおり強めに摘まれると、思わず背が弓なりに仰け反ってしまう。

鎖骨部をくすぐってから、ゆっくりと下ろしていきじつとりと汗ばんだ脇に触れる。そしてなめらかにくびれた腹部へと滑らせていき……。

「……あ……。あ……。そ、そこ……」

まともに思考や身体の組織が働かず、舌足らずな声で呟く少女。

「そこ？ ククッ、分からぬのう、どこを触ってほしいのかえ？」

彼女が望むべくを知っているだろうに、意地悪く口元を歪めた夜巳姫は、おへそ周りの微妙な部位をくすぐり続けた。

「うう……。く……。あ……」

不快ではない熱が、下腹の奥にあるなにかをも熾烈に疼かせている。少女はその痛みとは違った奇妙な感覚に、乱れた呼吸でか細く喘ぐことしかできなかった。高慢な陵辱者である美女は、クスクスと楽しそうに笑いながら、もう片方の手で少女の首筋に触れる。

それだけで茜は、電気が流れたように大きく全身を引きつけた。



「……まったく……、可愛い娘じゃ……」

静かながら悶え苦しむ美少女の姿を見てみると、嗜虐的な悦びが満たされる。姫君はうっとりとした表情でその線の細い身体をまさぐりながら、柔らかく甘そうな唇に、煌く紅色の唇を寄せていった。

少女は喘いで呼吸しかできないため、唇はわずかながら開いたままだ。艶っぽく濡れ光る舌を差し込み、互いに絡め合う――。

「……ッッッッ!?」

――素早く飛びのいた女の口からは、数滴の血が滴った。すぐに手で押さえたが、それでも綺麗な着衣の裾は、赤い液体で染まっていく……。

「……チッ……。はずしたか……」

女の唇だった、濃厚な紅のひかれた肉片を、ペッと吐き出す茜。

「舌まで抉り取ってやれると思ったが……」

今日初めて驚愕の表情で目を見開いている夜巳の姿が愉快で、人間的な感情を露にして罵倒の言葉を低く呟いた。

忍びの人間にとって最大の武器とは体術でなく、何事にも動じないその精神性である。神経を激しく昂ぶらせるとともに、常人なら間違ひなく発狂させただろう理性を鈍らせる強烈な術法ではあるが、少女の理性を削り取るには至らなかつた。ただ狂わされたふりを

してのせつかくの反撃も致命傷に至らせることはできなかつたようだ。

「き……っ、さま……！」

同性に容易く唇を寄せる淫蕩な姫君は、凄まじい怒りの形相を見せた。

気分的にはもっと挑発的なことを言つてやりたい心境だったが、茜は口を閉じ、無言を保つことにする。本当ならいまの一撃で舌を引き抜いてやるつもりだったのに。唇の一片しか奪えなかつた。無駄にあちらを怒らせてしまったので、あとはなんとか命を奪われないう時間を稼ぎ、水輝が帰ってくるのを待たなければならぬ。

(できれば……、果心居士の話がしたいけど……)

などと勝手なことを思っていると、しばらく怒りに顔を歪めていた女が、突如として口を押さえた手をどけ、深く抉られた唇から赤い液体をこぼしながら、にまあつと不気味な笑みを取り戻した。

「フフフフ。わらわの術を受けても堕ちぬとは……、ますます気に入ったぞ……」

これまでの、あくまで整いを忘れない美貌とは明らかに違う、本性ともいふべき表情だった。爬虫類めいた寒々しい目元はニンマリと狡猾に撓み、口元は面妖なほど色っぽく、三日月形に歪んでいる。

「だが少々調子に乗りすぎておる……。仕方あるまい、優しいわらわの手でじっくりと開花させてやろうと思つたが……。罰もかねて少々苦しい思いをしてもらおう」

演技じみたところはまったくくない。さも残念だといわんばかりに、女は凍てつくような視線を残して踵を返した。

同時に、周りで待ちぼうけていた少年二人の顔に喜色が浮かぶ。

「わらわはもう一人の……、あの娘を連れてくるとしよう」

姫君は従者に指で指示を出して身軽な動作で堂の外に出ると、おそらく水輝と同じ万里図を用いたのだろう、一足で驚異的な高さまで跳び上がり、山を下りていった。

少年たちが、磔にされた哀れな少女のもとへと歩み寄る……。

少年二人は、顔立ちに端整であるという共通点こそあれ、印象は随分と違っていた。昨日顔を潰されたほうは、大人びた雰囲気、全体に色が白く、線の細い印象を受ける。相方の心臓をひと突きにされたほうは、紅顔で、いかにも美丈夫といったところか。

見た目の印象は正反対にも思えるが、兄弟のように似て見えるのは、その目つきがそっくりなところに関係しているだろう。つり目がちでなにを考えているか分からない、死んだ魚のように濁った色艶をしているのである。おそらく先ほどの一人と同じ、蛇型の式が化けている姿なのだろうが、それを知らない人間には、死体が動いているように見えるかもしれない。それほどに生気が感じられなかった。

ただひとつ、瞳に残虐な輝きを灯していることを除けば。

「うふふ、楽しみだよねえ太助……。清正きよまさに入られて狂わなかった子は初めてだけど。うふふふふつ。これはこれで……。ふふつ、うふふふふつ」

「弥彦やひこ、いいからさっさと済まそうぜ。こいつ見かけによらず結構凶暴だ」

弥彦と呼ばれた気持ち悪い笑い方をする、昨夜顔を潰した少年と、太助と呼ばれた、雑な口ぶりの心臓を貫いたほうの少年。

二人とも夜巳姫の狂的な性質と攻撃的な性質に影響されているらしい。言葉に出た清正というのは先ほど蛇になった者のことだろう。どれも危険性をはらんだ式神だと分かり、茜はわずかに眉をひそめる。

「うふつ、うひひひひつ。姫様とは随分違うけど、可愛い身体だよねえ」

まずは肌触りなどを確かめるよう、一人して大の字で寝転ばされた茜の両脇に座ると、服の上から身体中のいたるところに触り始めた。

「……っ」

たったそれだけで少女は、わずかながら身体を震えさせた。

理性を鈍らせ、同時に神経を過敏にする術の効果は、消えたわけではなかった。着衣の上から肌に触れられるだけで、全身が戦慄くほどの疼痛感が走る。

「田舎娘にしちゃ質のいい身体だな。肌がすべすべだ」

腿の内側から際どい部分にかけて、太助がやや乱雑に撫で上げてきた。生温かく汗ばん

だ皮膚が触れる不快感に胸がむかついて、吐き気すら催しだした茜は、なるべく感情は殺しておくべきと分かっているのに、苛立った視線を二人に向けてしまう。

顔つきや目元は可愛い少女のそれだけに、目つきひとつでも殺気をはらませると、射抜かんばかりの恐ろしげなものへと変容する。相手は縄につながれているというのに少年たちは、恐怖から顔を青くした。

(……………。水輝……………)

悔しいとか口惜しいとかの感情もあまり持たない茜ではあるが、こんな雑魚どもに好きにされて抵抗できないとなると、さすがに自分への腹立たしきがある。

「……………た、太助。もっと徹底的にやらないと……………、ね」

「あ、ああ。そうだな……………」

幼いうえに、拘束して動けない女の子の視線で動揺してしまったことが恥ずかしいらしい。誤魔化すように二人は顔を見合わせるとその場から離れた。しばらく堂内をうろついて、なにか『徹底的にやる』材料を探す。

そして目に留まったものを、堂の中央で寝かされている少女のもとへ運んできた。

乱暴そうな少年、太助は、少女が気絶させられたとき手から離れた、黒塗りの大太刀を。大人しそうな色白の少年、弥彦は、昨日運ばれた揺斗の里人からの奉納品を。

「こりゃ随分と使い込まれた刀だな。昨日は……………、痛かったぜっ！」

両手で支えて、昨夜自分が刺された箇所と同じ、少女の心臓部に先を突きつける太助。刀の扱いに心得はあるようだが手元は危なっかしく、ギリギリで止めるつもりが先端を衣服の上に載せてしまった。重みで布地にわずかながら切れ目が入る。黒い生糸製の帷子に覆われた目を奪われるほど白い肌が、わずかながら扇情的に覗いた。

だが、ともすればそのまま皮膚を破っていたかもしれない愛刀の脅威にさらされても、まだ年端もいかぬ少女の顔つきに、動じた色は見られなかった。脅しが通用しない。むしろ冷やかな目で見られ、手先が狂ったことを馬鹿にされたように感じたのだろう。太助はびくつきながら、得物を引く。そして困ったように相棒を見た。

「ダメだなあ太助。僕なんか思いつき蹴られたけど気にしてないよ。うふふ、それに恨みを晴らすより、姫様の仰ったことをまず完遂するべきだろ？」

クスクスと、主の姫君よりよほど品のない笑みを浮かべながら弥彦は、太助に何事か耳打ちした。奉納品の中から、風呂敷ひとつを開ける。

「……………」

茜はこの二人を前にしてからというものの、一度として口を開いていない。その態度が気に入らないらしく太助は、またも乱暴に、少女の股下を狙った。今度は腿の間にある床に刃が突き刺さり、ダンッと大きな音がする。だがそれでも少女は、反応を返さなかった。

「…………ちっ、かわいくねえガキだ。まあいい、姫様の術にかかっている以上……………」

慎重に刃先をずらしながら、開かれた脚の間に黒太刀を触れさせる。少女自身の手でよく研がれているため切れ味は素晴らしく、わずかに小手を返すだけで着衣に縦の裂け目が入る。

「ッ……！」

冷たい金属が秘芯に触れた途端、少女は凄まじい感覚が背筋を貫くのを感じた。ものを教えてくれる人間が水輝しかない彼女には、そこはおしっこが出る、汚くてヘンな形をした器官という認識しかない。だが女の子の身体の中で最も神経が集まっている組織は、術法に毒され、触るだけで心身を劈くような衝撃の走る弱点へと変わっていた。

ようやく弱みを見せた少女くの一に、勝ち誇ったような笑いを向け、太助はさらに刃先を滑らせていく。

十字に切れた布地は下半分がひらりとめくれ、可憐な薄桃色の牝貝が顔を覗かせた。日焼けの少ない真っ白な肌質に似合って、全体的に色彩が薄く、これから成長すれば膨らみを増していくだろう可憐な割れ目が息づいている。陰毛と呼べるものはなく、腹部と股との境目に淡い産毛らしきものがわずかながら見て取れる程度だ。

「うわ、すげ……。完全にガキだな。割れ目っていうか筋一本って感じだぜ」

「うふふっ、僕好みの可愛い形してる。見てよこの産毛、絶対生えたばかりだよ」

身体が一番大切な部分をいいように批評されて、くの一の頬にもわずかながら恥辱の紅

がさす。だが少年たちは、うっすらと見える程度の産毛しか生えていない未熟な性器に、さらなる悪戯を施してきた。

「へへっ。ちよつとだけど、邪魔くせえな。剃っちゃまうか」

「……ッ！」

またしても冷たい感触が局部に触れ、少女は肩をくねらせた。下半身を動かせば、彼らの危なっかしい手つきでは絶対に切れてしまう。両手の爪を床に立て、なんとか耐え難い惨憺な凶器の感触をこらえた。

少年は刃の先のほうを持って、ゆっくりと少女の肌の表面を削いでいった。乙女の肌は未熟な陰唇特有の弾力があるため、ともすれば刃物が触れるだけで切れてしまいそうになる。

目にも見えないほどわずかな産毛と、肌の表面組織が、シャーッと独特の音を鳴らしながら剃り上げられていく。むず痒くて鈍く痛む、形容し難い嫌な感じだった。刃先に薄く皮膚組織のたまりができるころには、秘所は赤く腫れ上がり、刃の冷たさがより一層感じ取れるようになっていた。

「……ッ……、う……ッ」

その本来ならばごく微細な、しかし術に侵されたいまの身体では鋭く大きな痛みが身体に走り、それまで無表情だった茜は思わず眉根をピクリとひそめ、うめき声をあげてしま

った。それで調子に乗ったのかニンマリと笑った二人は、少しずつ少しずつ、少女が大人に成長していた証を剃り落としていった。

「うふふっ、それじゃあ今度は僕の番だね……」

刃物で擦られやや肌のささくれ立った、ほぼ白に近い桃色の園を見て嬉しそうな弥彦が進み出た。その手には……、奉納品として納められた中でもボコツいて実り具合が格別よい立派な形をした山芋が握られている。皮は雑に切り剥かれゴツゴツと角ばっており、やや黄色がかかった白い実が、ぬるつく粘液にまみれた姿を現している。大きさは親指二本分くらいだろうか。長さは少女の肘から手首ほどまでである。

「くの一つてのはやたら隠し武器が多いからねえ……。まずはこれで確かめようか」

確実に含みを持たせた口調で言いながら、太助に向けて合図を送る。そして二人して舞台を設営するため堂の端に向かうと、くの一の脚をつなぐ縄に何事か細工を始めた。反撃の機会と思いい脚が動くかを探る茜だが、残念ながら、ちょうど滑車の要領で柱を回しているため、彼女の側から動かそうとしても、柱に衝撃が伝わる程度である。

一方の少年が素早く逆向きに縄を通すと、少女の脚が持ち上がっていった。さすがに片足の脚力だけでは、少年の全身を使った力には対抗できない。ずるずると片足が、続いてもう片方の脚も持ち上げられていった。

いわゆるまんぐり返しの状態である。身体が柔らかかいたためかなり大きく腰が曲がり、着

衣から性器だけが露出した下半身が目の前にくる。

陰唇というにも膨らみかたの少ない、まさに恥溝を刻み出す前の割れ目だった。自分の身体の一部とはいえ、滅多に目を向けない部分。股を広げた拍子でわずかに左右に開いた薄桃色の内側は、ひどく卑猥で、いやらしいものに映る。

そして周りの皮膚が、刀で剃られたため赤くなっているのを見て、少年たちに見られた事実をよりはっきりと認識し頬の紅が強くなった。つい視線が内側にある、肉弁の重なり合った未熟な女性器に向いてしまう。

「うふふっ。自分のここ、こんなに近くで見たことないでしょ。でもこれから、もっと珍しいものを見せてあげるからねえ」

産毛を剃られひりひりと痛む箇所、巨大な山芋が触れた。先ほどの金属とは違う冷たさに心臓がきしむような衝撃を覚え、わずかに鼻を鳴らす茜。

少年はにんまりと相好を崩しながら、軽く触れる程度に山芋の幹で撫でてきた。よく滑る粘液にまみれており力は加わりにくい、芯はゴツゴツして硬いため、時々花卉の外側に鈍い痛みが走る。身体が拒否反応を示し、内腿全体にじっとり汗が浮いてくる。

しばらく外陰唇に粘液が塗られたら、やがてまだ硬く、口を開くことも知らない花唇に、無骨な侵入者が芯の頭部を擦りつけてきた。

幼くあまり発達していない肉びらの一枚一枚に山芋特有のぬるぬるが染み込んでいく。

やがて際どい部分全体にいきわたり、さらに割れ目の内側まで入り込んできたとき、少女は思わず白い喉を仰げ反らせた。

「くっくっ……！」

おしっこを我慢しているときのような、不快さとは少し違う感覚が駆け抜けたのだ。それは陰部の前のほうについている、包皮にくるまれたぽっちを押されたとき、特に強くなる。

(……なに……、この感じ……)

単純な痛苦ではない仕打ちに、あくまで落ち着きを崩さなかった少女が、初めて戸惑いを見せた。どんな感覚でもこらえてみせる。忍びの能力を持つ以上、その覚悟は不可欠ともいえた。だが我慢できるのとは違うむず痒さで、お腹の奥に微熱を感じる。

やましが胸を捉えていた。山芋を持ってきてくれた播斗の里の村人たちの、優しい笑顔が蘇ってくる。自分たちを実の娘や孫のように接してくれた彼らの感謝の気持ちともいえる品で股座を押され、こんな気持ちを感じるなんて……。

「うふふふ……。気持ちいいだろ？　それが姫様の術の素晴らしさだよ……」

これまでで最も不気味な感じを受ける少年の微笑が、はつきりとした嘲弄の意味をもって少女の胸を締めつけた。いままでと違い動じてしまったのは、まごうことなく彼女の心に、やましい感情があることを示している。

「さあ、もつと……。味わいなさい！」

その声とともに、耐え難い疼きに喘いでいた未熟な花卉が、大きく撓んだ。

「……………ッ！」

ぶつつつと肉の裂ける音が自身の内側から響く。

まだ幼い少女は、逆らせかけた悲鳴を、下唇を噛み締めることでなんとか凌いだ。一気に限界まで押し込まれ、次に半ばまで引き抜かれた野趣の侵略者には、ねっとり大量の赤い液体が付着している。

「あははっ！ やっぱり処女だったんだ！ こりゃ悪いことしたね！」

（……………しよじよ……………？ ……ッ！ うああッ！ いっ、いた……………ッ！）

手を上下させ抜き差しし始める少年。身体が内側から引きちぎられているようで、茜は両手の爪を床に突き立てた。

「……………ッ……………ッ！」

形容し難い痛みと異物感、不快感が、全身を抉り回す。

（ううう……………ッ。水輝……………い……………ッ）

処女地に容赦ない責めが加えられる中、無意識のうちに誰より慕う姉の顔が頭に浮かんだ。

※



普段は参拝客の接待をほとんど任せきりにしているうえ、一度聞いたことは絶対に忘れない。そのため神主はその容姿に違わず博識である。それに聞き上手及び語り上手で、彼の説明は分かりやすかった。

あの海蛇が生息するという『ごく限られた海岸』とは、ここにほぼ間違いあるまい。告げられた距離も合っているし、目印となる街道なども見つけた。その地点には廃村があり、その住民だった者たちが、あの海蛇に対し畏敬の念を抱く唯一の人種だという。そして確かに、廃村らしき場所があった。だが……。

「つていうか……。……村じゃないわよ……。ね？」

誰にもともなく尋ねる水輝。

実にもっともな意見で、がら空きになった物置のようなものが数軒並んでいるだけだ。それに常に波風にさらされる砂浜に建てられているのに、一軒として崩れていない。むしろ材木の繊維はさして古いものではなく……。

「……村っていうか……」

「察しのいい娘よ……。その通り、ここは村などではない」

どこかで聞いた声——。だがその正体を推するより先に、水輝は自分の立つ場所に起きた異変に踊らされることとなった。

地鳴りとともに強烈な震えが大地を伝い、砂浜が海のほうへ向かい流砂を起こしだした

のだ。

「お前の実力を高く買って、罘を仕込ませてもらった。そのための舞台じゃ」
途端に足首までが砂に捕らわれ、流されて転びそうになる。

「とはいえ……、一晩しかなかったから、多少雑な作りではあるがの」

(罘——ッ!?)

声の聞こえるほうから主の位置を掴み振り向いた水輝だが、その拍子に尻餅をついてしまった。流砂はますます速くなり、転んだ勢いも手伝ってあっという間に腰まで砂に埋まる。

「まずは小手調べじゃ……、わらわを失望させるでないぞ……。召魔、餓鬼！」

作り物であることは明かされた崩れかけの家屋が、突如木造としての様相を捨て、真っ黒に染まる。やがてそれは昨日の液体式神のように潰れ、浜の上一帯に広がった。ひっきりなしにかかってくる砂を払いのけるので手いっぱいいな水輝に先制の攻撃が、まさに降りかかってこようとしていた。

大量の蛇である。建物はすべてが、一匹ごとは小さいが千を超える数の蛇でできていたらしい。気色悪い罘の正体に顔をしかめる水輝に、蛇型の式神たちが一斉に飛びかかってきた。

「うわ——……っっ」

水輝はものすごい勢いで向かってくる爬虫類の津波に、悲鳴をあげる間もなく呑み込まれた。彼女がしゃがんでいた場所には、あつという間にギャーギャーと小うるさい蛇型式神の山ができる。

罨の主、夜巳嬢は砂浜に降り立つと、指先を地面に向けた。それだけで砂の流れがやむ。「……さあ……、どんな華麗な術を見せてくれるのじゃ……？」

頬を上気させながら、まだ血の浮いた唇を、艶めいた仕草で舌を滑らせ湿らせる。

『この悪趣味な罨はあんたのせいか……。……ってことは、昨日の地主さんも、あんたの所有物ってわけね』

あくまで、落ち着き払った声が、地面のほうから聞こえた。

瞬間――。

「おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおッッッ!!」

凄まじい怒号とともに、黒い塊が一気に散り散りになって、四方へと吹っ飛んだ。

中心には、巫女服に汚れのひとつも残さない少女が一人、両手を振り上げて立っている。視線の合った夜巳は、やや不服そうに眉をひそめた。蛇と人を複合した妖怪たちは、千を超える数がいたというのに、ひとつ残らず宙を舞い、形を失って黒い液体となり地に落ちる。

「悪いわね。華麗な術を見せて欲しければ、もう少し華麗な式を呼ぶべきだわ」

豪快な反撃のせいで乱れてしまった髪を整えながら水輝は、静かに告げた。

彼女ほどの術師にしてみれば、あれしきの餓鬼どもが相手ならば、正式な術を使う必要すらなかった。ただ式の核部にある呪詛が乱れる程度の力を放ってやれば、途端にあのようになり、形をとどめられず細胞組織が崩壊してしまう。黒いとはいえ大嫌いな血液が、千匹分も辺りに飛び散るのは、少々嫌な気分だが。

「それとも父親をあんな化け物に変える趣味の持ち主には、この気持ち悪いのが華麗に見えるのかしら？」

昨日は会ってすぐ失神したため普通の人間だと思っていたが、豪華な装いの今日は、雰囲気がるで違う。驚かされた分だけ冷静な反応を取り水輝は、改めて昨日助けてやったお姫様のほうを向いた。

「夜巳……、だったかしら？ この場所に罠があるってことはうちの神主さんは……」

「フ……。なかなかよくできた式であった」

「はあ……。あの式は結構いろんな人から慕われてたのに……。ま、昨日はあんたの式を壊しちゃったからおあいこかな……。で？ 今日は何の用でこんな手の込んだこととしてくれたわけ？ ほっといても近いうち、あんたのところには行くつもりだったんだけど？」

平気そうな口ぶりではあるが、ぼりぼりと頭をかく彼女の顔には少なからず苛立ちが見て取れた。

「さあ……。早くお前の、美しい力を見せておくれ——！」

水輝が深々と嘆息している間に、夜巳は実に楽しそうに印を切った。殺意がほとんど含まれない強烈な殺気が背中を押して、振り向くとそこには……。

『オオオオオオオオオオオオ……』

「げ……」

——ゴゴゴゴゴゴゴゴ……ッ！

最初、津波の類かと思った。沖合いに轟く海水が不自然な波打ちを見せつつ、一点に集まりだしたのである。やがてそれは、横に長い人型に変形していくではないか。なんと海岸に打ち寄せる塩水のすべてが、ひとつの水柱になっている。

この廃村が作り物であることは、仕掛けた本人の口から告げられたが。どうやら海岸というのも嘘だったらしい。ここはただの砂地であり、あの海はすべて式神だったのだ。

——ゴバアアアアアアアアアアアアアアアアッ！！

さすがにこれには面食らった水輝に、組成物質は海水である式が、その凄まじい重量のすべてをぶつけてきた。昨日彼女自身が見せていた青龍召喚術の水槌など、比較にならないほどの衝撃。その直撃を受けてしまい、地面に押しつけられる。

「玄武——。ぐく……ッ……、のわああ……っつ！」

なんとか術式の亀甲に身を守らせ、圧死だけは避ける巫女。だがそれでも容赦なく降り

かかってくる膨大な重量で、盾そのものに押し潰されそうだった。

『クハハハハッ！ どうしたのじゃ！ はよう貴様の術を見せてみるがよい！』

ひっきりなしにかかってくる海水が振動し、主である姫君の声帯となる。中で聞いている水輝はあまりの大音響に耳を塞いだ。陰陽術の盾に守られていなければ、その音だけで充分な攻撃だっただろう。

「やれやれ……。悪いわね。頼まれると嫌になる性分なのよ私……」

しかしあくまで余裕を残した態度で、少女は水の膜に覆われた夜巳のほうに視線を向けた。対して女は、海柱の声帯で挑発的に笑い続ける――。

『ククク……。さすがに親子か。この状況で皮肉とは……』

——決して……。触れてはならない話題に触れて。

……。水輝の顔色が変わった。

『今日きた三つ目の理由は……。昨夜、あのくの一の娘が果心居士について聞いておったからじゃ。だから四年前まで師事しておったわらわがきたのよ』

「……おまえ……」

『師から聞いておるから、すぐにピンときたぞ。師が自ら出生した里を滅ぼしたとき、気が触れていたの一人だけ殺さずにおいたくの一の娘と、ただ一人逃げ出した天才陰陽師。その名を水輝。師の血のつながった実の……』

「召霊」

——朱雀……。静かに呟く術師の声と同時に、分厚い海水の向こうで幻想的なほど美しい焰が広がる様が網膜に焼きつき、夜已は息を呑んだ。その瞬間海水の柱は、シューッと小気味よい音を立てつつ真っ白な蒸気へと姿を変える。

中心に立つ巫女服姿の天女は、背に鶴のそれと似た炎の翼を負いながら、癖なのだろう長い純黒色の髪をかき上げた。

強大な海水の式神を、内側から、爆出する熱量で弾き飛ばした。という神業が行われたはずなのだが、傍目にはまるで当然のことが起こったようにしか見えなかった。天女のもつ神の翼の前に、海が自ら、場所を譲ったようにしか。

「悪いわね……」

天女は猫のように無邪気な輝きを持つ瞳を細め、まるで他愛のないことのように、口元を緩め笑いながら、告げた。

「……貴女は死ぬ。けど質問に答えてくれるなら、楽に逝かせてあげるわ」
その微笑は、人間らしい感情に頼ったものではない。

ゾクッとするほど美しく、怜悧で残酷な、見ているだけで魂を奪われるほどの妖しさが潜んでいる。

「……う……」

あまりの迫力に、絶句するばかりの夜巳。彼女自身が望んでいた、この上なく華麗な術が目の前で展開されたことも、もはや頭に入っていない。狂気の姫君も、限りなく純粹な敵意に満ちた神々しい天女の前では、ただの人間であった。

鳳凰の持つそれと似た、美しい羽は、少女の立つ足元の砂を融解させるに足る威圧感にも満ちていた。あれだけの水を弾き飛ばしたのも納得できる熱量……。もし触れば、かなりの術師である夜巳ですら、防御している暇もなく蒸発するだろう。

冷淡で、思考の働きだけは極めて鋭い姫君は、すぐさま逃げ出す決断を下した。だが一歩引き下がると、当然のように巫女も一歩詰め寄ってくる。それは逃がすつもりなどないという意思表示であり、また嬢にとって逃げられないという死刑宣告でもあった。

だが……。

(素晴らしい……。欲しい……)

極限状態にあつて、夜巳は、声に出すでなく自然と表情を緩めた。まるで無垢な子供のように、ただ喜びだけを表現する表情。それは常に破顔し続けていた彼女がこれまで見せた中で、最も感情的な『笑顔』といえた。

「ふははははっ！ 神社に戻ってこい！ お前の大切な妹はもう墮ちたころじゃ！」
踵を返し、凄まじい跳躍力でもって逃げ出す。

もちろん許すわけもなく、自身に術をかける水輝。だが夜巳の行動が恐怖ゆえの無謀で

第三章 畏の真意

少女の幼い秘裂は、いつまで経っても異物への順応を見せようとしなかった。

媚肉にはべったりと、真っ赤な血液と白濁したぬるみの混じり合った粘液がこびりついている。ときおり割り開かれた傷口の敏感な部位に触れるのだろう。逆さにされたままの身体がビクッと震えた。腿の付け根までしかない下穿きは、股部が十字に切り開かれ、すでに肌を隠す役目が果たせないほど乱れている。

白桃のようなお尻の間には、卑猥な艶を持ちだした白い芯棒が、無理やりひし形に割り開かれた孔に出たり入ったりしていた。

「……………」

身体の内部を乱雑にかき回されていることに加え、でんぐり返しの途中の格好で、膝が床につきそうなほど身体を折り曲げられているため、息苦しくてしようがなかった。加えて茜は、呼吸もままならないほどに心乱れている。時々食いしばった歯を緩めて思い切り息を吸い、吐き出すときは、咳に近いほど切れ切れにこぼすだけだ。

単純な痛みに対してならば、くの一としての教育中、絶対的な耐性を植えつけられている少女だが、この痛苦は微妙に違っている。それが忍びゆえの強固な精神性に傷をつけて

いた。本来能面のように揺らぐことのないはずの表情は、辛そうに歪んでいる。

「……………あ……………うつ」

破瓜の血に濡れる幼い粘膜が、猛烈な火照りに襲われ、少女はたまらず呼吸の合間に甲高い声を上げてしまった。痛みには絶対に反応を返さない、忍びの少女が。

眼前では無慈悲にも抜き差しされる光景が広がっており、目を開けた茜は、下腹部を襲う異変の正体をすぐに悟る。

痒みである。痛みに転化する直前の疼痛感が、全身で最も敏感な粘膜を襲っているのだ。目の前では掻き乱された純花に、赤い血の混じった山芋特有の粘液が、一往復ごとに擦りつけられていた。茜には覚えのある感覚で、すりおろしてとろろ状にしたものを食べたあと、よく唇の周りが痒くなることがある。それが吸収の早い、敏感な粘膜に塗りたくられているのだ。

(く……………。な、なに……………？　ぬるぬるして……………。なんか……………っ)

子宮になにか重いものがのしかかってくるような圧迫感があつて、限界まで広がっていた腔粘膜が際どく収縮した。幾度にも及ぶ挿抜で、粘るほど濃厚になった血液と山芋汁の混合液が、秘孔の入り口に泡立った輪を作る。それが蠢き、泡が弾けるたびに、じゅぽじゅぽと猥褻な響きが堂内を覆った。

幼くて未熟な秘唇は、はっきりと見て取れるほどほころんできている。縦の線に等しか

った割れ目は、荒く削られた芋幹が入り込んでくると、痙攣するように楯円に花開いた。そのたびに侵入者にびったり密着して締めつけの強さを思わせる肉弁が垣間見える。

「うぷっ、くふふっ。そうだよねえ、こんなもので擦られたら、痒いのは当然だよねえ」
「……クズが……」

震える声で、うめくように挑発を返す茜。しかし言葉にも、声質にも、迫力は一切感じられず、へらへら口としか聞こえなかった。常に冷静だったくの一が無駄に口を開くということとは、それだけで、心理的に安定感を失った証といえる。

それを聞いた少年は、芋にかける手の力を緩めた。ただでさえ幼く狭い媚孔の、強烈な締めつけにあっている陵辱者は、たちまち拒まれるようにぬるりと飛び出してくる。なぜ中断したかは分からないが、とにかく少しは休めると、少女は安心したため息をこぼした。

だがそれもまた拷問の続きだったと知るのは、ものの数秒も経たないうちのことだ。

「あ……、え……？ な……、な——っ……」

下腹部を襲う熱に、全身が切なさを訴えだしたのである。皮肉なことに無粋な小道具を使った陵辱は、破瓜の痛みでもって、茜の身体に確かな安らぎを与えていた。

痒みに浴びせられる痛苦は、この拷問の真の辛さから彼女の目をそらしていた。だがその守りを失った身体には、なおも苦しみの残滓が糸を引いている。加えて少年は行為自体をやめるわけではなく、今度は口を広げた入り口に、液を塗りつけてきた。

「うう……く……ッ。く……ッッ」

若くピチピチと張りのある太腿から付け根にかけて真っ白な局部の、ちょうど中央にある部分だけが、妖しく紅色に染まっていた。『痒くなる成分』が、おしつこの出る穴付近の、ひどく敏感な部位にぬたくりつけられている様子を、眼前でさらされ、ただでさえ追いつめられていた少女の精神は、一気に瓦解のときへと歩を進める。

血の色が薄まり、赤茶色に染まって、蛆虫のような色になったそれは、生きているかのように女体の最も大切なところで踊り回る。その動きはひどくおぞましく、屈辱的で、だがゴリゴリと音を立てて媚肉を擦る乱暴さはあまりに快美だった。

少女の足首を結ぶいくつもの縄が、わずかに撓んだように見えた。おそらく自身では意識していないだろうが、背中をさらに折り曲げて、しなやかな両脚を左右に開いたのである。皮膚の上をかするわずかな心地よさを、より深く味わうために。

(みず……き……つ。た……あ……つ、助け……て……)

暗鬱な心の奥深くを支えていた、強固な、だがひどく不安定な柱が、無残にも突き崩されようとしていた。茜の中の頼りない部分が、この世で誰よりも愛する姉に助けを求める。しかし現実には苦しみから救ってくれるのは、少年たちに操られた汚らわしい棒だけだった。「うふふっ、ごめんねえ、僕がこんなもの使ったせいで。君がどうしても言うなら、おわびの意味もこめて気の済むまで好きなところをかき回してあげるよ。それに……」

いまのいままで生きていた山芋は、途端に物言わぬ棒へと変わり投げ捨てられる。代わりに両手を、黒い汚れの染み込んだ着衣の胸元に載せた。眉根が垂れ下がり覇気の感じられない少女は、身をよじらせて弱々しく抵抗の意思を示す。

「またこれから、我慢しなきゃならないことが増えるし、ね」
不吉な宣告とともに、付着した汚れを指先でなぞる。

「——ッ——ッ——」

その瞬間、少女は激しく白い喉を反らせた。

先ほど全身の細胞に染み込んだ、黒い妖力が、途端に活動を始めたのだ。寒気を感じるより早く鳥肌が立ち、それからブルブルと肩を震わせる。

なにが起こったのかは、目を下に向けるとすぐに分かった。十字と呪文の形に描かれた黒い淫呪が全身を腕といわず胴体といわず、腰から上、首から下を駆けずり回っている。そしてその蠢きは、触感として感じ取れた。まるで皮膚の上を大量の蟻が歩き回っているようで、痛みには至らないムズつきに、茜は唇を噛み締める。これまでの精神的な感覚のみに訴える術法や、刀や山芋を使った陵辱とは違う、直接的な汚辱感が込み上げ、単純な嫌悪が身を貫いた。

高揚を混じらせた痺れに、処女喪失の痛みで意識から消えかけていた肉の火照りが戻ってきて、敏感な部位に触れられる感覚が胸を締めつけた。なんとか気力を持ち直そうと、

きつく目蓋を閉じては、見開いて怜悯な目つきに戻ろうとするのだが、それが虚飾にすぎないことは、全身が雄弁に物語っている。

寒い季節に開けっ放しになっている堂内で、脂汗の浮いた肢体には、艶っぽく紅色が差しだしていた。まんぐり返しという卑猥な体位は自らの意思でないにしろ、じれったそうに腰がうねるのは、彼女自身が刺激を求めているからに他ならない。なにより反抗的な意思を灯した瞳は、どこか媚めいて見えるほどはつきりと潤んでいた。

「う……っ、うう……っ」

おそらく『怨』の字の『夕』にあたる部分だろう、二つに分かれた先端のうち下辺の長いほうが、おへそを伝って下腹部まで進行しようとしていた。だがくびれた腹部の下半に移ると、なぜかそれは踵を返し、ずるずると上のほうに上っていく。

(や……。こ、こんなの……。かゆいっ、かゆい……。っ)

切なげに瞳を潤ませる茜。山芋による痛苦で衰弱した肉体には、あまりにも辛い仕打ちであった。過敏な肉を中途半端に刺激され、だが痒みに耐え続ける局部には一切触れられない。きゅーっときつく口を閉じた秘孔が、ときおりなにかを求めするように口を開け閉めした。

生ぬるい愛撫の嵐は、的確に少女の官能を揺さぶっていく。いつしか途切れ途切れだった吐息は、はあはあと鼻にかかったものに変わり、股布につけられた十字の裂け目から覗

く白桃型の臀部は、ゆっくりと揺れていた。若々しい弾力に満ちた肌は汗でぐっしよりと濡れ光り、艶めいた雰囲気をかもし出している。

「うふふ。つらいでしょ。ちゃんと言葉に出してお願いできるなら、痒いところもかいてあげるし、五通神の文字には、全身を弄くり回すよう命じてあげるよ」

二度目の誘い……。それが先ほどより、おそろしく魅惑的に感じられることに、茜は眉をひそめた。言葉の意味するところや音色は、先ほどと全然変わっていない。ならば変わったのは聞き手の心境だと、彼女自身よく分かっていった。

ひどく弱気な部分が首をもたげる。忍びとして心に突き立てた刃に、ひびが入ったようだった。八年前に水輝と暮らし始めてから生まれた、人懐こくて、代わりにいつも誰かに守られていたいと思う、年頃の少女そのものな部分が、顔を覗かせている。

「く……う……。い、いや……」

苦しげにうめきながら、首を横に振るくの一。これまでなら黙殺していたのに、その反応の違いもまた、彼女の内面的な変化を如実に示していた。

「うふっ、我慢強いなあ。でも君のはしたない壺はだんだん開いてきてるよ。さっきまで処女だったのに……。うふふ、こういうこととして欲しいって、ヒクヒクしてる」

上半身を責める汚辱のせいで鮮紅色に染まった花唇を見つめ、少年は膝をつく、その清らかな部分へと顔を寄せてきた。おそろしく長く、だが蛇のように薄っぺらではない舌

を出すと、小粒で初々しい秘芽をくるむ包皮に、わずかに触れる。

「ぎゃあ——ッッ！」

それだけで少女は、肩と後頭部以外が床から離れるほど全身を引きつらせた。

それから、まだ一度も蹂躪されたことのない肉ピラがめくられる。そこは一際鮮やかな桃色の粘膜が、少女自身の汗と、それ以外の体液でツヤツヤと濡れ光っていた。だが内側にはあえて手を出さず少年は、伸ばした舌で入り口一帯の花弁をしゃぶり回してくる。

「あう……っ。ッ……、くくッッ！ ……っ……」

腰元から押し寄せてくる妖しさに、幼い少女はなんとか挫けないよう唇を噛み締めた。鼻からどうしてももれてしまう婀娜あだめいた吐息も消したいのだが、頭の中が秘部を襲う情感めいた電流に犯され真っ白になってしまい、どうすることもできない。

式神である少年は、もともとそれこそが存在理由なのだろう、実に巧みに女体の性感を煽った。むずむずと疼く外陰唇をくすぐるように舐め回し、時々肉芽を覆う包皮や、内側の粘膜を舌先でツンツンつつく。すべてが微妙すぎるほど曖昧な動きで、茜はわずかに痒みが癒される瞬間を望み、一気に抵抗の態度を薄れさせていった。

「んふあ……。う……。うゆうう……。くっ」

先端を硬くした舌にひだひだの合間を縫うように舐め上げられると、未熟な花弁はざわついて口を閉じようとする。だが周期的にふわあつと力が抜けるのは、男の舌を迎え入れ

ようとすする反応に他ならない。

イヤイヤと首を横に振って恥辱に耐える茜だが、いつしか両脚からはぐったりと力を抜いていた。ときおりピクッピクッと腿に緊張が走るが、それは慣れない性感への反応にすぎない。むしろ四肢や表情は、状況に甘んじているようにすら見えた。

「うふふ……っ。こりやすうい。堰を切ったみたいにお汁が染み出してきてるよ」

興奮に口元を引きつらせた少年が、未熟な割れ目に舌を埋没させたままでもり声で言う。そこは確かに彼の言う通り、淫らな花蜜を染み出し始めていた。いつしか目の前の光景を見る少女の瞳は、羞恥と、どこか陶醉にも似た感情とで潤んでいる。

ちゅぷ……っ、くち……っ、くちゅちゅっ。

(うあああ……っ、助けてお姉ちゃん……。ヘンに、ヘンになるう……っ)

異様なほど長い舌は、うねうねとそれ自体に意志があるかのように、赤く充血した局部をあますところなく這い回った。そのたびに身体の内側を淫らな水音がこだまする。心の奥でただ助けを求めることしかできない茜は、いつしか身体の芯を焦がす牝熱に対し抵抗できないどころか、する意思すらなくしていった。

生温かく柔らかい感触は、求めていた感覚をごく微細に送り込み、満足にはほど遠い愉悅を与えてきた。そして焦らされるごとにくの一の少女は心から活力を失っていく。おそろくそれこそがあの姫君とこの少年たちの狙いだったのだろう。いまごろになって身体中

の細胞に染み込んだ邪悪な魔力が、再度そのおぞましい力を放ちだした。身体中が、頭の中まであますところなく、陰湿な病に火照りだす。

負けてはいけないと目を強く閉じる少女だが、熱に浮かされながら股座に舌を這わされると、なんともいえない感情が胸を捉えた。反射的にピクンッと両脚が跳ねて腿を閉じようとする。だが縄に縛られた脚はほんの少ししか動かすことができなかつた。

紅色の舌が、発達の影のほとんど見られない溝部の、中心にある狭穴にわずかに埋め込まれる。まだ鮮血の跡が残る哀れな幼華が、またもぐんにやりと押し開かれる。

「あああ……ッ……ッ……う……」

蕩ける蜜肉が広げられ、生まれて初めて味わう官能めいた誘惑に、意識が薄れてしまいうようになる。

「ふあ……。やだ……。やだあ……」

いつしか少女の身体は、両脚が勝手に左右へと開き、腰を反らせて少年の顔へと大切なところを押しつけ、あげくお尻を控えめながらくねくねと揺らし始めていた。自分の身体が信じられず、か細い声で途切れ途切れにうめく茜。はしたないからと止めようとはするのだが、いまそれをやめたら、また先ほどまでの地獄に逆戻りになるばかりか、この味わったことのない気持ちを逃すことになってしまう。それはあまりにも辛かった。

精神的に急速な成長を果たし、大人に近づいた少女の媚肉は、しとどに蜜を垂らして少

年の舌遣いを甘受しだしている。内側の花卉が充血してぷっくりと外側に顔を覗かせ、贅肉の重なり合った女性器特有の複雑な構造も、口を開いた割れ目からはつきりと見て取れた。山芋の汁と破瓜の血と少年の唾液の他に、てらてらとその部分全体をぬめらせる蜜も、トクトクと量を増やしている。

「うふ……っ」

気色悪い笑い声とともに少年は、唇を大きく広げて少女の脚の間全体を口に含んだ。その蛇のように長い舌の腹を、可憐な女蜜の源泉にこじ入れる。

「ふあ……くくく……ッッッ！」

これまでのまったりとしたそれとは違う、痛みの手前にある猥褻で鋭い感覚が全身に走る。電流でも通されたように小さな身体が跳ねた。

「ふふ……。気持ちよかったですよ。けどこれの味を知らなくちゃ、まだまだ序の口だよ」
弥彦は蜜液でべとべとになった唇に舌を這わせ、囁くような声を出す。そして立ち上がりながら誇らしげに着衣をはだけた。

陶然と惚けた表情で、目を向ける茜。男性の身体にのみある付属物の存在は、知識としてはあったが、それを勃起した形で見るのは初めてである。

（なにこれ……）

少年のそれはすではちきれんばかりに雄々しく屹立しており、美少年な風貌には似合

わかない、醜悪な亀頭部が少女のほうに向けられている。赤黒く膨張して、先ほどの山芋に匹敵するほどの巨大さだった。先端は笠のように開いており、濃紺の血管が根元から中ほどまでをびっしりと覆っている。

殿方とほとんど縁のない少女にとっては、あまりにも不気味で恐ろしい逸物だった。不安が胸を締め上げ、恐怖心から眉をひそめる茜。だがその逞しさを目の当たりにしていると、なぜかぱっくりと割り広げられた幼い秘唇がさらに火照り、疼くのを感じた。

「これを君のココに入れて、ぐちゃぐちゃにかき回してやるのさ。さっきの芋なんかメジやないくらいに気持ちいいよ」

中腰になって、黒光りする亀頭部を少女の柔らかな肉唇に押しつけていく。

「う……あ……」

先端が触れただけで茜は、全身を手足の指先まで駆け回る背徳的な電流の波に、熱っぽい吐息をもらしてしまった。ピチピチの幼い花びらは、醜悪な剛棒の伝える圧迫感に対し、適度な弾力と粘膜のぬめつきで返してみせる。

ひとりでに膣肉が蠢き、キュンッと割れ目全体がヒクつく。熱い果汁が染み出し、どう見ても狭孔には大きすぎるそれを少女の肉が望んでいることは、瞭然としていた。

(や、やだ……。こんなのでグリグリされたら……)

釣り針の返しのように逆さに反り返った雁首が大切な粘膜を攪拌する様を想像してしま

い、茜は頬を真っ赤にする。濁った瞳で食い入るように接触部を見ていると、無意識のうち喉がコクリと鳴った。

「オラ、どうしたんだよ。このままなんにもしなくていいのか？」

売女のごときいやらしい反応を見て図に乗った太助は、腕組みしながらふんぞり返って、先ほどまで手も足も出なかったくの一の精神に追い討ちをかけた。

「……っ、あ……の……。わたし……」

刺激がなくなったことで、秘唇全体にまたしても痒みが込み上げてくる。

茜は太助の言葉に焦らされ、こわごわ口を開く。首を引き、子犬のような上目遣いで彦彦のほうを見た。

そのときだった——。冷笑を浮かべていた太助が、なにかに気づいたように堂の外へと出ていく。

「わた……、わたし……」

だが少女にはすでに、誰がいなくなったかなど考えているだけの余裕はなくなっていた。少年の代わりに堂の中へ入ってきた人物のことにも気づけない。

「うふふ……。ダメダメ、もっと聞こえるくらい大きな声で」

「……っ……」

惑乱した頭の中で、理性が警鐘を鳴らしている……。しかしそれ以上に、悦びの味を覚

えた身体が早く言えとせかしていた。乗ってはならないと思いつつも、彼女自身、先ほどのあれ以上だという喜びを知りたいという欲望にかられ、口を開く。

「……お、……おねがい……です……」

※

水輝と茜の関係は、生まれたときからさらにさかのぼれるほど古い。

二人の生まれた里は、鎌倉時代に都を追い出された陰陽検非違使の一派を祖とする隠れ里である。男は全員が、女は子供を産む役を与えられた者以外全員が、呪道才能のある者は陰陽師として、ないものは忍びとして育てられる。その教育は物心つく前から始まり、現に水輝が覚えている限り、茜はまだ乳飲み子の時分から手に短刀を持つ感覚を教え込まれていた。

二人の関係は当時、同じくらい歳のなので名前を知っている程度だった。一緒に遊んだ記憶はほとんどない。だが八年前。

いまでもよく夢に見る……。小さいとはいえひとつの里が、それも一騎当千の有能な忍び。優秀な陰陽術師を沢山抱えた村落が、たった一人の人間によって壊滅、村人はほぼ皆殺しにされた。それが現実なのだから、まさに悪夢である。

その男は生まれついで天才であり、陰陽道や呪術の祖といえる鬼道を究めんとする者が求めてやまない、『神通力』をわずかながら体現していた。いかなる勇者も一瞬でこの

世から葬り去り、仏も救えぬ病を容易く癒す。術式に頼らず奇跡を起こす、まさに神の力。即ち全能に最も近い人物だったといえよう。

その日の前日、何年かぶりに帰ってきた、その里出身の天才陰陽師の男は、自分をかくまうよう里長に申し入れた。太閤寮の陰陽検非違使たちから追われているという。しかしそれは、処刑途中で逃げ出した彼を追う太閤様に背く行為であり、村民たちは誰一人として受け入れようとはしなかった。

天才ゆえに傲慢で、歴史の影で生きてきた里人たちの伝統を無視して、権力欲に取り憑かれ勝手に里を出ていった彼を、庇う義理などない。しかし彼を牢屋に放り込んだ代償はおそろしく高くついた。三重に閉じられた鋼鉄製の檻と、十人がかりで張られた術封じの結界は、いとも容易く破られたのである。

そのあとに起こったことは、あまりにも常識を逸脱していた。たった一人の脱走者によって数百を超える呪術師や忍びの者たちからなる里人が、皆殺しにあったのだ。

村内でも最高位の實力を持つ術師たちが何人もかかって、男の呪力を封印した。いかに天才といえど呪術さえ封じられればなにもできないはずである。そしてしかれた封呪を破る方法は、絶無かと思われた。

しかし男が、それまで伝説の、空想上の産物だとばかり思われていた『神通力』を用いたことで、戦局は一変する。封印の力は、男の「消えろ」という命令とともに最初からな

かったかのように消失してしまい、戸惑う戦士たちは、男の「死ね」という命令で人形が壊れるように事切れた。術式を用いて奇跡を起こす陰陽道とはまったく違う、森羅万象を思うままに操る神の力に、里の人間は誰一人対抗できなかった。

やがて無差別の大虐殺が始まった。戦士として戦える術師や忍びは、男が神通力でもって『殺害』という行程を省き『死』を命じ、命を奪われる。さほど戦力にならない女性や老人、子供たちは、男の使役する式神によって一人残らず食い潰されていった。

男の、実の娘を除いて。

彼には五人の子供がおり、一番下の娘は彼に匹敵する陰陽道の天才だった。それでも男の用いる神通力には抗うことなどできないし、呪力でもまったく太刀打ちできなかっただろう。しかし暴悪に荒れ狂う式神の手から逃れることはできた。

心優しい娘ではあったが、別に実の父親と敵対するのが嫌だったわけではない。ただ彼に匹敵する天才だった彼女だからこそ、里の戦力を総動員してもあの男一人を討ち取ることはできないだろう事実を悟っていた。

彼女の隠れた、里から一里ほども離れた森の奥にまで響いてくる命乞いと断末魔の声は、わずかに数刻で途切れた。名の知れている術師の中では最強とうたわれ、神通力でもって神の次元にまで達している彼を敵に回したのだから、決して不思議でない結果といえる。

太閤寮が厳正に管轄していた、国内有数の実力者集団である陰陽警士の追っ手から逃れ

続ける鬼才妖術師、異称、果心居士を敵に回したのだから。

野心家の男には情けや容赦というものがなく、自分の妻でさえ心臓を抉り出し、五人いる子供のうち、逃げた娘を除く四人は、すべて遺体の判別もつかないほど無残な方法で八つ裂きにした。

水輝がいまでも血や断末魔の叫びを嫌うのは、翌日男が立ち去ったことを確かめたあと村に戻ったときに見た、友人、兄弟たちらしき肉の欠片や、胸に風穴を開けた母の姿が、脳裏に焼きついていくからである。

生き残りは一人だけいたが、少女はこの世の地獄を見たためか正気を失っていた。

娘が戻ったとき、忍びの少女は自分の親が使っていた黒塗りの太刀を構え、仇だ間違えているらしい誰とも知れない、外傷なく命を奪われた術師の綺麗な遺体を滅多刺しにしているところだった。

「死ね、死ね、死ね、死ね、死ね、死ね、死ね、死ね、死ね……」

舌足らずな声で幾度となく紡がれるあの狂気の声は、いまでも耳に残っている。

忍びの少女を介抱する場所として、生首転がる地獄絵図さながらの里ではまずいと思い、水輝が選んだのが現在の居場所。穂村山の臥雲神社である。随分と昔に里のご先祖様が建立したと聞いていた場所で、交通の便の悪さからすでに朽ちていたが、人目につかず住み心地がよい。

連れてきた彼女は、あまりの恐怖から体験と自分自身を切り離して考えたらしく、記憶に障害が残った。いまでも、乱暴なことが嫌いでも誰かに依存している。愛想がよくて甘えんぼな性格と、他者の命をなんとも思わない冷酷な性格との、相反する二つの人格が介在しているのは、その後遺症である。

そしてそんな彼女を見たとき、水輝は初めて父親にはつきりとした憎しみを覚えた。

同時に少女への自責や慙愧ざんきといった、後悔の念も生まれる。里では最も才気に恵まれながら逃げ出した自身を恥じる気持ちがあったのだろう。家族や兄弟たち、里のみんなが殺されたのは、実の娘である自分のせいにすら思えた。そして――。

里の仇を討つため果心居士を、実の父を追いつつ、茜の面倒を見ることに決めたのだ。そして八年。とうとう有力な手がかりを見つけた……。

(……早く追わなくちゃ……)

焦りの表情で巨大蛇の式神を焼き払った水輝は、辺りを見回した。

茜が危険だ……。先ほどの夜巳の口調は、すでに彼女の身になにか危機が迫っているだろうことを匂わせていた。おそらくここにくる前に、神社のほうですでに一戦交えていたのだろう。

「くそ……ッッ！」

仇である父の手がかりが見つかるかも――。と冷静でいられず、神社の場所が割れてい

でも留守を茜一人に任せてきた自分の浅はかさに激しい憤りを覚えた。最後まで獲物を捕らえようと必死になる巨大蛇の式神を、朱雀の火炎羽で跡形も残さず焼き尽くす。

果心居士を憎む気持ちちは八年前とまったく変わっていない。だからこそ情報源になりそうな陰陽師がいるところならばどこでも訪れ、必要に応じて処分しつつ、やつの居所を聞き回っているのである。憎しみの念は、自分以外の陰陽師に大した理由もなく嫌悪感を抱かせるほどに強い。

だが八年前とは変化した部分も大きかった。当時は父のしたことを己の咎とがのように思い、義務感に近い思いで引き取った茜のことである。

里の生き残りであるから。同じ悲劇を体験しているから。最初のうちはその程度のつながりだったが、自分を『お姉ちゃん』と呼んで慕う彼女に、いまでははっきりとした愛情を持っている。それはこの世でたった一人家族と呼べる存在に向けられるものであり、また母親が娘に感じるそれにも似ていた。

そして母性を交えた彼女への愛情は、この八年のうちに、仇への憎悪をはるかに上回るほどに成長している。

仇討ちなどより茜のほうが何倍も大事だ。

「茜……、いま行く——ッッッ！」

小さく呟いた水輝は、来るときも使った護符を両脚に貼りつけ、めいっばい跳躍した。

あの頭のおかしい女が発していた、妖気ともいうべき不気味な雰囲気、山全体から感じ取れた。

二千の石段を駆け登っている暇などない。一足で山頂まで跳び上がった。同時に脚に貼っていた護符を、盾として用いる籠手に戻す。

「随分と早かったのう……。フフフ、わらわを退屈させぬとは、よい心がけじゃ」

案の定、袖で口元を押さえながら雅みやびに相好を崩している姫君が出迎える。その隣には不敵に微笑んだ紅顔の美少年も、夜巳に頭を垂れる形でしゃがみ込んで待っている。見たことのない顔だが、雰囲気からいって、彼女の式神だろう。

「——玄武!!」

どんな力を持つ相手かは分からないが、そんなことより早く茜の安否を確かめたい。怒りと焦りが我慢できない次元にまできている水輝は、片手で印を切るとその式神を容赦なく破壊した。少年式神は自分の身体に起こった変化について顔を引きつらせると同時に、石畳から出てきた亀の顔のようなものに呑み込まれる。

牽制も兼ねていたつもりだったが、女はすぐ隣で自分の式が食い殺されるのを見ても、顔色ひとつ変えなかった。まるで、戦う意思がないかのようだ。

「フフ。相変わらず美しい……。じゃがこれ以上わらわに無礼を働くのは許さぬぞ。あま

り苛立たせるようだと、わらわの有能な下僕どもが感化され、術を途中で取りやめてしま
うやもしれぬ」

わけの分からないことを、はったりとは思えない口調で言っただけ、またもケラケラと
笑いをこぼす。

「――茜になにをしたの……!？」

「フフ……」

言いたいことの分かった水輝が、印を用いようとしていた両手を下げるのを見て、夜巳
は無防備に背を向け悠々と堂のほうへ歩いていった。

「……く……ッ！」

父親に対するものとは違う、人生で二度目の殺意に怒りを滾らせながら、隙だらけな夜
巳に続き水輝は堂の中に足を踏み入れる……。

「……お、……おねがい……です……。わたしに……、私に……、ください……」

水輝にとって誰よりもなじみのある舌足らずの、切れ切れでいまにも途絶えそうな声が、
静まり返った堂内に響いた。

「あかね……」

最初その言葉がなにを意味するのか分からず、水輝は茫然とその場で立ち尽くす。

だが先ほど夜巳の言った言葉の意味はよく分かった。感覚的に靈的なものを捉えられる

水輝の目には、寝転がって腰を高く上げた格好で拘束された妹の体内に、蛇の形をした式神が入り込んでいることがはっきりと見て取れる。もしあの『有能な下僕』がいま術を取りやめたら、少女の身体は、内側から巨大な蛇の胴体に突き破られるだろう。

「首尾よく進んでおるようじゃのう。フフ、見るがよい、あの娘の法悦とした顔を」

馴れ馴れしく水輝の隣に立った夜巳は、彼女の肩に手をかけながら堂内に聞こえるような大きな声を出した。薄ら笑いを浮かべた少年と驚きの表情の茜が、こちらを向く。

「おねえ……、ちゃん……」

涙に潤んだ瞳で、遅すぎた助けを見つめる茜。

しかし少年が少し腰を密着させて、亀頭部のさらに先が包皮越しの秘芽をつつくと、それだけで容易く意識が浚われた。

「うふふっ。ほら、もう一度言っごらん。なにを、どうして欲しいのか」

少年に命じられると、茜はしばし唇を噛み締めて頬を赤く染めた。だがやがて、とろんと熱く潤んだ瞳を水輝からそらす。

いまの彼女にとって、助けてくれる人物は、すでに姉ではないのだ。

「入れて……、ください。中を……、中をぐちよぐちよにかき回してください……」

開かれた桃色の唇から、弱々しく、だが最後まで、少女の意思が告げられた。

清楚な花びらは充血して赤い果肉を覗かせ、外側にめくり返って、毒々しい亀頭を受け

入れていく。

「ひぐ……っ。あ……、ふいい……」

細身の裸身に似合いひどく狭い穴ではあったが、ぬるつく山芋で充分にほぐされていたためだろう。彼女自身の腕先ほどもある肉塊を挿し込まれても、裂けることはなかった。

まだ血の跡を残した結合部を中心に、まんぐり返しの体位で二人の身体が密着していく。少女の未発達で生温かい粘膜は、濃厚な花蜜に溢れ、パンパンに張った剛棒に浅ましくも絡みついていった。

(うあ……っ、すご……。すご……お……)

身体中の感覚がその押し広げられた容積に集まって、茜はあまりの痛みに目を大きく見開いた。だが鋭痛は山芋汁の痒みと混じり合うと、脳髓まで痺れるような媚悦へと変わる。

「うはあ……。す、すごい壺具合だな……。そらっ、これで全部だっ」

狭孔ゆえの締めつけに声を上ずらせながら、少年はとうとう、砲身のすべてを少女の中に収めた。

「あああ……っ……っ……」

乱れた着衣から覗く、帷子に覆われた白い胸が、ぐぐーっと大きく仰け反る。

「ほらっ、これでどうだ。気持ちいいんだろ？ あの子にも知らせてやれよっ」

「や……っ、はんッ。お、お願いです。お姉ちゃんの前では……あ……」

はあはあと荒く吐息をつきながら、茜は瞳を滲ませ首を横に振る。自分がどれだけ淫らかな様を見せているか想像もつかず、傍から凍りついてこちらを見つめている水輝の視線が、肌に突き刺さるようだった。なのにむずつく子宮口を抉られていると、痛みにあげられるはずの嬌声には、微妙な違いが混じってしまう。

「んあう……っ。あや……、イツ……」

細い喉を仰け反らせながら、後頭部を床に押しつけて身悶えた。お腹をくの字に折り曲げた不自由な格好で、上からズンズンと突かれていると、次第に頭の中が気だるく痺れてくる。恥ずかしくて仕方がないのに、小さな可愛いお尻が勝手に揺れだしていた。

(だめえっ……。お姉ちゃんが見てるのに……。い……。っ)

つい先ほどまで処女だった膣孔は、凶悪な侵入者を迎え入れるべきか追い出すべきか迷っているようで、初々しい締めつけを見せていた。少し痛いくらいの吸着力に、弥彦は鼻の穴を広げて、一層強く腰を突き込んでいく。

その動きを受け、少女の肉門もまた戸惑いながらも卑猥に順応しつつあった。太い逸物によって限界まで開かれている薄桃色の媚肉が、時々キューッと絡みついては、痙攣するように剛直の幹へと擦りついている。

興に入りだした少年は、水輝を気にして声を抑えようとしている少女の羞恥心を徹底的に貶めてやろうと、くすんだ紺色の、表面積の小さな装束に手をかけた。

「ほらほら、胸も気持ちいいでしょ？」

「は、はい……。うう……。いやあ、恥ずかしい」

山芋のような下賤な小道具でなく、淫靡な姫君の術法によって開花させられた胸肉は、触られているだけで子宮に疼きが走るほど鋭敏になっている。特にツンと立った乳首を揉み転がされると、身体の芯全体がズキズキするほど熱く疼いた。思わずといった感じで背を仰け反らせると、帷子から白い肌や桃色の乳首を垣間見せる乳胸全体が、ぐぐーっとはしたなく上に突き出される。

「……あうう……。も、もうだめえっ。いや……。いやああんっ」

少年の指だけでなく、肌上を這い回る文字も、とうとう上半身だけでなく全身に転移し始めた。脇や横腹、腿、足の裏といった部分を黒い紋様が滑るごとに、背筋にゾクゾクと興奮が込み上げる。

「うふふっ。ムズムズしてたまんないでしょ。でももっとすごいよ、ここからが」

愛撫は呪文の動きに任せて、弥彦はめいっばいまで少女の身体に密着すると、その可憐な唇を奪った。ぬるりと舌を押し込んで、口腔をしゃぶり回す。

茜にとって生涯で二度目の接吻だったが、一度目と違い、相手に噛みつくようなことはしなかった。

頭の中が暗い情感でどろどろになっていて、この甘美な侵入者を攻撃するようなことが

できなかったのだ。それどころか、その幼い容姿からは想像もつかないほど悩ましい吐息をもらしながら、首をうねらせて、濃厚な口づけを受け止めてさえ見せた。

「ふぁッ！ あっ、そっ、そこ……っ。そこっ、すごい……っ」

巨大な亀頭部で、狭くて幼い膣孔の最奥。子宮の入り口をコリコリと撫でられ、茜は口端を喜悦に歪める。

密着の効果は凄まじかった。少年のごわごわした陰毛が花卉の外側に擦れて、痒かった分の快感が込み上げてくるし、包皮から少し顔を出した秘芽にも鋭い衝撃が走る。その頭半分だけ露になった性感帯には、蠢く淫呪がもぞもぞと絡みついてきて、幼い官能をさらに追い詰めていくのだ。

（お、お姉ちゃん……。ごめんなさい、わたしもうだめ……。もうだめエッ）

処女であることはもちろん、山中で育ち、性に関する知識がまるでなかった茜にとっては、信じられない感覚だった。

十字に割かれた着衣の奥には、ぬめついた秘部が、雄々しい逸物をくわえ込んでいるのが見える。こんなに惨めで、恥ずかしくて、幸せな気分は初めてだった。恋すら知らぬ少女は粘膜に突き立てられる剛直が愛しくてたまらず、下腹部に力をこめきつく締めつける。

「やは……っ、あっ、あッ。いやあっ、な、なにかくる……。っ。なにかくるうっ！」

子宮口を抉られ、頂点に届きつつある高揚感の塊が肉芯を震わすような感覚に、少女は



く染まっっていくのを感じていた……。

「フフ……。どうやらあの娘はもう、わらわのものになる決心を固めたようじゃのう？」

呆然と立ち尽くしている巫女の耳元を、夜巳の熱い吐息がくすぐる。

水輝は顔を真っ青にしてぶるぶると全身を震わせていた。

茜よりは少なからず性への知識がある彼女には、その光景が、妹が獣になってしまったもののように見える。

「フフッ、フハハハハハッ！　アーーーッハハハハハハハハッ！」

姉の愕然とした表情を見た女の高笑いも堂内に響きわたった。嘲笑で我に返った水輝は、弾かれたように重なり合う妹と少年のほうへと両手を構えた。

瞬間、少年の形をしていた式神が、音もなく上半身を吹き飛ばし、散り散りになって消え去る。そのままぐらりと後ろに仰け反ると腹部から下だけになってその場に倒れた。巨大な逸物が茜の小壺から抜け出たが、しおしおと萎えゆく前に皮膚全体が本性を現し、頭のちぎれた毒蛇のそれとなる。

「茜！　あかね——　ッッッ！」

相手の式神の、肉はもちろん呪力中枢まで瞬間的に粉々にした水輝は、蛇の死骸には目もくれず茜のほうに近づこうとした。だが真後ろに立つ女の存在に、動きが止まる。

「それ以上動くかどうか……わかっておるな？」

妖しく耳元に息を吹きかける姫君。

交配後の余韻にひたるように目を閉じて荒く息をつく茜の、内側にあるものを思い出す。少女自身の腕ほどもある太さの、霊的な大蛇が、もぞもぞと蠢いているのだ。

あえて隙だらけの動作で水輝にしなだれかかり、夜巳は縄がけされたままの茜に手を向けた。途端に堂内の四隅から伸びていた縄がプツプツとちぎれていき、ぐったりとしたままながら茜の四肢は自由になる。

「ぐ……っ」

水輝はますますしなだれかかってくる夜巳を術で跳ね飛ばし茜に駆け寄りたい気持ちを、抑えなければならなかった。

「フッフ、心配することはない。お前の愛するあの娘は、わらわの教える幸福を理解しただけのことじゃ。なに、お前もすぐに知ることになるう。あの娘が教えてくれる」

「……——あうッッ!？」

夜巳の言葉を受け、見ていることしかできない水輝の目の前で、茜の華奢な身体が大きくよじれた。

「あつ、なつ、なに……ッ？　なにか……っつ。あつ、あああッ！　なにかくるうッ！」

「あつ、茜！　茜ッッ！」

姉の目には、妹の体内で暴れ回る三匹目の蛇の存在がしつかりと見て取れた。あまりにも痛ましい光景に一層顔から血の気を引かせ、悲鳴をあげる水輝。

縄が解けたときのまま床に大の字で寝転がっていた茜は、苦しげに震わせる身体を弓なりに仰け反らせた。裂かれた着衣から生々しく見え隠れする股間を、天井へと大きく突き出す。

「ふあ……。あッッ！ やあああああッッ……」

床を蹴って身悶えする少女の股からは、巨大ななにかがせり出してきた。膨れ上がった容積が着衣をはだけさせると、それは小粒だった、少女自身の陰核であると分かる。

いや膨れるなどという生易しいものではない。肉が変化を起こしているのだ。

包皮の根元部位が伸びていくとともに、どんどん膨れ上がって太い隆起を見せ始めている。やがて親指の二倍程度の太さで膨張はやむが、くすんだ肌色の皮に覆われたままの先端部はさらに大きくなっていった。

茜がなおもぐったりとなるころに変化は終わり、それは、まぎれもない男性器の形になっていた。先端は包皮をかぶったままだが、彼女自身の拳骨大にまで膨れ上がり亀頭と呼んでさしつかえない見事なえらを張っている。

幹部は浅黒く変色し、主人のおへそに触れるほど直立していることから、硬度がうかがい知れた。

陰根の下には割れ目がまだ見えるため正確には半陰陽なのだが、男根のついた妹は妖しいまでに蠱惑的で、水輝は顔をしかめながらも、どこか胸がゾクリと締めつけられるのを感じる。

古来より宮司を執り行ってきた鬼道から派生する陰陽道では、性転換はさほど珍しい術ではない。使役する式神に寄生した身体の性別を狂わすことくらい、夜巳の呪術ならばお手の物なのだろう。だが妹に肉幹がついている光景は悪夢以外の何物でもなかった。

(茜……。大丈夫だからね……。すぐに助けてあげるから……)

冷静に考えれば、男根が生えたこと自体は大した問題ではない。皮膚が変化しているため少々厄介だが、水輝の力ならすぐに元の状態に戻せるはずだ。

だが目の当たりになっている姉としては冷静になどなれようはずもなかった。幼げな黒い瞳は虚ろに濁り、眉を垂らした愛らしい表情で、紅唇は半開きのままハアハアと熱っぽく吐息を荒げている。そして桃色に染まった腿の間からは、まがい物とはいえ男性器がついているのだ。

「フフフフ……。なかなか立派なものよのう。もう少し休んだら、その使いかたを、わらわが直々に教えてやるとしよう。じゃがまず……」

夜巳は相変わらざるの薄ら笑いで身をすり寄せていた巫女から離れると、堂の床に落ちていた筆を拾い上げた。水輝には分からないが、先ほど茜の身体に紋様を描いた品である。

「そなたには心の底からわらわに忠誠を誓うまで、面倒な力を使わないでいてもらおうか」
力を使わない……。それはつまり、術師としての力の封印を意味している。

放り投げられたそれを受け取った水輝の表情には、苦味の色が濃かった。

術師の力を封じる。大して珍しい方法でもなかった。ただ身体のどこかに対応した呪文を書き込めば、対象の人物は、自分の意思で術法を行うだけの力を引き出すことができなくなる。それだけのことである。

かけられた本人が封印を破ることも実に容易い。その術をかけた人物の力を上回る力を出そうとすれば、簡単に弾き飛ばすことができるのだから。

とはいえないまの状況で、この抜け目のない姫君は、最良の策を選択したといえた。術を破る方法は、対象者が使用者の力を上回ればいい。

だから夜巳は、水輝自身に、自分の力を封じるよう筆を渡したのである。術の使用者と対象者の力が同等だった場合、本人に封印を破る方法は絶無となる。第三者がいれば特定の手順を用いて解呪していく方法もあるが、いまこの場でそれができるのは夜巳だけとなる。

「……フフ。どうした？」

「く——ッッ」

着実に反撃の芽を摘んでいく夜巳の周到さには瞠目の思いながらも、水輝は落ち着いた

様子で髪をかき上げつつ、筆を自分の胸元に押しつけた。

(……茜……。絶対に守ってあげるからね……)

どんな最悪の状況が待っているかは分からないが、自分に降りかかる災であればこらえようがある。けれど茜に危害が加えられる様は、見ていて耐えられなかった。

ゆっくりと手を引いていくと、なぞられた部分は最初なにもついていなかったが、六芒星を中心として『封』の印を描き終えると、一瞬だけ複雑な紋様が光り輝き、彼女の身体に染み込んで消えた。巫服の白い胸元には六芒星の欠片が焼けついたように残っている。

「く……う……」

天才ゆえに自分の意思で解放できない封呪など受けたことのない水輝にとっては、初めての衝撃だった。身体中のあらゆる部分から、力が抜けていくような、逆に力が緩まなくなつたような。

「フフッ。なかなか決断の早いこと。面白みがないのう……」

軽口を叩きながらも夜巳は、抜け目なく少女の身体を霊視し、呪力が完全に封印されきっているか確認していった。やがて満足いく結果だったのだろう、婉然とした微笑を取り戻すと、寝かされた茜の足元に手を伸ばす。

そこには縄を切ったときの黒太刀が転がされていた。材質的には大部分が鋼鉄でできているそれは、所有者の茜はともかく水輝では両手で引きずるのがやっとなほどの重量があ

るはず。なのにこの細腕の美姫は、なんと片腕で軽々と持ち上げ、水輝のもとへ戻ってくる。

術がなくなっただけ……、肉弾戦でも勝つのは難しそうだ。

水輝はなんとか形勢の不利を悟られぬよう瞳に強情な光を灯そうとする。しかし実際に弱気になっていることは、近づいてくる姫君に底知れぬ恐怖を覚えた自分自身が、誰よりよく分かっていた。そして……。

「——ッッ！」

黒塗りの太刀が振るわれ、眉のちよつと前を掠めて髪が数本宙に舞ったとき、巫女は思わず一步後ろに引いてしまった。無防備な兎が目の前で獅子の牙を見せられれば当然といえる反応なのだ。心を見透かされたようで、水輝は恥ずかしそうに視線をそらす。

夜巳は表情を、作り笑いでなく、心底人を小ばかにしたいやらしいものに変えながら、太刀を水輝の引いた脚の少し前に突き立てた。重心が刃先に近いたため少しめり込んだだけで上手く安定し、ちょうど水輝の首筋のあたりに柄がくる。

「フフ……。そう怯えることもない。わらわはそなたらが愛しゅうて仕方ないのじゃ」

突き立てたまま剣を置いて、女がゆっくりとした動作で後ろに回ってきた。死角に入られたというのに、悪寒が身体をすくませてしまい、水輝は振り返ることもできない。

脇を通して前に伸ばされた両手が、片方は胸、片方は腿を捉えた。柔らかな肌はむにゅ

むにゅと形を変えながら女の指先を受け止め、心地よい弾力を返す。

「……………く……………」

純白の胴衣に身を包んだ少女が、怖気から震えた息を吐いた。蛇のように長い舌が耳朶をくすぐり、指先が紅い袴の脚間へともぐり込もうとすると、その部分から全身に、嫌悪感や悔しさとともにじんわりと背徳的な感覚が滲み、思わず身震いしたのだ。

「ほう……………？ この味、匂い、肌触り……………。どうやらおぬしも生娘のようじゃのう」

耳元でクスクスと嬉しそうな笑い声が聞こえる。

こんな山の頂上に住んでいるのだから当然だが、茜同様に水輝も男性を知らない。だが先日の播斗の里で行われていた『血卸』に代表されるように、破瓜の儀は陰陽道と密接な関わりがあるため知識だけはあった。

これから行われるだろうことに想像がいくと同時に、茜のされたことが生々しく現実感を持ってきたようで、胸が締めつけられる。

加えて処女としての本能的な恐怖も、抗いようのないほどはつきりと現れてきていた。眼光は鋭く常に相手への威嚇を絶やさない。それがいまの彼女にできる精いっぱいなのに、どうしても不安をかき立てられ目元に張りが無い。

「……………フッフ、ならば破瓜にはそれなりの舞台や役者を用意してやらねばのう……………。仕方あるまい、再生儀にはもうひとつのほうを使うことにしよう」

なんとか震えだけは押し殺す少女の耳元に、不吉なことが囁きかけられた。彼女の胸におかれていた人差し指が伸ばされ、中空に軽く印を切る。霊的な視覚まで封じられている水輝だが、最後に描かれた逆五芒星から、召喚術であると分かった。

出入り口になる逆五芒星に差し込まれた夜巳の人差し指についた、鮭肉色の液体。ほのかな輝きを放つ印影の中から現れた軟体は、生物であるらしく、女の指先でうようよと蠢いている。

「フフフ……。怖かろう？ 不安であろう？ ならばもっと怯えた顔を見せておくれ」

「……………フン」

舌を這わせ続けていた少女の耳から一旦唇を離して、だがまだ触れ合う寸前の距離で囁く夜巳に、水輝は目を閉じすました顔で応じて見せた。式神であることは分かっていても、巫術の力を封ぜられているため霊視が利かず、その用途に皆目見当もつかない。確かに不安には思ったが、それを面に出すほど彼女は弱くなかった。

だが少女を怯えさせることを楽しんでいたらしい姫君が、あからさまに顔色を曇らせる。

「あまりわらわを不愉快にさせるでない……。呪を封じた意味がなくなるぞ？」

「ッ……………」

耳元に告げられる静かな脅しの声に、少女は口惜しげに舌打ちする。

（ご機嫌を取れっていうの？ こんな女の…………）

眉間に皺を寄せ、屈辱感に顔をしかめる水輝。しかし自ら力を封じた彼女には、逆らう手立てなど残されていなかった。

「一度はつきりさせておこう。わらわは何で、お前は何かえ？」

すり寄せていた身体を離すと、夜巳は前に回り、間近で目を合わせてきた。

「く……」

なにもかも無感情でこなせば怖くない……。そうは思っているも、人としての誇りをそう簡単に捨てられるわけがなかった。

だが悔しさに口籠もる巫女を面白がって、夜巳は喜色を満面に浮かべながらさらに顔を寄せてくる。

「わらわは、お前の、何じゃ？」

「………しゅ……」

震える唇を開く。

「……主人……。です……」

そして目を伏せ、彼女の機嫌を取るための言葉を口にするのだった。

「申し訳ありませんでした……。ご主人様……」

第四章 悲哀の姉妹

床に突き立てられた刀は背が高いが、打ち刀ではなく太刀であるゆえに柄の部分が高く、鏢つばの部分は巫女服の帯をしたあたりだった。茜と違いさほど身体の柔らかくない彼女だが、腹部までくらいなら簡単に足を上げられる。

夜巳の命令通り朱色の袴に包まれた脚を持ち上げると、足袋の割れた第一指と第二指の間で柄を掴み、鏢の上で安定させる水輝。開かれた腿の間に冷たい空気が流れた。

「手を後ろで組んでおれ。動かすでないぞ」

狡猾な爬虫類にも似た瞳に嗜虐的な悦びを浮かべながら、女は少女の巫女服の袖を結ぶたすきに手をかけた。

緩慢な動作で結び目を解き、取り払うと、引っ張られていた袖の裾がはらりと緩まる。黙って言われた通り両手を後ろで組み続ける水輝を満足そうに見て夜巳は、少女の細い肘から手首にかけてを、たすきに使っていた薄紫の飾り紐で縛っていた。なめし革の籠手に覆われた左手がきしむ。

「よし……。次はこちらじゃ。動くでないぞ」

後ろ手に縛られているため必然的に背筋を伸ばし、片足を高く上げた不安定な格好の少

女を見て興奮したのだろう。毒々しいほど紅い唇を舌で湿らせながら、夜巳は両手を伸ばし、白巫衣に手をかけた。

たすきは奪われても胴部は帯で固く締められているが、関係なしに力いっぱい下に引っ張られると、服全体に真下へ向かって力がかかり、硬い帯に挟まれた腹部、乳房が痛む。

水輝は暗鬱な表情で、仕打ちに耐えるばかりだった。完全に失神しているらしい茜は、一向に目を覚ます気配がなく、堂の中央で寝転がり細かい呼吸以外にまったく動かない。せめて彼女が起きれば、反撃への手口も見つかるのだが……。

たすきを奪われているため袖の裾が緩んでしまっており、着衣を乱されると、凛々しい顔立ちからは意外なほど華奢な肩口や、白い喉元、鎖骨が覗く。それから胸丘が左右にそれぞれ引っ張られ、桜色に染まる谷間が露になった。

「さてそろそろ……。……おっと、これをはんでおれ」

下に引っ張って随分と下ろされた裾を上に戻して口元に持ってこられ、水輝は言われた通り首をかがめて、口に含む。

腹部のとめられた帯から下、おへそ付近に風が触れた。俯いて自分の着衣を乱しながら袴越しの脚をはしたないほどに開いた少女は、美しく、またひどく扇情的である。だが本人は、冷たい空気が全身の恥ずかしい部分に触れるだけで、心細くて仕方なかった。

「フフフフ……。随分といやらしくなったのう……。あとは表情だが……」

愛らしい少女の身体を淫靡に飾ることを楽しんでゐるらしく、上等な出来ににんまりと相好を崩す夜已。人差し指の上でうねうねと流体し続ける朱色の液体をひと舐めして、その場に跪ひざまずいた。衣服の裾をくわえているため下を向いた巫女の表情を覗き込む。

猫のような柔らかいつり目がキッと睨みつけた。それから逆らう意思を示すことすら茜の身を危険にさらすと思ひ出し、悔しそうに横にそらす。

「フフフッ、まだまだか。それでは次に移るとしよう……」

首を反らせると女は、上目遣いで挑発的に少女の顔を見ながら、開かれた袴の間に顔を寄せてくる。思わず腰を引こうとする水輝だが、片足を高く上げた不安定な体勢のためほんの少ししか動かさなかった。

すんすんとあえて犬のように鼻を動かしながら夜已は、巫服少女本人にも分かるような脚間の匂いを嗅ぐ。汚れを知らない少女特有の清純なそれと、未成熟な茜にはない艶めいたそれが合わさった、甘い女体の香りだった。先ほど浜辺で一戦交えたためだろう、潮っぱい汗も混じって、女同士とはいえ姫君の表情が興奮に染まっていく。

「う……」

さらに顔を寄せてきた彼女の頬が腿にあたり、思わずうめき声をあげる水輝。年頃の娘として体臭を意識させられることには、本能的な嫌悪と羞恥が伴っていた。

「フフ……。そう恥ずかしがることはない、すぐに、気にならなくなる」

腿の横にある布地の合わせ目に、女の冷たい指先が滑り込んできた。女性的な肉づきへと成長しつつある腰の曲線をまさぐり、脚の内側へと進んでいく。単純な不快感だけではない恐怖の混じり合った嫌悪に、水輝はふるると大きく全身を震わせた。

指先から乗り移ってきた鮭肉色の液体が内腿について、うようよとその場でうねっている。冷たい夜巳の指に比べて生温かい式神は、不定形でも生きていることを実感させられて、なおさら汚辱感が煽られる。加えてそれは、ゆっくりと腿を這って一番大事なところへと向かって蠢きだした。脚だけでなく、背筋にも寒気とともに鳥肌が立つ。

「くう……。ア……。いや……」

嫌悪感がこらえきれず、歴戦の天才陰陽師の唇から、まるで普通の女の子のように細かい声飛び出した。幸い夜巳の耳には入っていないようだが、言った本人は自分自身信じられず、唇を二度と開かぬよう、血が出るほど強く噛み締めた。

右手を中に残してすべすべの腿肉を撫でさすりながら、淫らな姫君は顔を上げ、舌先で袴の中心部を小突いてくる。局部にほど近い秘毛に圧力がかかり、下唇を噛んでいた水輝はヒヤクツとしゃっくりでもするように呼吸を乱す。

つやつやと紅く濡れる淫靡な舌が、袴から腹部へと上ってきた。唾液の筋を残しながら、へそより高い位置にとめている上衣の帯を通るあたりで、中心から左側に首を曲げる。その先には二つの丘陵があり、下腹部を撫でられるおぞましきからか、先端に尖りが見えた。

同時に腿を撫でていた両手が動く。適度な肉づきで清楚さと情感豊かな美を兼ねそなえたお尻に右手が、夜巳の舌が向かうのとは逆方向の右胸に左手が。

「——ッッふ……ッ！」

それぞれ熱く柔らかな感触と冷たい氷棒のような感触に両の乳首を襲われ、性に関してまったく無垢な巫女は、思わず嘔み締めた唇の端から悲鳴をこぼした。

夜巳の口が吸いついた左の胸には、生ぬるく濃厚な舌戯が施される。同時に右の乳房は、手のひらで優しく揉みしだかれながら、先端の敏感部を痛いくらいこね回された。両方の刺激が伴って、肉の芯にジンッと未知の感覚が走り、水輝は切なげに眉をひそめる。

(な、なにコイツ……。あつ、やめ……)

片足を高く上げた格好なため左右で均衡の保てない尻肉にも淫鬼の魔の手は襲いかかった。撫で回していた右手の動きが止まると割れ目をすっぽりと覆い、真ん中にある中指の先端が、蟻の門渡り付近に触れたのだ。

生理のとき感じたことのあるもやもやが込み上げてくる。そうした知識があまりないうえ、いつも茜と一緒に寝ている水輝には自慰の経験がなく、むずつく官能にさらされ戸惑うばかりだった。だが女の指は、汚れを知らない肌だからこそ調子に乗って攻め立ててくる。

「ン……。うふ……。う……」

しこり立った乳首の、さらに先端にある窪みに、着衣の布地をざらざらと擦りつけられ、水輝は哀切に首を横に振った。お尻に回された手は、中指の腹で蟻の門渡りをくりくりと軽くこねながら、横を向けて親指を尻たぶの狭間にもぐり込ませる。清楚な菊門にまで冷たい陵辱の魔手が触れた。

「あや……っ、いつ、いやッ！」

お尻の穴を触られる汚辱感にさらされ水輝は、つい唾液の染みた裾を落としてしまう。処女の彼女にとってはあまりにも耐え難い感覚だった。

だがすでに柔らかな桃尻に触れている指の動きは止まらない。苦しむ彼女を嘲笑うかのように、ぐりりつと窪みを強く押した。

「——っくあああっ！ や……、おっ、やめ……っ、お尻には……」

形容し難い感覚に責められて少女は、眉根を寄せた弱々しい表情で哀訴の言葉を口にす。不快ななにかを身体に施されても、ただそれに耐えていれば茜を助けられるという考えが、果てしなく甘かったことを思い知った。この邪知と狡猾さに長けた陵辱者の指は、山奥育ちの無垢な巫女を、身体だけでなく精神まで汚しきるつもりなのだ。

両手を後ろで縛られていることが、寂しさや心細さをさらに強めていた。肘から手首までをぐるぐる巻きにされているため肩すら動かせない。

汗で蒸れた尻たぶの間は、片足を上げていることで左右に広がっているが、張りのある

肉がムチムチとせめぎ合い指をもぐらせるには随分と狭い。だが触れるのが繊細な親指一本でも、熱い不浄の溝はおののくようにきつく締まった。

「くは……っ。や……。うううっ……—きゃッ！」

反射的に腰が浮いてしまい、爪先立ちになった。片足を高く上げている格好がさらに不安定になってしまい、刀の鏝部に置いていた足がはずれる。倒れかかった彼女の身体を支えたのは、胸に顔をうずめる夜巳だった。

「面白い反応をするのう……。ひよつとするとこちらが好きなのか？」

単純な嫌悪であれば耐えられなくもないだろう、凜々しい戦士の側面も持つ巫女の反応に、からかいの声をあげる。

だが当人は聞いている余裕などなかった。濃紅色の筋の連なりに今度は中指が触れてきて、くにくくと優しく秘門部全体が、親指よりはるかに器用な動作で揉みこねられる。

（あッ……。ど、どうして——。お尻が……。お、お尻がヘンになっちゃう……）

淫蕩に微笑みながら柔らかな肉をほぐし続ける姫君の指遣いは実に巧みで、まるで彼女の性感がどう感じているかすべてお見通しのようなだった。

実際水輝は、自分自身ですら知らない牝の官能を、指や舌が動くたび次々と開発されていく。鉤状に曲げられた指の先が直腸を小突き、擦るたび、子宮が熱く火照った。緊張感から分泌された汗とわずかな腸液で、ぬちゃぬちゃとまさぐられていると、背筋を伝って

子宮が疼いてしまう。

「ううう……っ。や、やめて……っ、お願いだから……」

「フフッ。なにを言っておる。身体のほうはこんなに悦んでおるのに」

搾り出すような鼻声で哀願した。腕を後ろで縛られ胸が反らされているため、いやいやと首を横に振ると、突き出された白衣越しの乳房が、肉感的に弾むのが見て取れる。

被虐美に染まった巫女を見て逆に興奮した女は、中指を奥部に忍び込ませようと菊座全体に強く圧迫感をかけてくる。

キュウンッと子宮が絞られるように引きつり、両手を伸ばした巫女は切なげに喘ぎながら、まるで子猫のように頼りなく敵の身体にすがりついた。思わず腿をきつく閉じて内股になる。……そのとき、先ほどまで内腿の上で蠢いていた液体がどこかに消えてしまったことに、少女は気づけなかった。

「じゃがまあいい。いやだと言うならやめてやろう。ただし……」

余興の終わりを飾るため、少女の耳元に何事か囁きかける夜已。そして辱めに弱すぎる処女の様子に満足したのか、そろりと最後に一撫でして、手を袴から引き抜いた。途端に純朴な巫女の身体から力が抜ける――。

「わらわは……、な」

「――ひっ！」

たったいま汚辱の手を逃れ、空気に冷まされつつあった熱い窄まりに、またしてもなにかが覆いかぶさる。

「くくくうああッッ！ きあ……っ。あやああああッッ！」

内腿で蠢いていた、鮭肉色の軟体だった。これまで弄られていたとはいえ、指とはまったく違う生ぬるくて気色悪い感覚に、水輝は呪術師であり戦士でもあることを忘れ、一介の少女に戻って悲鳴をあげた。

反射的に腰を前に逃がすよう、両腕を縛られた肩が痛むほど大きく全身を仰け反らせる。だがその程度の動きでは、すでに柔肉と、その割れ目奥部にある慎ましい菊花にへばりついた液体が離れるわけもない。

キュッと閉じられた括約筋が、粘液の柔らかい圧迫感で抉じ開けられそうになる。

（いや——ッ！ なっ、中に……、中につ！）

圧力で開けられたごくわずかな隙間から、極細に形を変えた軟体が忍び込んできた。排泄にも似た、だがまったく逆の感覚が込み上げる。あまりの異常さに頭の中が熱く霞んでいくとともに、勝手に括約筋が緩んでしまい、さらに侵食の速さが増した。

液体が震えると、先ほど夜已に揉みほぐされていたときよりもさらに不可思議で背徳的な感覚が、背筋を駆け上ってくる。下腹部にこめた力がわずかに緩み、その隙に生温かい液体はずぶずぶと奥への侵入を始めた。

「あひあ……っ。ひっ……、ひんんっ」

ごくわずかな隙間でもどんどんもぐり込んでくる液体を止める術はなかった。すべてが直腸に入りきると、ガクッと全身から力の抜けた少女は、後ろ手に縛られたままその場に崩れ落ちる。床に顔を押しつけたうつぶせの格好で、ヒクンヒクンと緩やかに痙攣する袴越しのお尻が高々と突き上げられている。

「フフフフッ。そう気にするでない。四半刻もすれば出てくるであろう」

なにがあつたのか、分かつてはいても理解したくない様子で寝転んだまま呆然となつている少女に、夜巳は心底嬉しそうに告げた。腰をかがめると、ついさっきまで彼女の肛門をなぞっていた中指で、彼女の顎を捉える。

「そなたの身体も尻のほうが好みのようなだし……。待っておれ、あれが出てくるころには、あそこのくのーと同じような喜悦の味を教えてやる」

「……そんなこと……」

弱々しく、か細い声でうめく水輝。だが頭の中がぐちゃぐちゃになっていて、もうなにもしらなくなっていた。腹部に便意のようなものが残っていることと、それから液体が滑り込んでくる瞬間、尻穴を無理やり抉じ開けられるのに、奇妙な妖しさを感じたこと以外は。

「フフフ……、だがなんだかんだ言つて、お前も所詮……」

戸惑う巫女のそうした感情すら見抜いているかのように、夜巳は膝をついて、少しだけ掲げられた袴の腰部に手を伸ばした。

「う……」

すると、つき立ての餅のように白い女の腿が、ちょうど倒れ込んでいる顔の真横にきて、水輝の眼前には、奇抜な着衣に隠された内側がすべて見える形になる。

機械的なまでに一片の崩れもない妖花と整えられた秘毛。それは男であったなら誰でもむしゃぶりつきたくなくなるほどの官能美に溢れたものだったが、まず少女の心を捉えたのは、その匂いだった。

全身の細胞が侵され蕩け落ちてしまうような、甘い蜜の匂い。先ほど唇を吸われたときの何倍もの濃度を持つそれが、肺から染み込んでくるのを感じる。

常人ならばこの芳香にあてられただけで正気を失って、淫婦めいた姫君の虜になっていたかもしれない。水輝でさえ一瞬思考が霞み、卑しい洗脳を受けてしまいそうだった。

「——ひゃうっ！」

肺を満たす誘惑の香りに気を取られていた少女は、袴の脚間にあてがわれた女の指に、思わず甲高い声をあげる。

「……ほうれ、自分でも分かるか？ この音が」

侵入者への抵抗意識からきつく締まっている後口より少し下。使われたことがないため

かやや硬いその肉を、相変わらず少女の性感を心得た動きで指がまさぐった。充血した陰唇や柔らかい髭がかき回されると、ピリッピリッと背筋に寒気にも似た電流が走る。縛られている右手が緊張に強張り、爪が左手の革籠手に食い込んだ。

——ぷちゅ……っ、ち……、ぴちゅ……っ。

複雑な秘唇の中で跳ね返る音もしかりと聞こえ、袴には縦に細長い水気の筋ができていく。

「随分と汁気が多いようじゃのう……。フフッ、いやらしい肉体じゃ」

「……っ……」

侮蔑的な言葉を受けても、水輝は悔しそうに目を伏せこそするものの、睨み返すような明確な反発を面に出せなかった。夜巳の花園から漂う、かぐわしくも淫らかな香りが脳髄にまで染み込んで、頭の中がくらくらしているのだ。

「ますます気に入ったぞ……。そなたはわらわが直々に、心の底から隷従するよう教育してやろう」

熱い臀部に貼りついた袴から指を離して立ち上がり、縛り上げた両手を掴んで堂の中央、茜のいる位置へと歩き出す夜巳。かすかな残り香にまだ胸の奥がゾクゾクと痺れるうえ立ち上がる暇も与えられず、水輝は引きずられるように引きずられる。

遠目には分からなかったが、茜の身体にはいたるところに墨のようなもので、紋様が描

かかれている。水輝にはすぐにそれが『五通神法』であると分かった。古の中国の悪鬼を召喚、憑依させ対象の性欲を異常増進させる……。

「この貧弱な身体には少々不格好かもしれないが、まあよい。これも味わい深いものが——」
仰向けに寝そべっている茜の腰元に足を踏み入ると夜巳は、のそのそと近づいてくる水輝の視線を煽るように大げさに片足を上げる。

「——あるなッッ！」

「——~~~~~~~~ッッッひあああああつっ……！」

神経がつかまっていているらしい男物の性器を、つま先が食い込むほど強く踏みつけられ、茜の絶叫が堂内に響きわたった。

「……あ……っ、ああ……、あ……」

手を出さないと言われたからこそ屈辱を受け入れてきたのに。茜が辱められても水輝が動けなかったのは、人質自身の様子をその目で見たからだだった。

最初衝撃に見開かれていた瞳はわずかな後うつりと陶醉に染まり、むしろ女の脚を求めるように腰をせり上げてさえみせる。つま先の位置がずらされ雁首に乗せられると、ぶるると大きく全身を痙攣させた。尿道口に親指の爪を突き立て、ぐりぐりと抉じ開けるように弄くられると、ただでさえ巨大な逸物がさらに膨れ上がる。

「フフフ……。もっと踏んで欲しいか？」

ともすれば血の滲みそうなほど苛烈な拷問を加えているというのに姫君は、誘い込むような甘い口調で囁きかける。

するとまるでそれに迎合するかのようになり、茜はとろんと弱々しく眉根の下がった虚ろな目に媚びめいた光を灯らせ、こくりと頷いてみせるではないか。

「茜……」

心からの態度にしか思えない少女の態度を見て、姉は胸を満たす冷たいものに顔を青くした。妹を奪い取った淫蕩な悪女は、悲しみに暮れる巫女に勝ち誇った目を向けつつ、両脚を伸ばして寝かされたくの一の顔の左右へと持っていった。ちょうど彼女の顔を跨ぐ形になる。

「お前にはさきの礼をせねばならんが……。いまは気分がよいので忘れてやろう。さあ主人であるわらわに言うことがあるのではないか？」

先ほど囁みつかれた唇の端、大きく肉を削がれたはずなのに、もう傷跡すら残っていないその部分をさする夜巳。それを見上げる幼いくの一は、いまにも泣き出さんばかりに顔を歪めると、震える声で言った。

「申し訳ありませんお姉さま……。お姉さまに囁みつくなんて、茜が間違っていました」
それを聞き、さらに愕然となる水輝。

夜巳の言葉から、主従の関係を強調された水輝は先ほど、彼女のことを『ご主人様』と

呼んだ。それが彼女の望むであろう言葉だったからである。

だがいまの茜は、『主人であるわらわ』と言った彼女を『お姉さま』と呼んだ。それはまるで茜が、夜巳のことを力で圧倒してくる主人などではなく、自分の最も慕うべき者である『姉』として水輝の代わりに見ているようだった。

(違う……。なにかの術で洗脳したんだ。茜がそんな……)

思い込みたくても、最悪の可能性にしか頭が回らないのは、自分自身である。

「どうか踏みつけにしてくださいお姉さま。茜は虐められるだけで……。もう……」
欲情に染まった声はなおも聞こえてきた。水輝は辛そうに眼を伏せて、この世のすべてを否定するかのように首を横に振る。

「よかろう。望み通り踏んでやる」

「ああっ。ありがとうございます……」

その場で腰を下ろした夜巳の、婀娜めかしく脂の乗った臀部が顔に乗りかかってきて、茜は歓喜の声をあげた。

「フフフッ。さあて、わらわのモノとなる証を、たっぷりすり込んでやるう」

着衣をめくり上げて両脚を左右に広げると、茜の眼前にはふつくらと口を開いた濃紅色の局所が露になる。やがて弾力のある襞粘膜が小鼻の先に触れると、先ほど水輝の思考を焦がした蜜香の元であろう淫靡な汁液が、茜の愛らしい顔に塗りたくられていった。

「あはああ……、気持ちいい……。お姉さまあ……」

蕩けるような媚声をもらしながら茜は、先ほどまで敵対していた女狐の股座に顔をすり寄せる。

秘毛がいくら濃く、ぱつくりと口を開けた妖花は、色素や形こそ慎ましやかに整っているが、中央の源泉からは滾々と淫蜜が溢れ続けていた。それに花卉が深く充血しており、ひどく肉感的で生々しい。

茜はその淫らさを愛しむように舌を伸ばすと女が腰を前後させるのに合わせて、冠を弾いた大きめの陰核から、こちらも妖しい別種の芳香を放つ不浄の蕾までを、一生懸命に舐め上げている。

夜巳は少女を弄びつつ、くいくいと水輝に向かって手招きした。しばらく呆然としていた姉はハッとされたように近づいていく。

「この娘、どうやら逸物との精神適合ができておらぬ。このままだと放出の感覚が掴めぬからどんな快楽にさらされても絶頂を迎えることができず、狂死するぞ」

「——な……ッ？」

性への知識の薄さから、言われたことはよく分からないが、最後の単語だけはしっかりと分かり、水輝は顔を真っ青にする。確かに女にのしかかられている茜に目を向けると、表情から悦びは見て取れるのだが、ときおり低くうめき声を上げていた。そのたびに張り

詰めていた肉幹は、ビクビクと苦しげに震えている。

「ど、どうすれば……。助けて、助けてよ！」

呪道においては敵なしの少女は、妹という弱点にはあまりにも脆かった。途端に眉根に皺を寄せて、悲しい捨て犬のような表情になってしまう。

「助けることは容易い。そこに、射精を教えてやればよいだけじゃ」

夢中で秘部にむしゃぶりついている茜の舌戯で昂ぶってきたのだろう、姫君は表情の婀娜めいた色を強めながら屹立を指差した。

「刺激を与え、子種が噴き出すまで昂ぶらせてやるがよい」

「そんな……」

性技。いわゆる房術に関しては、くの一の専売特許であるため陰陽道を教え込まれた水輝はまったくと言っていいほど知識がない。それに単なる寄生体とはいえ、茜の大事なところと同化しているものに淫らな施しをするなんて……。

「……わ、分かった。やるわ。だからコレを解いてよ……」

羞恥や背徳にまとりわりついてくる感情を振り切るように、首を横に振って水輝は覚悟を決める。窮屈そうに背中で縛られた両腕の拘束を解くよう求めた。

だがそのときの身をよじらせる動きで、若々しく張り出した乳房が形を崩すのを見て、夜已はさらに恥辱の提案を差し出す。にんまりと相好を崩しながら親指を唇に啜えると、

唾液をまぶしながら舌を這わせ始めたのである。

男が見たら誰でもドキリときてしまうだろう、妖しく色めいた仕草。しかしそれがなにを意味するのか分かり、途端に水輝は顔を真っ赤にした。

「フフ、勘のいいことじゃ。しかし赤くなっている暇などないぞ？」

「……く——ッ」

自分の躊躇いで妹を苦しませるわけにはいかない。そう思い水輝は、夜巳の望むままに妹の脚の間へと近づいていく。誰よりもよく知った仲だけに、はしたなく開脚した格好でさえ見るのは恥ずかしいのに……。淫女の股間に敷かれ興奮から屹立している陰茎が、眼前に訪れる形になった。

茜は腰を跳ねさせ苦しげに身悶えしている。付属物自体もパンパンに膨れ上がって、早くなんとかしないと破裂してしまいそうだ。

（なにも考えないで。茜のため、茜のため、茜のため……）

妹の性器を口であやすことへの抵抗は大きいながらも、目を閉じてなにも見ないよう口を近づけていく水輝。

「……くくくあうんッ！」

だが敏感な秘芽が巨大化する形でできたそれは、やはり相当敏感になっているらしい。震える吐息がすぐぐただけで茜は、可愛く嬌声をあげた。

どうすればいいのかすら分からない水輝はその声に一瞬動きを止めたが、夜巳に告げられた『狂死』の言葉が耳の奥を反芻し、躊躇わず口を近づけていく。

やがて唇が、先端の少しだけ膨らんだ部分に触れた。

「ふあ……あ——」

「つう……っ」

姉妹は揃って、どこか情感を帯びた戸惑いの吐息をもらす。

触れてみるとビクンビクンと一定の間隔で痙攣しているのが分かる。怖いとすら感じるほどの逞しさを感じ、まだ処女の水輝は脅えを覚えた。

唇の感触から、多めに余った皮の内側にひどく硬くて熱い芯のようなものが感じ取れる。本来排尿のための器官で、硬くなると生殖器として機能する。という知識はあるのだが、それを生まれて初めて実感していた。

「ふあああ……。ああああああ……」

一方の茜は敏感な部位に柔らかく温かいものが触れたのを感じ、夜巳にお尻で踏み潰された口を半開きにして、か細く喜悦の声をあげる。

「フフフ。よいよい、妹も悦んでおるぞ。今度は舌を使って舐めしゃぶってやれ」

茜を失うのは彼女にとっても損害ということか。夜巳が指示を出してくる。

ぬるーっぬるーっと緩慢な動作で、縦向きに唾液の筋を残していくと、しよっぱくてい

がいがする粘液が舌にこびりつく。茜を救うという義務感があるためか、妹の性器の一部を舐めることには、恥ずかしさこそあるものの嫌悪感はほとんど感じなかった。

「あひ あああん……。いいい、気持ちいいのおお……」

夢見心地の茜は、舌足らずな声で甘えた喘ぎをもらしている。

口唇奉仕をしているうち水輝は、秘芽の変化した剛棒の、皮がだぶだぶして分厚い先っちょが少しだけ根元より横に太くなっていることに気づいた。そしてそのちょうど境目のところには、包皮の奥で段差になっている部分がある。その部分をコリコリと舌尖で突いてやると、茜の声はひたすら陶酔に甘く染まるのが分かった。

そうしてその弱いらしい部分を中心に責めていると、夜巳の次なる指示が飛ぶ。

「そうそう、男はそこが弱いじゃ。よく分かったのう。では先端から皮をめくって、その部分を舐めてやれ。これだけ高まっておれば簡単に射精することじゃろう」

そうすれば茜が狂死することはなくなる。そう思った水輝は、亀頭部の先端でわずかに皮がめくれている部分に唇を添えた。

「きゃは ああッ！」

だが男性器の亀頭部は、女性器の陰核と同じような作りになっているらしい。内側のツルツルした部分に触れると茜はたちまち叫びをあげる。

だがそれが痛み混じりの悲鳴だとは気づかず水輝は、迷うことなく窄めた唇を先端の尿

道口に密着させると、強く吸い始めた。加えて淫技に詳しいのだろう姫君の指示通り、こわごと舌を伸ばすと、子犬のように控えめな動作で割れ目の内側を刺激しだす。

「はあう——ッ！ うあッ、ひゃあああンンッ！」

男性への奉仕にしては過激すぎる。だが被虐の快感に目覚めた茜には、最も適した射精誘導術と言えた。

はしたない嬌声をあげながら、ガクンガクンと腰を上下させる妹に、水輝はなおも吸いついていく。雄の青臭さが鼻先に込み上げてきて、頭がくらくらした。

膨れ上がった男物の性器を口にする不快感や嫌悪感は薄れ、代わりにジンジンと肉芯が火照るような疼きが込み上げてきた。知らず知らずに舌が卑猥に蠢き、行為に没頭しそうな自分がある。

（ここ……。だよね、ここがいいんだよね……？）

尿道をくすぐっていた舌先を、亀頭部を覆う包皮の内側へともぐり込ませていく。唾液の膜に覆われているものの舌腹はザラついているため、雁首の鋭敏な粘膜をやや痛いくらいに刺激した。逃げるように腰をよじらせる妹を見ても、本能的に心の底から嫌がっていないと見抜き構わず舌を差し込んでいく。完全に勃起しているにもかかわらず皮が剥けにくいのは、できたばかりの肉茎の先端が刺激にひどく弱いことを代弁していた。

「きゃあ……。っ、ふ……。ふあひ……。っ、ひゃひいいんっ」

やや唾液が少なく、ザラザラした舌が亀頭の上を這う。まだ皮も剥けていない男根にはあまりに強烈すぎる仕打ちだった。

一際大きく茜の腰が跳ねたかと思うと、水輝は唇の中に、なんだかしょっぱいような液体がこびりついたのを感じた。それが射精の予兆である先走り液であるとは知らないが、少なくとも、男性器から出たであろう液体でもさしたる嫌悪感を催さない。むしろその生臭さが鼻を突くと、ずきつと子宮に震えが走るような気がした。

「ひいっん。お姉さまっ、お姉さまあっ」

先ほど覚えた絶頂感の再来に、茜が叫んだのは、水輝でなく夜巳だった。

キュッと胸に切ない痺れを感じる水輝は、同時に茜が腰を天井へ向かって突き出したため、口の中いっぱい膨張した亀頭部を咥え込まれることとなる。

その拍子に包皮が雁首の下までめくれてしまい、敏感すぎる亀頭部全体がぬめつく姉の口腔にすれる。

とろつく唾液に覆われた柔らかい口腔粘膜が亀頭部全体をくすぐり、同時に敏感すぎる雁首を限界まで開かれた朱唇に擦られ、剛根がこれまでにないほど激しく肥大化した。

「あああああっ！ お姉さまあっ、きますっ！ くるっ、くるうう——ッッ！」

床につけたおかつぱの髪を振り乱す茜は、一際高い悲鳴をあげる。

その途端、唇に覆われた巨大な肉の幹全体に、灼熱の鼓動がドクンッと鋭く駆け抜けた。



——ビュくる……ッ！

「くぶ……ッッ！」

液体とは感じられないほど濃厚で勢いをつけた迸りが喉を突き、水輝は思わず首を反らせて、唇から赤銅色の肉幹を引き抜く。

——ブシユルルッ！　びゅくくつ、びゅ……ッ。ビユルルッ！

「かは……つ、けつ、けほつ……ッ、けほつけほつ……。ふく……。う、うあ……」

ぬるぬるして強烈な臭気を放つ液体が喉奥に触れたため、目に涙を浮かべる姉の顔に、まったく勢いを衰えさせない第二波、第三波の真つ白な精弾が叩きつけられた。

それらは頬といわず髪といわず、猫目の美少女の顔すべてを汚していく。

「フフフ、なかなかよい見世物であった」

射精の快楽に打ちひしがれ、法悦の境地をさまよう茜の顔から、夜巳は腰を上げた。

顔中にこびりついた夥しい量の液体を巫服の肩口で拭いながら、水輝は茜の足元に座り込んだまま楽しげに笑う姫君を見上げる。

「これで……、茜は大丈夫なのね？」

口の中がイガイガして気持ち悪い……。白濁の絡んだ唾液も衣服にこびりつけながら、たったひとつの心配事を問う水輝。

「難儀であったが案ずることはない。この娘の精神はわらわの式神と上手く融合することができた。これで男としても女としても至高の快楽が得られよう。もう狂死の心配はない」
水輝としては最悪の事態を逃れたものすべてが悪いほうへ転がっていることに変わりはない。しかし夜巳にすれば、もう一人のお気に入りである茜が発狂もせず、事態が次々と望む方向へ向かっているのである。

「さて次は……。お前にもわらわの式とかよってもらおうことにしようか」

「——!？」

「なに、怖がることはない。お前にまで下賤なものを生やそうとは思わぬ。じゃが昨夜壊されたわらわの式は、責任を持って直してもらおうぞ」

昨夜壊した式——。といえはひとつしかなかった。……だが考えを巡らせるより早く水輝は、下腹部を締めつけるズキリと重い痛みに襲われることとなる。

先ほど直腸へと忍び込んだ鮭肉色の液体。あれが内部で暴れているようだった……。

「……ッッ！ ま、まさかさっきの——、あれ……は……」

「その通り。昨夜お前が無礼を働いた、わらわの父上じゃ。あのような貧相な身体にしたのはお前なのだから、修復するためにお前の力を吸わせてもらおうぞ」

腹の中に、あの不潔な中年の顔を持つ、肉液状の式神が入っている。

あまりにおぞましい事態に、顔を真っ青にして身体を折り曲げようとする水輝に、夜巳

はなおも絶望を与えた。

「辛くはないから安心するがよい。いまのままではこちらとしても、封印されているお前の力を吸うことができぬ」

そう言うとき夜巳は、寝転がったままの茜に右手を向け、人差し指を伸ばした。そして次に、それを水輝のほうへ向ける。まるで指で方向でも示すかのよう。

次の瞬間、茜の全身に付着していた『五通神法』の文字が、浮かび上がり水輝のほうへと飛びかかってきた。それは凄まじい勢いだったため逃げることもできず、少女のキリキリと痛む腹部へと吸い込まれるように消えていく。

「な……、なに……を……」

恥骨の近くに鋭い刃物をあてられたような、冷たい痛みだった。両腕が背中で拘束されているため、腹部を折り曲げることもままならない水輝は、苦しげな声で言う。加えて文字が入ってきた途端に直腸を襲う熱はさらに膨れ上がった。

いや膨張したのは感覚だけではない。内側に忍び込んだ鮭肉色の液体が、物理的に巨大化しているのである。それはたちまち細い腹部を裂かんばかりになった。便意にも似た感覚が重たく腹部を締めつける。

「お前の呪力中枢に五通神を書き入れたのじゃ。これで封じられたお前の力をいただくことができる」

「うく……っ、あ……ッ」

力を吸われる。それがどれほど重大なことかは分かっているのだが、いまの水輝には、おそらく力の吸収と連動しているのだろう式が、体積を増し始めたことのほうが問題だった。たちまちその場で横向きに倒れ伏すと、ぜえぜえと荒く息をつきながら、なんとかお腹に走る痛みをこらえようとすする。

腿を胸のほうへ引き寄せて身体を丸めても、逆に弓なりに仰け反らせても、どちらにしろ特有の痛みや不快感があった。じんわりと燻いぶされているような、緩慢ながら重く冷たい苦しみで下腹部が締めつけられる。

式神が膨張するごとに、痛みははつきりした排便の欲求になっていった。体内にあるのだから、欲求に従い出してしまえば力を吸われることはない。冷静に考えればそうなのだが、処女の場合は人前で排泄して耐えられるほど太くはなかった。

「フッフ、苦しいのはあと少しだ。感謝するがよい。父上が力を吸うごとに五通神が、お前の身体に、いままで味わったこともないほどの愉悦を与えてくれるぞ。それに……、わらわの可愛い下僕が一人、痛みを忘れるよう協力するそうじゃ」

全身に冷たい汗が噴き出してきて、聞いている余裕などなく身悶えし続ける水輝だが、視界の端で倒れていた茜がむっくりと上体を持ち上げるのに気づいた。

「うあ……っ、あつ、茜……ッ」

腹痛にもがくいまの自分を見られることが、ひどく恥ずかしいものに思えた。対する茜のほうは事態が掴めないらしく、しばし呆然となる。だが目の前で自分に誰より近い美少女が身悶えしていることは理解できたらしく、ぼーっと目を潤ませていった。

夜巳が耳元に唇を寄せ、小声でぼそぼそと囁きかけると、その表情には普段の無邪気さからは想像もつかないほど淫猥な色が刻まれる。最後に何事か命じられると、犬のように四つん這いで、まったく躊躇なく姉のもとへと近寄ってきた。間近で水輝の腹痛に喘ぐ様を見ると、舌なめずりして愛らしい桜色の唇を湿らせる。

「お姉ちゃん……。可愛い……」

いつもなら幼さしか感じられない舌足らずな声が、情欲に歪み、ひどくいやらしい音色へと変化していた。ドキッと胸を高鳴らせる水輝はそこで初めて妹に対し危険なものを感じたが、すでに遅く、少女の手は突如として袴に覆われた膝をすくい上げてきた。

「ひあ……ッ」

あまりに突然の衝撃だったため、腸内で暴れる異物がもれ出してしまいそうで、水輝は下腹部に強く力をこめた。菊の窄まりがキツく締まってなんとか事なきを得るが、その間に茜は捕まえた脚を持ち上げ、自分が望むままの格好を取らせてくる。

肩と後頭部だけが床につき、腹部を折り曲げて腰が最も天井に近い位置にくる……。つい先ほどまで茜自身が取らされていた、まんぐり返しの体位だった。

腹部が折り曲げられることによって圧迫され、激しい感覚に腸壁が抉られる。身体に降りかかる衝撃のひとつひとつで尻穴からおぞましい式神が押し出されるようだった。

「やっ、やめ……、ダメよ茜……。あか……。……——くああ……。ッ！」

腰のあたりから脳天まで走り抜けた、強烈すぎる電流のような感覚に、水輝は一瞬わけも分からず悲鳴をあげる。

「うふふ……。ここだね。ここが気持ちいいんだね、お姉ちゃん」

袴の上から置かれた茜の手が、指先を尻肉の谷間にもぐり込ませ、中心にある蕾に触れてきたのだった。式神が中で暴れているため必死で締めている肛門は先ほどよりさらに敏感になっており、それだけできゅっと食い締めてしまう。まして妹は尻たぶの柔らかさを味わうかのごとく、優しい調子で揉み込んでまできた。感触は緩やかな波のように子宮へと伝わり、身体中の細胞をジンジンと火照らせる。

相手が夜巳であれば、屈辱や憎しみで胸を満たせたかもしれない。だが茜が相手ではなによりもまず恥ずかしさが際立ち、ゆるゆると肛門を揉まれていると、卑猥な感情に胸が締めつけられた。式神に鈍く締めつけられる直腸に、第一間接まで埋め込まれた指が細かく振動を送ってくると、焼けつくような苦しみとともに妖しい痛みが腹部を突く。

（やは……。な、なにこれ……）

その切なさ、少女にとって最も忌むべき部分にとうとう火をつける。

呪力を発生させる根源である、呪力中枢と呼ばれる部分を犯す『五通神法』が、淫熱を放ち始めたのである。強制的に牝肉に刻まれていく官能に、水輝は激しく狼狽した。

全身が焼けてしまいそうなほど熱い。それに尻穴を撫でられ、奥の腸壁をいたぶられる感覚が、ひどく心地よいものに思えた。やがて茜が指先を秘孔から離すと、チクリと胸が痛むような切なさまで感じてしまう。

瞳に濁った光を灯らせた茜が、姉の太腿を押さえ股間に顔をつけてきた。安物ながらそこそこは頑丈な袴を、犬歯で苦勞しながらも繊維を少しずつ削ぎ取っていく。やがて小さな穴ができると、あとは引張るだけで縦に裂けていった。朱の布地の内側に可愛らしいお尻が露となる。

「うわあ……。お姉ちゃんのお尻の穴って初めて見たあ……」

わずかに腸液で濡れた濃紅の蕾に、茜の好奇の視線が突き刺さる。

妹にこんな姿を見られるなんて……。そう思うと水輝は自分の全人格がばらばらに砕け失せてしまうような気がした。だが楽しげに傍観する姫君の狂気と淫らさが乗り移ったように媚笑を浮かべた茜は、さらに無残な仕打ちを課してくる。

「あは……。可愛い、お姉ちゃんのココ。気持ちよさそお……」

うっすらと色素の沈着した会陰部に息を吹きかけ、濃い紅色の蕾が震えながら窄まる様を見て蕩けるように目尻を染める茜。刺激を誘い込むように開閉を繰り返す菊華を見てさ

らに興奮したらしく、亀頭部が一層膨れ上がり雁首のえらが深くなる。

姉の突き上げられた腰に肥大化したそれを密着させると、なんの躊躇もなく灼熱の滾りを着衣の内側に押しつける。最初水輝はなにをされているか分からなかったが、尻肉にあってられるツルツルした感触に、その正体を直感した。

「だっ、ダメッ！ 茜、それだけは——」

背中縛られた腕をギチギチと動かして、なんとか茜をはねのけようとする水輝。だが愛しい姉と一体化することになんの躊躇いもない妹は、先端で熱い蕾を探りあてると、一気に挟み開けてきた。本来異物を排出するためだけにあるうえ、いまは式神を押さえつけるために絞られている部分だが、巨大な肉塊は強引に入ろうとしてくる。

(こわれちゃ……う……ッ)

侵入口を破られる痛みに悶える少女だが、長大な逸物は絹のようにツルツルとなめらかな粘膜を、強引に挟ってくる。菊の花のような皺が限界まで伸びきり、いまにも裂けそうだった。

腸液がわずかに染み出して、お尻の谷間に生温かさを感じた。腸は式神にいたぶられているうえ、入り口が挟み開けられたために、身体が勝手に反応を起こし、腸の蠕動が始まったのだ。ぐるると下腹部が冷たい音を立てる。

「きやううあつ！ かふ……っ。うううううっ。いやっ、いやダメええっ」

括約筋にめいっばい力をこめる水輝だが、すでもぐり込む穴を捉えた茜を押しとどめることはできなかつた。

めりっめりっめりっつと段階を踏んで、巨大な亀頭部がとうとう送り込まれてくる。

その瞬間、子宮に震えが走ったように思えた。無理に割り裂かれた括約筋がきしむほど痛い、それとは違う感覚が、腸壁に熱く込み上げだしたのだ。

異物に拡張された排泄器官が、召喚された悪鬼、五通神の力によって、おぞましい淫悦を覚える。

茜が結合を強めようとするごとに、太いそれに割り開かれた肛門には激痛が走り、無理やり挟られる腸壁は妖しい官能を覚える。そしてくの字に曲げられた腹部が強く圧迫されたことで、排泄への欲求も一段と高まってくる。

「うああ……っ、——あつ！ あああああ……」

全身を襲う三つの感覚に翻弄され、水輝は弱々しい悲鳴をあげた。

「す、す……お……お姉ちゃんのお尻……、あつたかくて、ぬるぬるして……」

先ほどは口腔粘膜に触れただけで達してしまった敏感な亀頭部を、ぬかるんだ肉穴に包まれて、茜は感極まったように愛する姉に抱きついた。

いつも寝るときやお風呂でしているように、蕩けそうなほど柔らかな乳房に頬ずりする。腸内で彼女の呪力を吸い集めていく式神はいよいよ興に入って、呪力を吸い取りながら

巫女であり術師でもある、本来ならば自分らを使役する女の肉を作り変えていく。

腸粘膜が蕩のように絡みつき怒張をしごき上げる甘い歓待を受け、茜は鼻にかかった可愛らしい悲鳴をあげた。入り口部は食いちぎろうとするかのように締めつけてきて痛いくらいなのに、内側は濃厚な蜜液で絞られているように柔らかく、しかもムチムチと襲がせめぎあうように擦りついてくる。

「ひいいいんっ。気持ちいいっ、お尻のあな気持ちいいよおっ」

「うああああ……っ。まって……、茜……、あかね……」

純白の巫女服に包まれた、天女のようにしなやかな身体を、荒々しく前後に揺さぶる。野獣のような妹の動きに、とうとう水輝までも上ずった声をあげてしまった。鮭肉色の液体型式と五通神。二つ淫鬼に蝕まれた心と身体は、すでに官能への抵抗をなくしている。

快樂の秘孔に剛棒がぬちゃぬちゃと出し入れされ、色白の美貌が艶めかしく紅色に上気した。

(だ……っ、だめ。お尻が……、お尻が……)

断続的に鼻にかかった吐息をこぼしながら、水輝は不思議な感覚に陶然としてしまう。麻痺した下腹部に力が入らず、菊門には腸の内容物を押さえる力はすでにほとんど残っていない。だが直腸の蠕動に乗って外に出るかと思われた式神は、今度は茜の逸物に出口を塞がれ、飛び出すことができない。

式は出口を求めて四方へと暴れ出し、腸壁がさらに際どく痛んだ。それがもたらす熱い恍惚感に水輝はくらくらしてしまい、括約筋をさらにキュッと締めつける。

「あん……、ああンンっ、お姉ちゃんのお尻すごいっ。お尻気持ちいいのおっ」

式神の動きは茜の陰根をも熱く擦り上げてきて、少女はいつもはのんびりした幼い声で淫ら極まる嬌声をあげた。獣のように荒々しく唇を求め、こちらの唾液を飲み干さんばかりに舌を差しこみ、強く吸いついてくる。

妹の女性器部は、興奮の度合いを示すようにドロドロと卑猥な汁を垂れ流しにしていた。それはオサネの位置についた剛直を伝って交合部にたまり、出し入れの滑りを手伝う。

グリリッと強く突き入れられると、姉は凜々しい眉根を弱々しく下げながら、小鼻を喘がせた。いつしか朱色袴が貼りついた腿の付け根には、水輝自身の蜜液がべったりと染み出してきている。

「あ、茜え……。お尻が……。お尻がヘンになっちゃうう……。っ」

桜色の唇から妖しい啜り泣きを放ち、とうとう水輝も、妹と結合した肉を擦り合わせるよう肌をうねらせだした。

腸から放たれる排泄の欲求は、限界まできている。腸壁はうねうねと激しく蠢き、栓になっっている茜のものが抜けたらすぐに中身が噴き出すだろう。だがいきんでいるにもかかわらず解放されない、そのもどかしい感覚が、被虐的な恍惚へと変わってきていた。頭の



中で稲妻が閃いたかのように白くなる。腸壁に加わる圧迫感はず子宮へと伝わり、応じるように膣肉からは滾々と花蜜が湧き出した。

「わは……っ、お姉ちゃん。お姉ちゃんも気持ちいいんだね。分かるよ。キュンキュンしてぐにぐにして……、わたしのを痛いくらい締めつけてくれるもん」

嬉しそうに、深々とつながった逸物をさらに激しく突き立てる茜。

「うっ……あう……。い、いい。すごくいいっ」

腹部全体が燻られるような苦しみも、異質な興奮と陶醉へと形を変えていた。尻穴から込み上げる感覚が、まだ処女の水輝に性感を刻み込んでいく。

そして、はっはっとな犬のように荒く息をつきながら幾度となく唇を合わせるうち、茜に限界のときが訪れた。

夢中で揺すりたてていた腰の動きが一段と激しさを増し、特に敏感な雁首と締めつけてくる括約筋とが、ぴったりと合わさった状態で擦れたのである。内側のプニプニと柔らかな粘膜が、敏感な亀頭部全体をあますところなく搾り上げてきて、男性器からの鋭い快感に襲われた少女は、思わず姉から身を離し、全身を仰け反らせた。

その拍子に硬いそれは、生ぬるく蠕動する腸管から抜け出る。

「はあう……っ、あ……、あああああ……ッッッッ！」

びゅるるるるっ！ びゅくくっ！ びゅくッ！ びゅッ！

快樂の結合が解かれた直後のためか、二度目とは思えないほどの勢いで濁った精液が水輝の身体中に降り注いだ。

そして茜という栓を失い、彼女にもまた放出のときが訪れる。

「うあ……っ、あああ……ッッ……！」

薄れ果てた羞恥心や理性では、官能を探りあてるように込み上げる便意を止めることはできなかつた。にゆるるつとわずかに力を残した括約筋の隙間から、生温かい汚物が顔を覗かせるのを感じる。

（出る……っ、出ちゃうっ。ああダメ……。ヘンっ、ヘンよ——ッ！）

茜に腿を押さえられたまま、水輝は、天井に最も近い位置においた尻穴から、膨大な量の式神をひり出し始めた。

「あああああああああああ……ッッッ!!」

ブビュッ、ビュブルルッと、水気の混じった下品な放屁音が堂内に響く。

鬱積し続けていたものが解放され、麻痺したように痙攣する括約筋を広げつつ外へと飛び出していく感覚に、あられもなく絶叫する水輝。鈍く溜め込まれていた痛みや不快感が、すべて強烈な快美の嵐へと変貌していく。何物にも代え難いほどの高揚感だった。

足袋に包まれた足がきゅうつと折り曲げられ、ピクッピクッと痙攣する。寄生した五通神の力で快樂を得ているのか、ただ排泄に悦びを感じているのかすらもはや分からなくな

っていた。

「あ……っ、あうう……っ、すごい、すごいわ……」

やがて出しきったのだろう、放出の勢いが弱まると、水輝の腰はヒクッヒクッと痙攣するのように、自然と左右に揺れだした。無意識のうちに、直腸の蠕動によって異物を最後までひり出そうとしているらしい。

(あ……、やだ……。おわっちゃう……)

ぷぷ……っ。ぷすー……。

可愛らしいおならを最後に、茜が腿から手を放し、ぐらりと少女は体勢を崩してその場に寝そべる。

神聖なお堂で、しかも最愛の妹である茜を含めた人前で。排泄の欲求に屈してしまったことは、忘れたわけではない。だが少女の表情にはそれ以上に、我慢の限界を超えたところにある解放の悦びに酔いしれていた。

※

同じような法悦の表情を浮かべる姉妹を見下ろし、夜巳は満足げに水輝から飛び出した液体型の式鬼を見た。

最初鮭肉色だったそれは急激に色素を失っていき、人間の肌の色に変わった。加えて天井のほうへと伸びていくあたり、なおも急速に体積が増えているようだ。



「フフフ。素晴らしいぞ。たった一人で、この短時間に……」

優美な肢体を楽しそうに揺らして、液体が蠢く水輝の足元へと移動する夜巳。

その言葉を聞いて、乱れた巫女服姿の少女はなんとか身体を起こすと目線をそちらに向けた。気だるそうな瞳には恍惚感があとを引いており、最初見せていた気丈さはすっかりなりを潜めている。だがどんな隙も見逃さない反抗的な光だけは、かろうじて残っていた。五通神から伝えられる媚熱は、まだジンジンと残っている。相当な量の呪力を吸い取られたらしかった。霊視が利かないいまの状況では具体的にどのくらい取られたかは分からないが、身体の端々がぐったりするほどの消耗感がある。

ただそれより気になったのは、夜巳の言った『たった一人で』という言葉だった。

「なるほど……。だから来鑄家は、陰陽師を集めてたわけね……」

喉が上手く動かずかすれた声が出る。

「フフッ、その通り。父上はわらわの最も気に入っておる式じゃ。だから肉体の量が減れば肉を食わせたし、力が枯渇すればいまのように、美味しい餌を用意してやっておる」

クスクスと無邪気な笑顔でおぞましいことを言われ、くらくらする頭を振って考えを巡らす水輝。

来鑄家が人攫いをしていたのは、単純に肉が必要だったかららしい。そして術師らを引き止めていたのは、いまの水輝のように呪力を吸い尽くすため。

昨夜、集まっていた陰陽師の類は、水輝の式がすべて死体まで食い尽くしてしまった。そのため昨夜の件で消耗したらしいこの軟体質の式神に活力を注ごうとここにきたのだらう。確かに『肉』であればどこに行っても手に入るが、力に関しては水輝がいれば、昨日程度の術師百人を集めるより手っ取り早い。

「……ッ……」

睡魔にも似た虚脱感に抗いながらなんとか目を開ける水輝。目の前では液体の化け物が、変態を終えるところである。

褐色じみてぶよぶよした肌色の肉の塊。ところどころに毛が浮いて、てっぺんには巨大な目玉や歯がまばらに浮いている。元が人型であったとは思えないほどおぞましく変貌した、本来なら権威ある地主であった男が、ぎよろりと濁った瞳を少女に向けた。

その光景を最後に水輝の瞳からは生気が失せ、眠りにつくように静かに閉じられる……。意識が、闇の中へと遠のいていった。

第五章 落花

暗い室内に、ほのかな朱色の明かりが灯っている。

夕方——？ 目蓋の裏に感じた光を不思議に思い、目を開いた水輝は、それが壁にいくつも立てかけられた灯台の油火であることに気づいた。

社からどこかに連れてこられたようである。先ほどの堂内よりよほど広い、床が畳で敷き詰められた部屋だった。辺りを見渡すと、壁の一部に大穴が開いている……。

どうやら、昨夜大暴れした屋敷の主用の寝室らしい。水輝自身が破壊した壁の形には覚えがある。

とりあえず状況を確認しようとした。どうやら一刻以上は眠っていたようだが、疲れがまったく取れておらず身体が鉛のように重い。それだけに目を開くことですら億劫なほどだったが、わずかに耳が捉えた不快ななにかに気づき、なんとか上体を起こした。

そして暗くぼやけた瞳で、信じられないものを見る。

「はあああん……。んふあ……。いつ、いひいいいい」

「きつ、きもち……。いいいんっ。気持ちいいっ、気持ちいいのおっ」

室内は強烈な熱気に満ち満ちていた。寝室にしてはかなり広い部屋はもちろん、壁をぶ

ち抜いた先の廊下までを、肌色が埋め尽くしている。それらはすべてが興奮の熱気を放ち、汗混じりの淫らな芳香をふりまいていた。

女たちである。嫁入り前から三十路そこそこといった、ちょうど女としての肉体的な絶頂期にある、数十の女たちが、互いにくんずほぐれつしているのだ。

みなどこかで見たことのある顔だった。お幸、百合、きよ、おまち、おりよう……。名前を覚えていてるだけでこんなにもいる。水輝がこれまでの八年間、仇の父を追ううえで副産物的に助けてきた、方々の里の娘たちが集められたようだった。

彼女たちにはしたない声をあげさせ、淫らな熱を放たさせているものはなにか。暗い室内でも一瞬で分かるそれは、触手状に伸びたいくつもの陰根だった。指ほどの太さしかない幹部に対し、龟头部が笠のように開いている。

水輝が知る勃起した男根といえは茜のおさねが肥大化したまがい物だけだが、その偽者以上に人体の付属物だとは思えない、浅黒く禍々しいものばかりだ。

どの女たちの股にも、三、四本の触手がもぐり込んでいるのが見て取れる。ちょうど水輝のいる部屋の隅に向かって両脚を開いた、茜より少し年上くらいの少女の脚間では、しつとりと濡れた陰裂と尻穴、それから尿道や淫芽、脇や乳房など全身のいたるところを二本の触手が撫で回している。おそらく他の娘も同じことをされているのだろう。

新たな生命を育む。その程度の理解しかなかった行為をつきつめると、これほど狂気め

いた宴と化すとは。水輝はいまさらのように唾然としてしまっていた。

そして、少なからず恐れれの混じった視線を、多量に生えた淫幹の根元へと向ける。

「ふあは……っ、あああああつ。おっ、おねえさまああつ！ てるっ、でますううっ」

「く……っ。まだ……、まだじゃ。フフっ、ふ……っ、うううっ」

部屋の中央では横になった茜の上に夜巳がのしかかり、ぬるぬると滑る股座を擦り合わせあう光景があった。姉とさえまぐわうほど欲望への耐性が削られている茜のこと、不思議ではないのだが、二人がひとつになっている光景を見ると、嫉妬が胸を焼く。水輝は思わずその光景から目を離れた。

すると、茜と夜巳の二人にも絡みついて、茜の女性部や夜巳の尻肉を抉っている触手の根元が視界に入った。

やはりというべきか、先ほど水輝の腸から大量に呪力を奪い取っていった式神である。夜巳の父、藤衛門が素になっている怪物は、すでにくすんだ肌色の肉塊となっている。昨夜は頭部があり、意思もあつたようだが、いまはうねうねと蠢きながら触手を用いて女たちをいたぶる、いわば娘の望みを叶えるための道具と成り果てている。姫君の口ぶりからは父と娘という立場を忘れてはいなそうだったが、完全に式と主の関係だった。

「フフフ……、目を覚ましたか」

茜と交わり合う興奮に顔を赤く染め、声を上ずらせた夜巳が、水輝の様子に気づく。

巫女は肉体的な疲れとともに、排泄によって精神にも限界がきているのだろう。茜を取られた憎しみはあっても、女と目を合わせる事ができなかつた。

「どこかで見た顔ばかりであろう？ フフフ、あの神主型をした式神に聞いたぞ。わらわの屋敷を荒らしたただけでなく、正義の味方気取りで随分と方々の村に世話を焼いておるよ
うじゃのう」

ケラケラといやらしく笑う夜巳の態度からは、その善行を皮肉ろうという様子がありありとうかがえた。まだなにか悪しき企みがあるのか。水輝は背筋に寒いものを感じる。

父の身体から伸びた触手の亀頭部が括約筋をゴリリと擦り、夜巳はピクンと白い喉をそらせた。興奮を重ねるごとに妖艶さを増す危険な微笑で口を歪めつつ、水輝の悔しさを煽るようにうめくような声で言う。

「お前にゆかりのある人間を集めようとしたが、ほとんどおらんうえに一晩しかなかったからのう。この程度しか攫ってこれなかつた」

「ッ……」

「フフフッ。気にするでない。この娘たちは、欲求不満気味じゃつた父上を満足させるために集めただけ。そなたが気にかけるべきは……」

唇を噛む水輝に、夜巳が一際いやらしい視線を投げかけた。そのときだった。

「な……っ。なんじゃこれは……？」

老人らしくわずかにかすれた声が室内に響き、部屋にいた人間のうち意識がある者の視線がそちらに向けられる。

崩された壁とは別方向の廊下に立つ男たちの声だった。

夜巳が女たちを攫う際、この場所をほのめかして誘い出したのだろう。女たちが住む里の、村長を始めとする男たちだった。先頭にはつい昨日話をした播斗の里の村長ら五人が立っており、美女美少女が化け物に襲われる異常な光景を呆然と見ている。

夜巳が仕組んだ状況に違いはないのだが、なぜ人を増やそうとするのか分からず、水輝は本能的な危機感から夜巳のほうに顔を向けた。

常に戦いに身を置いてきたとはいえ、山奥育ちの清純さから卑怯極まる手段にはてんで疎い巫女には、地主の嬢が自らの悪癖を周囲の村民にさらしているとしか思えない。戸惑うのは当然の話であろう。だが奸智に長けた邪姫は、思いもよらぬことを口にした。

「た……っ、助け……。助けてたも……」

突如として、抱きすくめてくる茜から逃れたがるかのごとく身をよじり、涙に震えた声で助けを求め始めたのだ。

「ばっ、化け物が父上を亡き者にして……。いつ、痛いッ。やめてたもっ。痛いっ」

過剰なほどの叫び声——。それを聞き水輝は、その理由が分かった。理性をなくし、乱雑に腰を女に押しつける茜。それは夜巳の言葉と相まって、強姦魔の

動きとしか思えなかった。ましていましがた現れたばかりの男たちからすれば、お館様のお嬢さんが目に浮かべた涙が、演技などとは到底思えない。

「ひいいいっ！ 痛いっ、痛いッ。痛い痛い痛い痛い痛いッ！」

自分を処女だとしても設定しているのだろうか。泣き叫ぶ夜巳。

「いっ、いかん！ お嬢さんを助けるんじや！」

室内は艶めかしい女体に交じって触手がうようよとくねる異様な空間だったが、人数が恐れを退けてくれるらしく、男たちは一気に室内へとなだれ込んだ。

状況を把握したとはいえないが、とりあえず女性が助けを求めていることは分かる。それぞれが懐刀や、なければ素手で、うねうねと不規則な動きを見せつつ夜巳の傍でじっとしたままの式神に向かった。

部屋の最奥で犯される夜巳に辿り着くまで、横たわった村娘たちの股座にも触手が侵入していたので、勢い任せに刀で切りつけた。すると蠢く薄気味悪い肉は、意外なほどあっさりとして少女たちを介抱する。

自分たちでもなんとかできる。その自信につき動かされ、男たちは恐れることなく触手の中枢とも呼ぶべき肉塊へと向かっていった。牽制の意味で数本の刃を突き立て、同時に庇い抱くように、まずは夜巳から歯を引き剥がす。

「うっ、うっう……。ば、化け物じゃ……。化け物があぁ……」

か弱い姫君を気取る夜巳に、まさか謀られているなどと思わない男たちはすっかり信じ込み、彼女を囲う形で陣形を組んで強姦者のほうへと敵意の目を向けた。

「あひあ……だ、だめ……。こんなところでやめちゃ……。ああ、疼くのお。おさねが疼いて……。しゃ、射精っ、射精したいのお……」

すでに理性を失った茜は、虚ろな目をしてその場に横たわり、引き剥がされた淫女の肉壺を求めぴくぴくと悶えている。女性器や菊座には相変わず化け物の触手がめり込んでいるが、急に刺激の消えた怒張だけは、パンパンに張り詰め苦しげに痙攣していた。

そして、可愛らしい少女の容貌は、男たちの誰もが記憶するところだった。

「ど、どうということじゃ……。茜ちゃん。なぜこんな……」

「まっ、魔羅が生えておるぞ！ 妖怪じゃ！ この娘、物の怪じゃぞ！」

男たち全員が、明らかにおかしな方向へと勘違いを始めた。彼らの目が茜に注がれているのをいいことに夜巳が振り向いて、いやらしい視線を送ってきたことで、水輝はハッとなる。

「ちっ、ちがう！ みんな待って！ その女は——」

この状況を自分たちのせいにするつもりなのだ。焦った水輝は大声で、一度は恩を売ったことのある男たちに呼びかける。だがそれでようやく彼女の存在に気づいたらしい彼女の視線は、恐れと冷たいものの入り混じった、昨日まで見せていた友好的なそれとはまっ

たく違うものだった。

「水輝さん……。なぜお館様の屋敷に……」

「みっ、見てみい！ あの服……。陰陽師どもが着ておるものとそっくりじゃ！」

「そ、それに。ここに集まっておる攫われた娘たち……。皆、臥雲神社で物の怪にとり憑かれたと言われたことのある者ばかりではないか？」

疑念——。いや、はつきりと猜疑心の混じった視線が身を射抜く。

まさかこんなことになるうとは思ひもしなかった水輝は、混乱するばかりで釈明の言葉もろくに出てこなかった。

だが嘘はつき慣れた姫君は、歪めた口元から容易くいまにも泣き出しそうな声を出す。

「わ、わらわには分からぬ……。しかし突然この化け物が襲ってきて。それからそんな娘が姿を現したのじゃ……。わ、わけも分からぬうちに乱暴され、いつしか女たちが集まってきて……」

「な、なんという……」

怯えた姫君の言葉は、疑いすらしないのだろう。男たちはどんどんと顔色を変えていく。民衆にとつての『陰陽師』は、不可解な使役であやかしを司る、一種の魔物にすら近い。加持祈禱でもって村を危機や不便から救ってくれた慕うべき巫女が、そんな邪悪な存在だったとは。可愛らしい妹の巫女は半陰陽の妖魔で、肉塊の化け物を従え、地主様の屋敷を

襲って村の娘たちを攫おうとは……。

疑念が敵意へと変わりゆくそのときを見計らって、夜巳は自らの仕組んだこの状況に笑みをこぼしつつ、村民たちの感情を後押しした。

「娘たちを助けるにはあの化け物をなんとかしないと……。陰陽師の使役する魔物ならば、主の精神を乱してやれば制御を失うと言われていますが……」

周りの男たちに向け、わずかに本性を滲ませつつ熱い吐息を吹きかける。

原初の媚薬は女の吐息であり体臭だが、その言葉が詩的な高尚さを失うほどに、夜巳の持つ芳香は妖しい力を持っていた。精神修養のできている水輝でさえ、際どい部分から立ちのぼる甘い誘惑にドキリとさせられたのである。異性であり、また異常な事態に興奮気味の男衆であれば、目の色を変えるのも仕方のないことだった。

「どうか、彼女たちを助けるために力をお貸しください。幸いこの化け物は女たちに気を取られていて、あの陰陽師はいま丸腰。全員でかかれば……」

あくまで弱々しい口調は忘れず、夜巳は人間の心の最も暗い部分にまで充分響くほど低い声音で囁く。

最初戸惑っていた男たちは、自分たちの村の娘を守ろうという正義感と、それとは違う後ろめたい感情につき動かされ、思案することもなく女の口車に乗せられた。

「ちょ……。ちょっと待って！ そいつを操ってるのは私じゃないわ！」

ぞろぞろと近づいてくる男たちを見て、水輝はかつてない恐怖にかられていた。昨日話をしたばかりの播斗の男たちや、よく神社に参拝にくるふもとの村の老人たちといった顔見知りや、敵意を持って近づいてくるのだ。

「それにこの人たちも、私が集めたわけじゃない！ そいつが、夜巳が——」
「黙れ邪鬼め！ よくも俺たちをたばかってくれたなッ!!」

怒号で水輝の声を掻き消したのは、村を救った感謝の印に重い米俵を担いで山頂の社まできてくれた、播斗の里の若い巨漢だった。昨日は、出されたお芋を誰より多く頬張って、茜にすごいと褒められ照れていた三白眼が、怒りと興奮に血走っている。

「う……」

術を封じられた彼女は、いまやなにもできない、まさに彼らが捉えていた通りの一介の巫女である。しかし男たちの目には凶暴な獣とすら見えるのだろう。鋭利な懐刀を構えつつ、隙なく忍び寄っていく。

「……ッ——！ ……ッッああッ！」

弾かれたように逃げ出そうと踵を返す水輝だが、判断が少し遅かった。男たちの一人が、少女の後ろで束ねられた長い髪を掴むと、思いきり引っ張る。なにやら分からぬうちに動けなくなってしまう、少女は髪を引っ張られる痛みから顔をしかめた。

そうするうちに、男たちが一斉に全身にまとわりついてくる。術を失った術師は、たち

まち両手両脚が動かせなくなった。掴まれていた髪から髪留めがはずれ、油火を濃紺色に反射する純黒の艶髪が、ばさりと腰まで落ちる。

「やっ、やめて！ 話を聞いて！」

首を横に振って綺麗な髪を乱しつつ、なんとか落ち着いてもらおうよう訴えかける水輝。一度は彼らを救った自分なのだ。話さえ聞いてもらえれば、夜巳の邪知ぶりを暴露し味方に引き込めると思っていた。だが男たちはまったく聞く耳を持たない。

「くっ、くそっ。よくも女たちやお嬢さんを……」

「お前もわしのお幸と同じ目にあわせてやる！ あの化け物を動かしやがったらすぐに殺してやるからな！」

数年前に山の妖怪に食われかけていたところを密かに助けた、お幸の父の老人が、興奮したように袴の股座へと手を差し込んできた。いきなりこのことで驚くばかりの水輝だが、四肢が押さえつけられているため、腿を閉じる程度の抵抗しかできない。

「なっ、なにをするの！ やめて！ お願いだから落ち着いて！」

男の手が股に触れる、ひどく単純でそれゆえに多大な薄気味悪さに、水輝は肌をあわ立たせた。

加えて後ろから伸ばされた誰か別の男の手は、さらに絶望的な部分を捉える。

先ほど茜に破かれた、袴の裏の、お尻が丸見えになるほど大きく開けられた穴。そこに

もぐり込んできた指が、迷うことなく菊の蕾に触れたのだった。

「——ッッッ！」

水輝は鋭く、声にならない悲鳴をあげた。

先ほどの巨体の三白眼である。男の太い指が、茜との交合の余韻でほぐされている尻穴を、軽く突いてきたのだ。

たちまち妖しい電流が全身を貫き、水輝は思わず切なげに喘いだ。

「うあああ……。や、やめて……。さつ、触らない——。いやあああッ！」

どれだけ大人びてはいても、所詮は未通であり、加えて妹との情交によって変質的な快楽を教え込まされた性に弱い少女である。先ほどまで巨大な異物で擦られていたため少なからず敏感になった菊門を撫でられると、迸るような悲鳴が飛び出す。

「へっ、こんなケツの開きたいやらしい服着てるくせに、なに言ってやがる！」

「大人しいもんだぜ。案外、俺たちを呼ぶために女どもを攫ったんじゃないかねえのか」

夜已に人間として最も浅ましい部分を刺激された男たちは、もはや彼女の下僕ともいうべき淫鬼と化していた。

そして、加害者にされ謂れのない仕返しをされる被害者の少女は、無骨な百姓たちの淫技を受け、激しく困惑していた。

背中に密着した男が両腕を羽交い締めにして、身動きが取れないようにしてくる。両脚を押さえる手は腿やふくらはぎを撫で回しており、それ以外の男たちは皆、美少女の局部のみを狙って手を伸ばしてくるのだ。

「まったく……。可愛い顔をしてこんな淫売だったとは。残念じゃ」

昨日は実の孫に接するように快活で柔和な笑顔を絶やさなかった、播斗の里の村長が、ぶつぶつと呟きながら美麗な光沢を放つ純白の上衣を撫で回してくる。

千早衣の中に手を突っ込んで、思うままに形のよい乳肉を揉む。蕩けるほど柔らかな感触を最大限に活かして、膨らみ全体が揺されるほど乱雑な揉み方だった。加えてコリコリと乳首まで弄くられると、水輝は思わず鼻を鳴らしてしまう。

適度に脂が乗って、しかし若々しい張りに満ちた乳房である。農耕人生でゴツゴツと硬くなつた男の指に弄ばれていると、次第に熱く汗ばんでいく。充血した乳頭で着衣がぽつんと盛り上がる。

「だめ……。や、ああ……。…」

美少女のやわな肌。甘い体臭に興奮し始めた男たちが、ハアハアと息を荒げている。ぼろきれに近い着衣を、下から隆々とした滾りが突き上げていた。その生臭い空間の中央に置かれた少女は、戸惑いとともに激しい焦燥にかられる。

山奥育ちの彼女にとって、男の生臭さは未知の存在である。牝の本能が勝手に疼き、身

体が熱かった。激しい嫌悪感とおぞましきはあるのだが、それが逆に不思議な興奮を煽る。

お尻の谷間を弄っていた三白眼の大男が、左右の尻たぶを両側に割り開いてきた。

過敏な菊座に冷たい空気が触れる……。水輝はゾクツと胸を走った寒々しいなにかに、すらりとした下身を痙攣させた。周りを取り囲む男たちのうち手の空いた者は、示し合わせたように人差し指だけを伸ばしてくる。

「くふ——ッ……！」

一本ずつではあるが、ほぼ全員分のため大量となった指先が、尻肉の谷間に触れた。

茜のものを突き込まれて痛いくらい敏感になった部分に、不気味に硬い指が触れ、擦り回してくる。絶息にも似た悲鳴をあげた水輝は、いやいやするように首を横に振った。指たちは菊蕾の皺を数えるように、紅孔の周りを撫でる。

「いやああ……っ。さ、触らないでっ。お願い、そこだけは……！」

弱々しく鼻声で叫ぶ巫女だが、苛烈な性感帯は彼女の意思を離れ、ふわあつと口を開くような動きさえ見せた。

数本の指がその変化に気づき、孔をゆっくり抉じ開けると、括約筋をクリクリと揉み込む。

「んあ……っ。いやあああん……。だめっ、だめっ。だめええっ」

尻肉の感覚を増幅させるのが、たった一人で前をまさぐる老人の指だった。今日になっ

てからも触れられることはなく、これまで性感など感じたことのない性器が、じつくりとほぐされていく。

(こ、こんなことって……。ああやめてえ、お尻の穴……。も、もうやめてえ)

足袋にくるまれた足を引きつらせ、背伸びでもするように腰の位置を変えながら、巫女はよほど肉芯が疼くらしく、男の手を挟み込んだ太腿を擦り合わせた。

最低でも一度は生活を助け、ときに命も救ったことのある男たちから、理不尽な汚辱を受ける。その悔しさに下唇を噛んだ。しかしその強い思いさえも、尻肉をムニムニと弄られていると、切なげな吐息とともにもれ出てしまう。

憎々しげに夜巳を睨みつけると、楽しそうな彼女のニタニタ笑いが目に入った。

なんとか視線だけでも対抗しようとするが、播斗の村長に乳首をねじられると、たちまち眉が撓んでしまう。

「へへっ、あんな化け物を従えるだけあってさすがに淫乱だな。ケツの具合が最高だ」

もはや娘たちの救出よりも美少女を嬲るほうに意識が向いているらしい。三白眼の巨漢が、嘲笑混じりに紅色の菊華を押しした。

「あっ……」

その衝撃は子宮に鋭い痺れをもたらし、水輝は思わず甘い喘ぎをもらす。

男たちと水輝自身の汗、そして式神を排泄したときの名残の腸液が混じり合い、尻肉の

谷間が湿り気を帯びだした。

ぬちぬちと肛門がほぐされる……。無意識のうちに少女は、背を反らせて形のよいお尻を後方へと突き出していた。男たちから逃れようと左右に揺すられていた腰の動きも、いつしかねっとりとした情感深い動きに変わっている。

「おおっ。ケツを弄られたただけでこっちが濡れてきたぞ」

太腿の間に指を入れていた老人が、歓喜の声をあげた。言う通り紅色の袴は、じゅくりと重たげな湿りが移り始め色が濃くなってきた。

「うっ、うそっ。うそよ……。——ッあはあああつ」

これまでのこらえるような低音と違い、思わずといった感じの甲高い嬌声が響く。

袴のお尻のほうに開けられた穴が、ピィッと軽い音とともに裂き開かれた。脚間に指を入れていた老人はしゃがむと、少女の美園をいやらしい目で覗き込む。白い太腿がぴたりと閉じられているためよく見えないが、淡いかげりは完全に露になっていた。

そして黒々とした草むらを濡らす、甘露の存在も。

「うはあ。こらすげえや」

「まったく、娘どもと同じようにしようにも、悦ばせてしまっただけは意味がないのう」

「んああ……。ちがう、ちがうわ……。違う……」

男たちの嘲笑が聞こえ、処女はあまりの恥ずかしさから両脚をきつく閉じた。だがその

ことで逆に腿の内側に、甘い蜜汁が垂れる。

「ぐふふふふ……っ」

「くく……っ。くくくくっ」

男たちは、里が違うのだから今日会ったのが初めての者ばかりのはずなのだが。一種の共犯意識から強靱な連帯感を持ち始めていた。老人が少女の脚に顔を近づけると、尻肉を弄っていた指の動きが、一層激しいものになる。

そしてとうとう、男たちのうち誰か一人の指先が、第一間接まで肉孔の奥へと差し込まれた。

「く——ッッ！ ふうあつ、あつ……。あッ、あッ……！」

尻穴から下腹部に走る電流の嵐に、水輝は鋭く悲鳴をあげる。足をふんばって耐えるしかないが、そのために自然と腿を閉じる力は弱まり、股が無防備に開かれていった。

牡たちの眼前には、いまだ穢れを知らない乙女の秘所が露になる。

そこは肛門を抉られたショックからかわずかに口を開き、濃い桃色の内粘膜が見え隠れしていた。

そしてなにより恥ずかしいことに、無垢な贅肉はとろとろに濡れそぼり、汚れを知らない処女孔からは、放尿でもするように熱い果汁が溢れてくる。

「よい反応じゃ。陰陽師というのは皆こうも淫乱なのか……？」

にんまりと相好を崩した老人が、わずかに力の抜けてしまった脚の間に指を伸ばした。器用に二つの花卉を割り広げ、敏感な部分を刺激し始める。

尻肉を抉られることで異常なほど肢体が火照り、水輝のそこは絶えずぬるついた甘蜜を溢れさせている。加えて老人の細い指が内側のひだひだを、くすぐるように優しく揉みほぐすと、ときおり水滴としてぷくつと膨れるほど粘質を帯びた汁気まで混じらせるようになった。

「さあて……、村の女には好評じゃったわしの舌も、化け物を操るような女にはどのくらい通じるかのう」

自慢げに呟きながら老人は、舌を伸ばして、ゆっくりと少女のかげりに鼻を押しつけてきた。花園を搔く指はそのままに、最も敏感な真珠に生臭い唇が触れる。度重なる淫技に理性を揺すぶられクラクラしていた少女は、淡い官能に全身を震わせた。

これまで一度として性の刺激を受けたことのないそこは、膨らむには至らないもの、かすかな充血を見せている。悪女への復讐という名目で、執拗な淫鬼と成り果てている老人の舌が、包皮の上から覆いかぶさってきた。幼いゆえの弾力に満ちた突起部はぶにゅつと愛らしい感触を返す。

「くあ……。や、やめ……」

全身で最も弱い部分を捉えられた水輝は、不安に身をすくませた。首元に刃を向けられ

でも平然としていられるだろう、歴戦で鍛えられた神経も、乙女の園を襲う恐怖には敵わない。彼女は結局、一介の処女にすぎないのだ。

「ッ……ッッ！」

犬歯で鋭く下唇を噛む水輝。

ツルツルツルツと転がすように秘芽が弄ばれ、いまにもおかしな声が出てしまいそうで、こらえるための苦肉の策だった。

なんとか精神と肉体を切り離そうとする……。もはやその程度の抵抗しか思い浮かばなかった。術を失った彼女はただのか弱い乙女であり、陵辱者と化した無骨な男たちの前では、あまりにも無力な存在なのだ。

だがそうしていると、悔しさに胸が焼けてしまいそうだった。父を追う副産物だったとはいえ助けてやった村人たち。その恩もあってかよく神社を訪ねてくれ、寂しい二人暮らしの中、友達であり父であり祖父となってくれた彼らに、肉欲という最も浅ましい欲望を差し向けられようとは。

夜巳は相変わらず薄ら笑いを浮かべ、じつと水輝の表情を楽しんでいる。

ギリッと血が滲むほど唇を噛んで少女は殺気をはらんだ目を向けた。

……だが哀れなことに、その瞳はすぐにも弱々しいものに変わる。

「ッ……ッッ……」

きゅううつと痛いくらいの強きで、乳首を摘まれたのだった。痛みと、なにか不思議なそれ以外の感覚が胸肉から身体中に駆け巡る。それは尻肉を扱られる感覚と混じり合うと、ひどく妖しい衝撃となって子宮に響いた。

戸惑う肉の最も大切な部分には、相変わらず老人が吸いついている。いかにも女慣れした巧妙な舌遣いだった。村の女に好評だったというのも嘘ではないらしい。とかく外陰唇や内腿を中心として、粘膜そのものにはなかなか手を出さない。それだけに蜜液で蕩けた襞や膣の入り口部は、かすかな刺激にも反応してしまふほど敏感になってしまい、時々舌先がかすめると身震いするほどの官能に襲われるのだ。年寄り特有のねちっこさの前に、妹に罵られた乱暴な悦びしか知らない少女の肌は、たちまち蕩かされてしまふ。

「く……ふ……」

じわじわと花卉に熱い蜜が滲み、その量が増え始めた。

それらがただの生理反応でなく、膣肉がなにかを求めて分泌させていることは、子宮を疼かせた水輝自身が誰よりよく分かっている。

「ほうほう、膨らみ始めてきたのう。くくく、淫乱のわりにいい味じゃわい」

楽しそうな老人の言葉通り、敏感な芽は執拗に舐められたことでどんどんと充血していた。そればかりか牝華も淫らに咲き開き、あたりに甘酸っぱい匂いを放っている。

(ち、ちがう……。うううつ、恥ずかしい……)

羞恥と屈辱に震える巫女だが、肉の反応はある程度仕方ないといえた。

腰や背中、脇、首筋など、若い娘であれば誰しも敏感な部分には絶えず男たちの無骨な指がゆるゆると愛撫を降らせている。さらにはネチネチと乳房や乳頭を揉みほぐされながら、尻穴では括約筋や菊皺をコリコリと擦られているのだ。そんな状態で性感帯を舐められては、情感が蕩かされるのも無理はない。膣孔の入り口も、次第にひくひくと口を開くような痙攣を始めていた。

つうーつとやや粘質を帯びた蜜が、孔にあてがわれた老人の指を伝い床に落ちる。

いつしか少女の両脚は、そうした指や舌が容易く動くほど力が抜けてしまっていた。いやそれどころか軽く戦慄きながら、ときおり左右に開いていく腿を慌てて閉じなければならなくなる。

「う……、ん……ッ。んん……ッ」

潤いと弾力を湛えた絹肌は、いつしかしっとり艶めいた朱に染まり始めている。

ねちっこい愛撫で腰元が熱く疼いていた。自然と身体が揺すれ、甘く鼻を鳴らしてしまう。その妖しい音色とともに、美しい黒髪がさらさらと左右に揺れた。

美少女が身をくねらせる様はあまりに蠱惑的で、取り巻く男たちからため息がもれる。

特に誘惑されたのは、一心に尻肉をほじっていた巨漢の三白眼で、乱暴に顎を掴むと唇に吸いついた。

「くくくっ！　んぐ……っ、んんーっ！」

もはや娘たちの復讐とはいえない行為である。しかし悲しいことに、そうした優しい汚辱を受けると、処女の肉は助けを求めるように花開いてしまう。

大量の男たちに全身をまさぐられ、さんざん官能に蕩かされてきただけに、水輝はすぐにも気分を出し始めた。

初めのうちはおぞましさを訴えるよう鼻を鳴らしていたのだが、分厚く生臭い舌が抉じ入れられると、ついに唇を開いてしまう。そして荒く擦り合わせながらネバつく唾液を交換すると、無意識に美しい巫女の喉がコクリと動いた。

荒々しい接吻だった。官能的な面立ちをねっとり火照らせながら少女は、妖しい陶醉感が込み上げてきて、太腿をムチムチと擦り合わせる。

乳首を転がされ、秘芽をしゃぶられ、尻穴をほじくられ、生臭い唾液を流し込まれて、子宮の疼きはすでに我慢できないほど高まっていた。

「ぐふふ、おい皆の衆。苦しい思いをしたお嬢さんには悪いが、一度恥をかかせてみてはどうじゃ。してやればさすがに大人しくなるじゃろう」

少女の股座に顔を押しつけたまま、平静を装って提案する老人。だがその好色そうに血走った目つきを見れば、すでに雄の欲求が我慢できなくなっていることは明らかだ。

とはいえ、それは男たち全員が同じ意見だった。これだけの美少女が、熱く肌を火照ら

せつつ悶えているのである。まして自分たちの指と舌でここまで昂ぶらせたのだ。村の娘を攫った憎き相手に欲情しているとは口に出せないものの、共犯者たちは視線で互いに合図を送る。

まずは、破かれて最も大切なところさえ隠せずにいる袴を奪うつもりだ。帯を抜き取って引き下げると、はっとするほど純白な太腿が露になる。張り肉感が同居した、少女と女の中間にある女性だけが持つ脚線美だった。

後ろから見ている男たちの前には、中央の谷間こそ見えていたものの、むっちりした全体像が見えていなかった尻たぶが現れる。たまらずといった感じで伸ばされた沢山の手が、ツンと上を向いて見えるほど若々しい臀丘を揉みしだき始めた。柔肉がぐにぐにと形を変え、中央でかすかに口を開けた紅色の菊蕾を一層淫らに息づかせる。

なおも唇に吸いついてくる大男のものとは違う、細くてひどくザラついた指が、左右に開かされた窄まりに第二関節ほどまで挟み入れられた。

枯れ木のように硬い指先は茜の逸物より随分と小さいため、ほぐされた紅の淫孔は意外なほど容易く呑み込んでいく。

(うああ……っ。身体の中になにか、は、入ってくる……。入ってくるう……。っ)

汗と腸液とで少なからずぬかるんでいるため滑りもよく、会陰部をピリピリと引きつらせる少女は、塞がれた唇の端から熱い吐息をこぼした。

キュッキュッと、強く尻穴で侵入者を絞り上げていると、肉体の芯部に嫌悪によるものとは違い激しい昂ぶりを感ずる。まして柔らかな乳房はたぶたと好きに揉み回され、冠から顔を覗かせつつある恥粒を舌で転がされているのだ。

(いや……。感じちゃう……。も、もう……。そこ……。お)

肺に溜め込んだ空気を吐き出すため、男の唇を振りほどく。

だがその途端、男たちの手が全身から一斉に離れた。

「——ッッキヤッ！」

力の入らない腰が砕けてしまい、その場に倒れ込む水輝……。

床に寝転がされた少女は、その瞬間に生じた隙を狙い暴れようとしたが、三白眼の巨漢に片手で押さえつけられてしまった。体格の差から見れば当然のこととも言えるが、実戦すら経験のないだろう相手にいいように扱われる事実は、自分の無力を思い出させる。

とはいえまだ抵抗の意思が残っており、相手はあの化け物を使役する陰陽師だと改めて認識した男たちは、入念にもう一度手足を締め上げてきた。

犬のように四つん這いの格好を取らされ、水輝は泣きたいほどの惨めさに打ちひしがれながら、その場で小さくうづくまる。

男たちは両手両脚を押さえつけながら、一人一人がぼろきれにも似た着衣を乱して下半

身をまろびださせた。茜の股間についた偽者を除けば、本当の意味での『男性器』を間近で見るのが始めての少女は、思わず目を伏せる。周囲に、男性特有の青臭さが立ちこめた。ちらりとわずかに目を向けた程度だったが、男たちのそれは茜のものに比べひどく無骨で、雄そのものだった。王冠部が異様に膨れているもの、逆に先が細いもの。全体的に長いもの、短いもの、皮をかぶっているもの、鈴口から汁をもらしているもの……。ただ全員が共通して、腹につきそうなほど昂ぶらせていた。

いくつもの雄器官に周りを取り囲まれ、嫌悪とともに、高められた官能を中途半端に投げ出された乙女の肌は、牝の本能として勝手に発熱する。

さらに男たちは、手足を押さえる名目ながら、あわよくば少女の柔らかな肉に触れようとしてくる。桜色の肌が浮かび上がるほど薄い着衣越しに、背筋や腰元をゆるゆると愛撫され、水輝は紅潮した顔を横に振った。どこか後ろめたい感覚が走るもの、お尻を後方に突き出して股の間をすべて見られるはしたない体位では、水輝は恥ずかしそうに俯くことしかできないでいる。

茜に犯されたときも肉を狂わせた被虐感が、屈辱までもやましい歓びにすり替えようとしていた。ましていま前にしているのは本物の異性であるため、変質的な情欲は一層激しく燃え上がっている。自分の中に刻まれた底知れない淫蕩さが恨めしかった。

「ふへへへ……。いよいよだな」

絹のようにきめ細かく、そのくせ艶めいた光沢を放つ肌と、純白の高貴な着衣。二つが相まってこれらの社に仕える本物の巫女とすら比べものにならないほど神聖な雰囲気を持つ乙女が、犬這いの格好になっているのである。男たちは、見るだけでも恐れ多いような気がして、それぞれが悪そうに強がりだけの笑いを浮かべて顔を見合わせている。

袴が取り去られているため可愛いお尻が露になり、上衣もところどころ乱れ素肌が垣間見える……。あまりにも美しく、あまりにも反道徳的な光景だった。

だが、一人であればおののいていただろう凡百な男たちだが、集団効果によつていまや立派な淫鬼と化している。背徳は抑止剤になどならず、むしろ興奮を煽つてすらいるようだ。

「化け物使いのくせに、綺麗な肉壺じゃわい。さすがにケツでこれだけ悦ぶ淫乱だけあって、具合もよさそうじゃ……」

「お、俺あ……。ちよつとこええな。ほとで男のもんを溶かしちまう物の怪もいるって話だし……。け、ケツを掘つてやろうかな。こっちは指入れても大丈夫だったしよ」

「わしゃあもう我慢できん。上のほうを使わせてもらうぞ」

各々に好きなことを言いながら、あたりを囲む男たちの気配が動いた。不安になって顔を上げようとする水輝だが、ちょうど目の前の位置に男たちの露出した男根がくるため、慌てて目をそらす。

どうやら、『血卸』の風習があった播斗の里のように、性交を特別なものとして捉えている村民たちは、化け物を使役する少女と通じ合うのを怖がっているらしい。その他の男たちはすでに村の女の復讐という大義名分すら忘れていているようだった。もちろんまぐわいそのものを恐れる者たちも、欲望だけは満たす気である。

「う……」

少女は熱気の渦中に置かれ、狼狽するとともに怯えきっていた。

生まれたときから陰陽道の天才であり、また山奥育ちで異性を絶って育ってきたことが、いつもなら凛々しい戦士を弱気にしていた。常に万能であった呪力を失い、同じ人間とは思えないほど本能的で荒々しい、雄という未知に取り囲まれる。まして彼らのあからさまな情欲が狙うのは、処女である彼女そのものなのだから。

神社で夜巳と対峙していたときは、まだ『茜のため』という目的があり精神的には一種の余裕があった。だからこそ反撃の機会をうかがい、心を強く持つことができたのである。しかしいまは、たとえ男たちの隙が見えたとしても、いざ動こうとすると身体がすくんでしまっている。

もはや氣勢を削がれきった少女には、残忍な姫君や獣化した男たちに立ち向かうだけの勇気などほとんど残されていない。まして男たちの情欲に滾る視線にさらされ、渦巻く淫熱にさらされると、震える肌や赤らめた目元に、媚めいた艶すら浮かんでいた。

「——き——ッ……あぁッッ！」

突然髪を引っ張られて、水輝は痛みに悲鳴をあげながら上半身を起こそうとした。両手両脚に加えて背中や腰も押さえつけられているため、わずかに首を反らした程度だが、取り囲んで自分を見下ろす男たちと、巨大化した怒張が目に入る。

ちょうど目の前に立って少女の艶髪を引っ張っていたのは、昨日は仲良くおしゃべりをした、播斗の里の村長だった。好々爺そのものだった表情は欲望に歪み、劣情に染まっている。そしてその股間には他の男たちにもれず、茜のそれより幾分小さいが、先走り液でテカテカと濡れ異臭を放ちつつ黒光りするおぞましい逸物がそそり立っていた。

「……うう、そ、村長さん……」

「この淫売めが！ わしらをたばかりよって……。ひよつとして長老様が魔物じゃったというのも嘘か！ 無実の長老様を殺したんじゃない！」

あの長老の薄汚い悪事に困っていたのは確かなのに……。助けてもらった恩も忘れ手前勝手に怒鳴りつけた老人は、さらに乱暴に髪を引っ張って、少女の顔を自分の股座に押しつけた。

「しゃぶれ！ 少しでも函を立ておいたらすぐに殺してやるからな！」

言うが早いか、少女の朱唇にぐいっと張り詰めた龟头部を押しつける。

慌てて口を閉じようとする水輝だが、老人はそれより早く腰を突き出してきた。髪を引

できる限り固定された四肢を暴れさせ、抵抗する巫女だが、処女の本能から恐怖心で身が強張ってしまい、上手く身体を動かすことができなかつた。

荒い息を吐きながら貧弱な老体が覆いかぶさってくる。か細い泣き声をもらす乙女の花園に熱い滾りが触れた。秘裂は悲しくも彼女自身の官能によってその口を開いている。

（ああ、ッ、ッこんなのはイヤ……）

もともと一生男には縁のない人生を送るだろうと、理想的な破瓜など頭になかつた水輝だが、恩を仇で返されたうえに獣めいた老人のもので散らされると思うと、悔しくてたまらない。だがせいぜい腰を左右に振ることしかできない抵抗では、すでに入り口を捉えた男を振り払うことはできなかつた。蜜を弾くように軽く嬲りながら、メリリッと勢いをつけて秘唇の内側へとねじ込まれてくる。そしてとうとう、肉体が真つ二つに裂けんばかりの激痛に襲われることとなつた。

「ふく——ッ」

信じられないといった風に大きく眼を見開く水輝。

「い……ッ、ぎ……い……ッッ」

我を忘れるほどの激痛にさらされ、同じく生臭い肉塊で塞がれた唇の端から、悲鳴とおぼしきか細い声があがった。

だが声帯の振動はそのまま下腹部へとつながり、さらなる痛みを生む。襲肉の一枚一枚

が泣き声をあげるように震えた。秘孔は裂けるぎりぎりまで割り開かれているため、少女自身の蜜液と老人自身の唾液の混じった潤滑油は、ほとんど役に立たない。

「うおお……。こりやすごい、食いちぎられそうじゃ」

茜のものよりかはいくらか細く短い肉塊だが、処女の膣道はひどく狭いうえに強烈な収縮を示しており、侵入は非常に困難だった。

だが老人は年季の入った腰遣いで、ゆっくりと奥部まで押し込んでくる。そのためゆっくりとはあるが、結合は深まっていった。

……ツプ……ッ、ツププ……ツツ……。

まだ道をつけられていない園を覆う神秘の膜に、二度と縫合することのない亀裂が入る。

「うあ……。あが……。うああああ……。ツツ……」

王冠部に開かれた処女地は、ぬめつく鮮血をこぼし始めた。あつという間に日の光すら浴びたことのない初華を無残に散らされ、鈍く低い嗚咽がもれる。

あまりの衝撃にしばらくじっとしていた少女だが、やがて思い出したように腰を前へ前へと逃れさせようとした。だが老人の腕力自体は大したことがないながら、身体を少し動かすだけでも未踏の肉路がギリギリときしむ。結果として派手に逃げることもできず、激痛に耐えながら醜悪な老人との生まれ初めての交合を受け入れるしかなかった。

(しぬ……。う、死んじゃ……。あああッ)



「すごい血じゃのう……。それにこの手応え、ひよつとすると生娘なのか？」

まさか村娘たちを淫らな化け物に襲わせた憎き陰陽師が、貞操を守っているなどと思ひもしなかつたのだらう。怪訝そうに結合部を覗き込む老人。のみならず無残にも、滑りがよくなったと悦び乱暴に腰をねじ込んできた。

「~~~~~ツツツ!! うあああああッッ！」

思わず口に含まされた肉棒を吐き出して、絶叫してしまう。

「はははっ、あんな化け物を操ってやがるくせに、自分は処女ときたか！」

「ちようどいいいぜ、女たちが受けたのと同じ思いをさせてやるよ。もつともちよつと弄られてこんなに感じるような淫乱じゃ、そう長い間苦しむとも思えねえけどな！」

かつての恩人が激痛に悶えているというのに、自分勝手に罵りながら、男たちは一層調子に乗って哀れな処女を辱めだした。中にものが入ることさえ信じられないほど清楚な陰唇に、とうとう汚らしい男の性器が最後まで入り終える。

貧相な男の腰と少女の若々しい太腿が密着した。ひくっひくっとして愛らしく小鼻を喘がせる水輝。強靱な意志でなんとか弱音を吐かないようにと思っても、破瓜の痛みはそれをはるかに上回っていた。

いま口に突き込んだら、食いしばった歯に噛み切られそうだと思ったのだらう。村長は陰棒を自分の手でしごいて慰めながら、それならばとばかり、もう一度白い陰陽道衣に手

を突っ込んで乳房をムニムニと揉みなじりだした。だが先ほどなら少なからず甘い反応を返していた少女も、いまは全身を襲う痛みにも悶えるばかりで、触られていることに気づいているかさえ分らない。

膝からはほとんどの力が抜けていたが、男たちが腰を押さえつけているため、しなやかな腕や、老人と密着する美脚は伸ばされたままだ。可憐そのものの少女が破瓜された瞬間だというのに、あまりにも艶めいた光景だった。

「おおお……。こりやあたまらんわい」

老人は、灼熱した内側の肉の心地よさに、感激したように大きくため息をつく。

だがそれに対し不快げに顔をしかめたのは、水輝だけではなかった。

「だああつ。くそつ、じいさんさつさとしろよ！」

少女の唇を吸っていた巨漢の三白眼が、憎々しげに怒鳴り声をあげる。男たちの中でも若いほうなので、美しい肢体を前に我慢できなくなったのだらう。身体つきと同じに巨大な男根をしごき始めた。

開いたほうの手では少女の腰を持ち上げていたのだが、我慢できなくなったのか、桜色に染まった双臀に回すと、むにゅむにゅと揉み込みだす。その揉み応え、肌触りだけでも、若い性衝動を満たすには充分だった。それだけ巫女の身体はいたるところが清楚でかつ官能的にできているのである。

それを機に、男たちは彼同様猛然と自らを慰めだすと同時に、憎き陰陽師の肉体を愛しむようねちっこく触り、揉みさすりだした。

「う……。ううう……」

張り詰めた神経が逆撫でされる。特に鋭敏なおさねを硬い指で転がされるのが痛くてたまらなかつた。それに胸肉がいくつもの腕にたふたふと揺すぶられ、乳首を摘み上げられると、恥辱混じりのおぞましきまでもが心を満たす。

無理やり男を迎え入れさせられた女性自身も、いまにも裂けてしまいそうで、メリメリと骨のきしむような悲鳴をあげていた。

男たちに促された老人は、もう少し美少女との一体感に酔っていたかかったが、ゆっくりと腰を前後に動かさず。亀頭全体や雁首が柔らかな突起の感触でざらざらと擦られた。数の子天井というやつだろうか。老獺の長い人生でも味わったことのない名器である。

(いぎあ……。うああつ、こ、こすらないで……。い、いたくて……)

子宮付近への異物感と、狭孔を割り開かれた激痛。それに混じってヒリつく敏感な皮膚をなぞられる不快感が加わって、水輝はいまにも意識が飛びそうだった。

膝がピンと張って、杭でも打たれたように動かなくなった。男の挿抜が楽になり異物の動きが速まるが、その分決まった箇所には痛みを感じない。咄嗟に思いついた自衛手段である。

唇を噛み、頬を真っ赤にして苦悶に歪んだ少女の顔立ちは、ひどく被虐的な官能美をたたえていた。男の腰を打ちつけられる臀部のまるやかな曲線が波打ち、その動きに合わせ双乳も男たちに揉まれながらプルンプルンと揺れる。哀れなことに異性の手で汚されれば汚されるほど、山奥の巫女は婀娜めいた美しさを増していった。

「うぬっ。ふっ、ふおおっ。でっ、出るっ。出るぞっ」

被虐美に輝く天女に、最も近い位置で魅了された老人は、激痛にきしむ牝肉の狭穴に根元まで締めつけられ、一挙に限界を迎えた。

「あが……、あああ……」

自身の悲痛なうめきとともに、ぷちゅつと実に貧相な音が、胎内から少女の耳に届いた。破瓜を終えたばかりで過敏な膣肉は、射精に震える肉幹の形までも伝えてくるようだった。先端部から噴出して粘膜の上に覆いかぶさっていく、生臭い雄汁の感触も。激痛に混じる、あまりに汚らわしい粘液の感触に、水輝は混濁した意識が薄らいでいくのを感じる。

（あ……、あかちゃん……が……）

膣道の生温かい液体は、行為の終わりを意味しているのだが、処女を奪われたうえに妊娠させられたかもしれないことを考えると、深い絶望が込み上げていた。くらくらする自失寸前の頭では、子宮の隅々まで染み込む液体の熱が感じ取れる気さえした。

だがそんな悲しみに暮れる少女にも、安らぎが告げられることはない。

弛緩した身体を支えていた男たちの位置が変わった。後ろを覗き込むと、先ほど怒鳴っていた三白眼がその大きな手で腰を抱えている。

男のものは、全員の中で唯一茜のそれを超えるほど巨大なものだ。おそらく破瓜させた老人のそれより三倍は太いだろう。そんなものを入れられたら、今度こそ性器全体がズタズタになってしまうかもしれない。恐怖して息を呑む水輝。

「や、やめて……。それだけは……」

まさに年頃の娘そのものといった感じで震えた声を出した。

だが幸いというべきか、男の狙いは違っていた。村娘の復讐を目的としているためか迷うことなく、少し上の、濃紅に熟れた肛花に触れたのだ。

「ふえあ……っ」

裏返った少女の声とともに、小さな蕾は驚いたようにピクンと震え、それからふわあつと軽く力を緩めた。

尻肉が自ら迎え入れるかのような反応を示したことで、水輝は慌てて下腹部に力をこめる。だがキュッと窄まったそこは無理しているのが一目瞭然で、しかも男が体重をかけてくると、やすやすと力は抜けていった。

メリメリと茜のものでさえ限界だった蕾に、それ以上の容積がねじ込まれてきた。

「はあんっ……。ひぎあ……。つ、あああああ……っっ」

苦しみとも悦びともつかぬ甲高い悲鳴をあげる少女。

皺が裂ける寸前まで伸びきった孔周りの皮膚から背筋に、鋭い痛みが駆け抜けた。おそろしく太く硬いうえに、雁首が異常なほど張っているため、強張った括約筋では裂けてしまいそうだ。やつのことでそこを越えると、今度は腸壁が餌食になる。

(あああああつ。太いのが……、太いのが入ってくるう……っ)

だが排泄口をいっばいに押し広げられると、顔を真っ赤にして叫ぶ巫女の表情からは、辛さや嫌悪の色が急速に薄れていった。いつもは凜々しい眉根を緩め、切なげな表情で瞳を熱く潤ませるばかりだ。

処女を奪われた異常な熱気が、子宮全体に渦巻き、性感帯をほじくられることにかつてないほどの興奮を与えていた。直腸は勝手に蠕動しながら男のものを締めつけ、より深くへ呑みこもうとするように蠢く。

「も、もう……。やつ、入れないで！ くるっちやう……っ」

口ではそう言いつつも、形の良い左右の尻肉は上下に揺れ、全身がよじれて、より男が入り込みやすい形へと導いていた。足袋に包まれた足は背伸びでもするように伸ばされ、腰を男へ押しつけるように突き出してしまふ。腸壁がミチミチと音を立てるほど筒型に拡張され、本来なら定期的に収縮するはずの括約筋を押し広げたままにされて、少女は腹部に込み上げる被虐の熱に陶醉しきっていた。

羞恥や怖気の念は完全になくなったわけではないのだが、茜とるときよりはるかに大きい拡張感が、そのまま快感へと変化していく。

腹部を内側から圧迫する息が詰まるほどの感覚は、先ほどの排泄感を髣髴とさせる。不意に男性を遅しく思う気持ちに胸を捉え、水輝の身体にはさらに苛烈な愉悦が芽生え、戸惑わされた。

「へへへっ。まさかこつちも処女じゃねえだろうな。ケツだけでこうも感じる女なんて見たことねえぜ」

太腿をしきりにもじもじさせて、湧き起こる官能をこらえようとする巫女の反応を、男たちはみんなして嘲笑った。しかし少女の中では確かに、言い訳のしようもないほど熱い情感が肉芯を疼かせており、屈辱感よりも見知った彼らにはしたない姿を見られる恥ずかしさのほうが強い。

加えて快樂とともに、戸惑うほどの昂奮が全身を満たしていた。男の動きは老人のそれと違い、動物的なほど直線的で荒々しいものだ。そしてそれに合わせるように少女自身も、床につけた手足を伸ばし、頭よりもお尻の位置を高くした犬這いで、くねくねと腰を躍らせだす。

「ああ……。いつ、イイ……。く、狂うう……。狂っちゃううう……」

いったい自分の身体はどうなってしまったのだろうか。心の中でかすかにそう思いなが

ら、水輝は欲望に抗えず形のいい尻肉を左右に振りたくった。

「へへへっ。ああいい気持ちだ。あんたの尻は最高だよ」

巨漢は満足げに笑いながら、腰に回した手を移動させ、股座に触れてくる。

「あっ、だめ——」

弱々しい否定の言葉よりも先に、とろつく秘苑に二本指の無作法な侵入者がめり込んだ。大男の中指と人差し指は、彼女の処女を奪ったそれと同程度の太さだったが、髪を振り乱して悶える少女の顔に苦痛の色はない。むしろぐにぐにと弄くられだすと、必死になって閉じている唇から、甘ったるい音色が響いてきた。

「そ、そんなに強くしちゃ……。んあッ！ も、もう……。もう……。っ」

肉壺の充血した媚肉が指に絡みつくとともに、男根を締め上げていた直腸の粘膜が、より深くへと太い侵入者を迎え入れるよう蠕動し始める。

がくつと肩から力が抜けて、少女は上半身をその場に倒れ伏した。だが腰は男と交合したままのためお尻だけが高く持ち上げられたままだ。巫服に包まれた乳房が床で潰れる。

背を弓なりに仰け反らせ、卑猥な格好で這いつくばった様は、まさに発情した牝猫さながらだった。

排泄器官を掘り抉られて快楽に身悶えるなど動物以下であり、なんとかしなければと思うのだが、どうしても肉欲の衝動を抑えることができない。

男の陰毛をお尻に感じるほど腰を突き出して、ふりふりと淫猥な舞を続ける水輝。

「ほれっ、そろそろこっちじゃ！ さっさとわしも満足させんか！」

髪を掴んで無理やり上半身を引き起こした播斗の村長が、再度口元に陰茎を突きつけた。括約筋を挟み開けられ充血した菊座を擦られることが、たまらない快美感を生むとともに、被虐感をも生んだ。妖しい情欲に囚われた少女は、はあはあと艶っぽく喘ぎながら、大人しく口を開く。

ぬるりとひどい悪臭の塊が口腔にもぐり込んできた。

あやうく咳き込みそうになる水輝だが、不思議な興奮に苛まれ、うっとり目を閉じる。自由の足りない首をねじりながら、自然と太幹に舌を絡め、亀頭の笠部をじゅぶじゅぶとしごいた。しよっぱい先走り汁が舌を汚すと、喉を鳴らして飲み込む。

まるでずつと排泄が続いているような奇妙な心地よさと、ゾクゾクするほど悩ましい喜びがある。尻穴が長時間緩んでいることで、理性までも流れ落ちていった。

少女はか細い鼻息をあげながらも、たまらないといった感じで卑猥に腰をくねらせた。

「——うっ……ッ！」

いまにも裂けそうなほど口径を広げられた肛門は、限界まで張った皺をうねらせて男のものを逃がすまいと食いついている。その強烈な締めつけと、少女の淫らな腰遣い。そしてなおも妖しく蠕動を続け雁首を擦り上げてくる直腸粘膜の感触に耐えきれなくなったの

だろう。短くうめいた大男の巨大な逸物が、さらに膨れ上がった。

じゅぷる……。ビュクッ！ ビュルルルッ！ ——ビュルル……。ッ！

「ふあああああッ!!」

驚異的な勢いで腸壁を叩く精液の感覚に、水輝は全身を激しく痙攣させる。

(こ、こんなのって……。で、でも、お尻が……。お尻が熱いいいっ)

眼を大きく開いた少女は、一瞬息も止まるほどの、形容し難い高揚感に包まれた。流れ込む精液の触れた部分からねっとりとした充足感が広がっていく。見開かれた瞳からは急速に生気が失われていき、やがてとろんと媚めいた光だけが残った。

だが次の瞬間、さらなる衝撃が彼女を襲う。

男の巨体が離れたかと思うと、次の淫根が股座に押しつけられたのだ。口いっぱい老人のものを頬張らされ後ろも向けられない水輝では、それが誰かも分からない。だが破瓜のときよりいくらか大きな肉塊が、肛悦に潤んだ本来の性交口に押しあてられた。

「——ひ……。いっ」

処女を奪われたときの恐怖から、身を震わせる少女。だが問答無用で入り込んできた硬肉からは、彼女の予想とはまったく違った感覚がもたらされる。

灼熱の汚辱感と、それとは違う恍惚感に、少女は悲鳴をあげながら愛らしい顔立ちを右へ左へとよじらせた。つやつやの長く美しい黒髪が切なげに揺れる。

(ど、どうして……。うそ……。うそ……。っっ！)

痛みとはまるで違う疼きの嵐に、水輝は思わず、口腔を犯す老人の腰にすがりついた。膝が折れ、その場に倒れ込みそうになるが、男たちに支えられているため交合が緩むことはない。

「ンあ……。っ。んふ……。、ふううんっ」

単純に興奮を煽られる直腸結合と違い、膣粘膜を擦られていると、全身がばらばらになりそうな快楽が湧き起こってくるのだ。

処女を喪失してからさほど時間も経っていないのに、水輝ははっきりそれと分かるほど妖しいよがり声を放ち始めた。子宮への圧迫感や秘唇のヒリつきは、ジンジンした熱の塊に変わり、肉芯を淫らに火照らせる。

着衣を破れるほどぞんざいにはだけられ、露になった乳房がぐにぐにと弄ばれる。全身のいたるところが無骨な手のひらで撫で回され、敏感な尻肉にも何本かの指が回されていた。一度増殖を始めた淫熱はあつという間に全身を焦がす。いつしか少女は、唇を割って出し入れされる肉幹に、甘く屈服の吐息をもらしながら吸いついていた。

全身を満たす情欲が待ちわびていた瞬間が訪れる。

蜜壺が容量を超える異物でギチギチに割り開かれているのは変わりなかった。しかし冠を弾いて鋭敏な姿を現した秘芽や尿道口をくすぐられていると、濃密な火照りが陰部全

と呼んでさしつかえない水輝の膣粘膜とまぐわっていた男が限界を迎えた。口元を歪めながら、膨れ上がった逸物をまだ破瓜の血を残した部分へとこれ以上ないほど突き込む。

わずかに震えたかと思うと、先ほどの老人とは比較にならない量の白濁液が、少女の膣内を汚した。細かい腭肉の隅々や、子宮内のいたるところに、熱い塊が染み込んでいく。

ドクドク……ッ、ビクッ……、ドクンッ……。

「んくうう……っ。うっ、うむ……。あううううんっ」

誰のものとも知れない子種の雨を、再び膣口いっぱいを受け、水輝はえも言われぬ興奮に身を委ねていた。

今度こそ子供ができるかもしれない。先ほどの貧弱な射精と違い、いまは量も深さもはつきりと感じられるほど、子宮を満たすほどだと感じる。

(それでもいい……。気持ちいいもの……)

知らず知らず口腔を締めつけ、蹂躪する男のものに、淡い朱色の舌先を絡みつかせていった。熱い昂ぶりを感じていると、牝の器官が甘美に疼く。艶めいた歓待を受け、老人が歳のわりにはかなりの量の射精を開始した。

吐き出す程度のことはできたが……。水輝は知らず知らずのうちに、コクッコクッと喉を鳴らし飲み干していく……。

前と後ろから支えていた男たちが射精を済ませたため離れると、少女はぐったりとしてその場に倒れ伏した。処女喪失から合わせて二人の暴漢に狂わされた腰には力が入らず、横座りになったままもう立ち上がることもできない。口腔も犯された反動からか、涎に濡れた唇を半開きにしたままで、ふうふうと熱情の混じった吐息をこぼしていた。

巫女の着衣は裾が長く、座り込んだ姿勢だと腿の半ばまでを隠している。しかし袴や帯はもちろん、たすきに用いた飾り紐や前掛け、髪留めまでも奪われたいまでは、純白の薄布は肌を隠すというより、被虐美を増すための装飾にすぎなかった。左手を覆う無粋な籠手だけが、若き戦巫女の凛々しさをとどめている。

「へっ、さっきまで処女だったくせにもう色気だしてやがるぜ」

「このままいけばあの化け物が大人しくなるのもすぐだ。おらっ、休ませんぞ！」
「く……う……」

どうしようもない官能の波に流され意識を朦朧とさせている少女は、周りから聞こえる嘲笑に耳を塞ぐこともできなかった。汗で黒髪の貼りついた頬を紅に染め、ふるふると首を横に振るばかりだ。

それを見て邪心に口元を歪めたのは、播斗の里の村長である。一度射精を終えたことで冷静になり、この村娘たちを苦しめる悪女への陰湿な嫌がらせを思いついたらしい。卑猥な笑みを浮かべながら、股間で猛る逸物をまさぐり陵辱の順番を待つ男たちに手当たり次

第声をかけていった。老人の案を聞かされた者には、例外なくいやらしい笑みが伝染していく。

「やれやれ、淫乱女が。俺らはお前の楽しみに付き合ってるんじゃないぜ？」

嘲弄を続けながら、眉間に皺の浮いた、髪の毛一本もない海坊主のような中年が、少女の投げ出された細い足首を掴んだ。悲鳴をあげる間もなくものすごい力で引っ張られ、巫服をかぶせた華奢な裸身はその場で半回転して、仰向けに寝かされる。男はそのまま身体の位置をずらして、横たわった少女の腹部にのしかかった。

(ち、ちがう……。わたしは淫乱なんかじゃ……)

心の中で自分に言い聞かせようとする水輝だが、処女を奪われたばかりで喜悦に流されたのは、自身が誰よりよく分かっている。

「へっ、変態は処女でもいい乳してやがるな」

いかにも下品な笑い声を室内に響かせつつ、海坊主が胸丘を掴んだ。ビクッと身体を緊張させて、巫女は視線を下に向ける。

桃色の先端部を親指で弄くりつつ、男は粘液まみれの肉幹に可憐な乳房を押しつけ、ぐにぐにと擦りつけた。柔らかさの中に、どこか少女らしく芯の固さが残る絶妙な感触である。乳肉を揉みつつ乳首に振動を与えると、ンッンッところえた吐息が聞こえた。

(ど……、どうしよう……。ヘンだよ……。ヘンになっちゃう)

対する水輝は、これまでと違うじれったい感覚に、このうえなく追い詰められていた。悩ましい切れ長の瞳にはねっとり膜がかかり、乳首を強く摘まれるたび眉根をひそめるが、それが緩むと甘い潤みを帯びる。

敏感な乳房からもたらされる快感は、粘膜を擦られた直後では逆にもどかしい。いつしか熱く艶めいた視線は、乳肉の中央で暴れる逞しい雄器からそらせなくなっていた。

「お、おい。そろそろ俺たちも……」

「そうじゃな。ククク、だが下は使ってやるでないぞ。たっぷり焦らしてやれ」

村娘にはない神秘性、高貴さ、そして美しさを持つ巫服の少女が、快楽に追い込まれていく様に魅了され男たちは、ぼろの着衣から剛直を取り出すと、少女の顔へと突きつける。「ひ……っ。いつ、いや！ こないで……っ」

男たちが近づいてくるのを見て悲鳴をあげる少女だが、語尾が消え入るように小さくなっていったのは、赤黒い雄肉が周りを取り囲むのを見たからだだった。ゾワゾワッと鳥肌が立つような感覚に襲われる。しかしそれが嫌悪でないことは、太腿の奥からぬるりと新たな熱蜜が秘苑を濡らしたことから分かった。

膣肉がキュンキュンと痛いほどの切なさを訴え、開閉を繰り返す。つい先ほどまで処女だった未熟な性感が、男性を求めているのは一目瞭然だった。それを隠す苦肉の策として水輝は、太腿を閉じることしかできない。

「おらおら、どうしたよ。これが欲しいんだろ？ 色っぽい顔しやがって」

男たちのうち二人が、膝をついて勃起を左右の手に押しつけてきた。

（ああ……。あ、あつい……。こんなに熱いなんて……）

人体の一部とは思えないほど熱く硬く猛っている逸物が指先に感じられる。

無意識のうちに白魚のような指が、醜悪な滾りに絡みついていった。こんなに遅しく、熱くてゴツゴツしたものが、自分の身体の中に入ったことに改めて驚かされる。それを思うと子宮が一層切なく火照って、ドキドキと胸が高鳴った。

少女の淫らな反応を受け、柔らかくぷにぷにした手のひらでしごかれる男は、夢見心地にため息をつく。だが左手を使う男の息はもっと切迫していた。しなやかな指に雁首や鈴口を触れられつつ、なめし革の無粋な箠手にも竿部を擦られるのだ。これまで我慢していただけ強烈な快感にかられ、あやうく射精してしまいそうになる。

他の男たちも、もう我慢できないとばかり少女の身体を使って性欲を満たした。絹のような触り心地の黒髪を巻きつけしごきだす者。足の指の間を使う者。愛らしい頬に龟头を押しつける者。とびきりの美少女が相手なだけに、蕩けた表情を見ているだけでも男としての欲求は存分に満たされる。

（やだ……。こ、こんなに沢山……。それに……）

ビクンビクンと射精に向かって起きる律動が感じられるたび、水輝の中では女の部分が

騒いで仕方なかった。男たちの興奮や快感が伝わってくるようで、つい両手にあてがわれた昂ぶりを愛しげに揉みしごいてしまう。股の奥で刺激を渴望する淫花と菊座が収縮した。「く……。ああああ……。も、もうだめっ、もうだめえ……。っ」

播斗の老人が提案したらしい。少女のその部分には誰も触れようとしなない。あまりのもどかしさに、畳の後頭部をつけ背を反らせて、苦しげに嗚咽をもらす水輝。その動作は焦燥や嫌悪というより、胸肉を男の欲望に押しつけているようにも見えた。

閉じようとする力が弱まり、太腿の奥部が露になる。清楚なそこは充血しきってひし形に口を開き、二度の射精や破瓜の血がほとんど見られないほどに滾々と蜜汁を垂れ流していた。男たちの野獣めいた視線が集中すると、内側の贅肉がざわざわと誘うように蠢く。「へへへっ。入れてもいねえのに盛り上がりやがって、この淫売女が！」

切羽詰まって顔をタコのように真っ赤にしながら、海坊主が腰をせり出して言った。そうして汚い言葉を投げかけられると、またしてもゾクゾクと高揚感が身を包む。

沢山の男たちに囲まれて陵辱される。そのことが、凜々しい戦士の中に眠っていた被虐症という性癖に火をつけたのだった。侮蔑的な言葉で罵りを受けるたび、滾る性欲を押しつけられるたび、恍惚となるほど甘い感情が胸を満たす。まして子宮が刺激を求め欲求不満になっているいまでは、精神の昂ぶりはそのまま猛烈な疼きへと変化した。

「なにうっとりしてやがる！ オラ、顔に種汁ぶっかけて欲しいですって言うてみる！」

なおも男が荒々しく怒鳴り立てる。

(や、やだやだ……。わ、わたし……。わたし……)

どんなにこらえようとしても、一旦目覚めた被虐という名の淫性は、少女の理性を容易く裏切った。

「ほ、ほしい……。です……。顔に……。っ、顔に子種をかけてくださあいつ！」

半開きになった唇から、最初搾り出すように、あとにいくにつれて叫ぶような口調で、自分自身でも本心なのか違うのか分からない言葉が出てしまう。

「ふく……。っ。よ、よおしっ。出るぞっ。オラッ！ たっぷり出してやる！」

紅葉あわせの快楽に加え、少女を征服した手応えを感じたのだろう。大声でうめきながら海坊主が達した。

「……。あ……。っ、く、くる……。っ！」

胸の谷間に感じる律動に合わせ、少女の種汁まみれになった身体がわずかに仰け反った。とろんと悩ましいほど潤んだ瞳を向けたまま、巫女の喉がコクリと動く。まるで、その瞬間を待ちわびるように。

——じゅぷるるるっ！ じゅびゆるっ！ びゅびゅっ！

「~~~~~ふあああっつ……。っっっ！」

硬いほどに濃厚で、むせるほど生臭い体液が、鼻先で潰れて顔中にぶちまけられていく。



ぐんにやりと蕩けるように赤みのさした肌の甘美さに、男たち全員の吐精が連鎖を起こした。雁首にサラサラと絹糸のような黒髪を巻きつけていた男たちが。続いて頬や足の指などに押しつけていただけの男たちが果て、両手で掴んだ昂ぶりにも、雄々しい脈動が訪れた。あつという間に乱れたとはいえ神聖な巫服に身を包んだ少女の肢体は、ねばつく汚液にまみれていく。

(あああすごいっ。すごいいいっ！)

逞しい男性器から一斉に放たれる流動を感じて、水輝は自身も絶頂に似た愉悅を覚えていた。両手に握った二つの棍棒が、ビクンビクンと射精後の引きつけを起こしているのを感じると指先に力がこもり、最後の一滴まで搾り出すようしごいてしまう。

鈴口から糸を引くほど粘性の高い白濁が、畳の上で寝そべる巫女に降り注いだ。

白磁のように色艶のよい肌も、もはや申し訳程度に背中と肘から先を覆うだけの神聖着も、いたるところに汚らわしいぬめりが付着し、染み込んでいく。

全員が一度は満足した計算になるが……。それでも少女に休息のときは与えられなかった。男たちが離れ、残されてハアハアと狂おしげに深く息をつく彼女の股座に、枯れ木のような指が触れてきたのである。

「ふあああッッ！」

指先は、先ほど男たち全員に指示を出した播斗の村長のものだった。双花が弱点である

ことを的確に見抜き、人差し指を秘唇の中に、親指の腹を菊蕾にあてがう。

「ふへへへ。そろそろ我慢できなくなってきたじゃろう。どうじゃ変態女。どうしてもと言うならこやつが、お前を死ぬほど悦ばせてくれるぞ？」

迫ってきたのは老人だけでなく、少女の肛門を味わった三白眼の巨漢もだった。巨大な手を伸ばして、精液まみれの着衣に裾から手を差し込んで、ほっそりとした身体つきとは裏腹の量感を持つ乳房を鷲掴みにする。そうして中身のよく詰まった若い弾力を楽しみながら、すでに赤黒く熱を取り戻した逸物を少女の眼前に向けた。

(あああ……。すごい……。男の人の……。つ)

一度は排泄器官に呑み込んだとは思えないほど巨大な肉竿である。見ているだけでドクンドクンと心臓が破裂しそうなほど高鳴った。

老人はそんな少女の表情を的確に読み取り、ちゅぷちゅぷと菊座の浅い部分や会陰部をまさぐりながら、ずぶりと蜜壺を細い指で抉る。

「ふああ……。つ、ン……。つ。あーんんんっ」

「くくくつ、ツブツブが嬉しそうに絡みついておる。見事な数の子天井じゃのう。ほれほれどうした。もっと大きいのが欲しいんじゃろう」

中に入り込んだ人差し指が、鉤爪状に折り曲げられ粘膜を引っかく。

待ち焦がれた感覚が中途半端に与えられたことで、少女の中に燻っていた官能が、被虐

の性癖に完全に火をつけた。ゾクゾクと込み上げてきた高揚感。いや隷従心とも呼んでいい変質的な思いにかられ、むっちりとした美脚がひとりでに左右へと開いていく。

「くっ、ください……っ。うずうずして我慢できないんですっ。犯してくださいっ！」

悲鳴にも近い声音で搾り出すように言った。

そうして口にしてしまうと、これまで抑えていた自身の願望が初めて分かった気がした。えも言われぬ興奮に包まれ水輝は、胸肉を揉まれ、股座に手を入れられた肢体を恍惚にうねらせる。

巨漢は老人と顔を見合わせると、満足げに笑いながら愛らしい乳房から手を離し、その場に腰を下ろした。

「素直になったご褒美だ。ハメてやるよ。あんたの望むようにな」

「ふぁは……、はい……」

自分で跨がれ、ということらしい。はしたない行為を命じられても、もはや少女は表面化してしまった欲求に逆らえなかった。自分がしていることの淫蕩さに顔を赤く染めて恥じらいながらも、巨漢の腹上に脚を伸ばし、股間部を跨ぐ格好になる。

少し腰を下ろすと、ドクドクと脈打つ熱棒が、肌で一番敏感な部位に触れた。

なんら見返りを求めず、ただ困っていたから助けた。そんな男たちに肉の一番深いところまで汚される屈辱感、被虐感に混じって深い喜びへと変化する。

(あ……。す、すごい熱い……)

恋に落ちた乙女のように頬を染め、しかし愉悅の予感に淫ら極まる微笑を浮かべた巫女は、先ほどは排泄器官で感じた逞しさへと身を投じていく。

「うあ——っ。あ……。っ、あっ、あっ、あっ、あっ——ッ！」

これまでの二人とは比べものにならない雄々しい逸物を、女体の中心部がヒクヒクと充血した贅肉を震わせながら呑み込んでいった。

秘唇から子宮に至る膣道のすべてに、凄まじいまでの圧迫感を感じ、光沢のある艶髪をばらはらと乱れさせる少女。

「すっ、すごい……。っ。壊れちゃ……。あ……。っ。すごいのおおっ」

乱暴な感覚が肉の内側でピクンピクンと拍動する感覚に、水輝はうっとり目目を閉じて被虐の倒錯を噛み締めた。そうするうちにもはしたないほど開かれた太腿の間では、ずるずると太い凶器が結合を深めていく。

段階をつけて慣らされた少女の粘膜は、長大な剛根を相手に四苦八苦しながらも、とうとう根元まで受け入れた。

(ああ……。こんなに太いのが入るなんて……)

つい先ほどまで未通だったのに。どんどん淫らに変化していく自分の身体に戸惑う少女だが、贅が多めで人一倍敏感な粘膜は、次第に大ききになじんでくる。

ただ交わっているだけでも自失してしまいそうだったが、被虐の悦びに囚われた巫女の身体は、勝手に次なる快美を求めて燃え上がりだした。

若々しくピチピチと張りのある太腿を男の太い横腹に密着させ、腰を少しずつ前後にうねらせだす。

「あ、ああ……」

か細く艶めいた声が、半開きになった唇からこぼれる。すりすりとした熱い内粘膜を男の逞しい滾りに擦りつけていると、たまらない愉悦が生じた。

それに加えて、膣肉の多めなひだひだが甘い蜜に覆われて心地よく亀頭や雁首を包む快感に男がうめくと、被虐の隷従心に侵された少女の精神までも熱く満たされる。

「おお……。こりやすげえや。こんな名器は味わったことがねえぜ」

「う、嬉しいです……。水輝も、水輝も気持ちいいですう……。っ」

はだけた胸元でつり鐘型の乳房が踊り、ばらばらに乱れた黒髪から甘い芳香が立ちのぼる。興奮を煽られた男は、主導権を握ろうと身体を倒してその場に仰向けで寝そべった。

「ふあひや……。っ。あああっ！ ふっ、ふかいっ！」

対面座位から騎乗位へと変わったことで、結合が一層深まる。子宮口が太い亀頭にゴリゴリと押され、水輝は背を仰け反らせて身悶えた。男はさらに少女の官能を追い込むため、ズンズンと下から腰を跳ねさせるようにして突き上げてくる。

「あひあああつ！ しっ、しぬっ。死んじやううっ！ すごいのっ、すごいのおっ！」
あられもなくよがり泣いて少女は、精液にまみれた白の上衣をはためかせ、全身を悶えさせた。

そんな濡れた白衣がびったりと貼りつき、たぶったぶつと上下に大きく波打つ両の乳房を、後ろから伸びてきた二本の手が掴む。

「ぐふふっ、わしも入れてもらおうかのう。こちらも物欲しげにヒクついておるわい」

卑猥極まる物言いでは後ろから抱きすくめ、胸丘を揉みつつ揺れる尻肉の狭間に熱い逸物を押しつけてきたのは、事を見守っていた播斗の村長だった。

一度少女の口腔に射精したはずだが、老いを感じさせない逞しさを取り戻した硬先が、紅色の菊に押しつけられる。

(あ……。んああっ、お、お尻に……)

可憐な性感帯に熱気を感じ、肩口から老人のほうへ振り向く水輝。その瞳はわずかに不安に曇っているが、強く押しあてられると括約筋が開き、それだけで表情に微笑めいたものさえ浮かぶ。

だが、あてがわれただけの亀頭部を、ムニムニと卑猥に蠕動しながら吞み込もうとする肛門の反応を受け、老人はあえて挿入を躊躇った。

「フン、変態め、ケツの穴にまで入れて欲しいのか。ならきちんと口で言わんか」

切なげに眉をひそめている少女の耳元に、陰湿な言葉を囁きかける。

「あ、あうう……。あ、あの……。ふぁんっ！」

とことん美少女を嬲り抜くつもりらしく、老人は自分ではしたないおねだりを命じたにもかかわらず、ザラつく着衣の繊維を乳首に擦りつけて、少女が口をきくのを阻害する。だがそうしていたぶられるごとに、水輝はゾクッゾクッと狂おしい高揚感に包まれるのだった。

「あは……。あぁんっ。み、水輝の……。お……。ひうっ、おっ、おしりっ！ おしりにいっ。いれてくらはいいっ。……。ふぁはっ、お、お尻に欲しいのおおっ！」

膣道が限界まで割り開かれていると、乳首を擦られる衝撃すら何十倍にも膨れ上がり子宮の火照りへと変わるようだった。あまりの喜悦に呂律ろれつの回らなくなった少女は、恥も外聞もなくはしたない言葉を叫んでしまう。

「くくくっ。淫乱女め！ そんなに魔羅が好きなのか！」

「ふえあ……。っ、はいいいっ！ すきっ、すきいっ！ らい好きれふうっ！ は、はやく淫乱な水輝の穴にっ、ぶっとい魔羅をいれてくらはあいっ！」

汚れきった巫服に身を包んだ少女は、なんとか膣道と男根とを最大まで密着させたまま、腰を後ろへと突き出そうとする。その下部で陵辱されることを求め、ヒクついて雄を迎え入れようとする菊孔に、とうとう凶暴な龟头がめり込んだ。

「あああんっ！ くひああああ〜〜〜〜っっ！」

待ちわびた挿入を受け、巫女は全身を仰け反らす。

淫靡な双華はより深くへと迎え入れようとぐんにやり開き、しかし啞え込んだ異物を放すまいと、ときおりキュンキュン締まってみせた。

「ふあああああ……。は、入つれくるう。おひり……。お尻とけりやうう……。！」

直腸部を割り開かれる感覚は、膣道からの圧迫感を伴うと信じられないほど苛烈な悦びへと変化した。

さらに男二人は、揃って腰を上下に動かし始める。

過敏な少女にとって、双穴を矢尻で貫かれる快楽は言語を絶していた。膣粘膜と直腸壁を硬い雁首にゴリゴリと擦られるたび、口からは悲鳴に近い喜悅の声が迸る。まして二人が同時に、双方から挟まれた肉を抉ると、意識が跳んでしまいそうだった。

「へへっ、随分盛り上がってンじゃねえか」

「淫乱女がようやく素直になったようじゃのう。どれ、わしらからも褒美をやるか」

執拗に子宮を小突かれ、菊座をほじくられて、清楚な着衣に包まれた身体を蕩けそうなほどくねらせる水輝の妖美さに、他の男たちも猛りを取り戻し、集まってくる。

全員が淫気にあてられ、すぐにも次を発射したそうに股間の逸物をまさぐっていた。処女を奪った老人は、男に跨った少女の頬に破瓜血の残った肉竿を押しつけていく。

「この変態の痴女が。そんなに犯されて感じるのかっ！」

「はっ、はいっ……。気持ちいいれふ……。っ。気持ちいいれふうっ！ 子壺が壊れりやい
そうで……。お尻がミチミチいっててえっ！ もっとして……。もっろいじめてくらはい
いっ！」

呂律が回らない声で喘ぎながら、水輝は見下ろしてくる老人に媚びるような上目遣いを
送った。首が縦に振られたのを見ると、まるでそうするのが自分の仕事であるかのように、
汚らわしい性器を頬張り、舌を絡めていく。

跨った男たちに突き上げられ、宙を泳ぐばかりだった両手も伸ばすと、近くにいた男た
ちのそれへと指を絡ませた。

(あ、熱い……。すご……。幸せえ……)

沢山の男性器に囲まれ、全身を使って奉仕する。隷従に目覚めた牝の幸福感に、少女は
恍惚と酔いしれた。自然と腰が円を描くようにうねり、ズプズプと容赦なく抉り込まれる
二つの杭を、より深くまで迎え入れようとする。

「あひいいいいいんっ。い……。イイっ。あっ、あああ〜っ」

菊座をかき回す老人の指が、ちぎらんばかりに乳首をつねり上げた。しかしもはや痛み
さえも被虐の快楽に変化し、少女は鼻先から媚びめいた喘ぎをもらす。

「くっ、くる……。うっ！ きちやうっ、あああくるのおおッッ！」

華奢な背が折れそうなほどに仰け反った。男たちの情欲の強張りが視界を埋め尽くしたことによって、興奮は限界まで高まり、甘美な極致が一挙に押し寄せてくる。パチパチと目の前に白光が閃いたかと思うと、次の瞬間、炎のように真つ赤な渦が自身を呑み込んでいった。

「くふ……あ……っ……！」

膣肉と腸壁が、これまでにないほど収縮して二つの剛棒を締め上げる。それは彼女を追い詰め続けていた男たちにも限界を告げていた。痛いほどの締めつけぶりと、甘美な柔らかさを有する少女の内部は、淫らそのものの心地よさなのだ。

「ああああああああああああああ—— ツツツ!!」

反らされた白い喉から、屋敷中に響きわたるほどの絶叫が放たれた。

その瞬間、溶け出しそうなほど焼けついた内粘膜に、二度目とは思えないほどドロリと硬い雄汁が、叩きつけられる。

——ビュクッ！ びゆる……っ、びゆるるるるるッッ！

お腹の奥深くに叩きつけられる灼熱液に、蕩けるような喜びの笑みを浮かべる少女。その淫靡な微笑みに引きずられ、周りを取り囲む男たちもあえなく絶頂を迎えた。

どぶちゅ……っ！ ドプッ。ドププププ……ッ！ ビュクン……。ビュクン……。

「ふあああつ……っ。あつ、あひああああ……！」

全身のいたるところに、悪臭を放つ白濁が降り注いでいく。歓喜とともにそれらを受け止め、全身をくねらせながら水輝は、天井を仰いだ。黄ばみ始めていた巫服に新たな精液が染み込んでいく。

キューッと引き絞っていた双華から力が抜け、逆流した精液がどろどろと巨漢の股を伝い下へと落ちていく。

それらが畳に染み込み始めるまで、長い長い絶頂の海を泳いでいた少女は、不意にがっかりとその場に崩れ伏した。

にゅぽつと卑猥な音がして二つの杭が抜け落ちるのを感じながら、ついさっきまで未通だった巫女は、被虐と性の悦楽にひしがれて意識を遠のかせていった……。



終章 覚醒

ぼんやりながらも、その日二度目の失神から目を覚ます水輝。

目の焦点が合うまで時間がかかったが、やがて室内の薄暗さに慣れてくると、男たちがなおも周りを取り囲んでいるのが分かった。艶めいた声の主も触手に絡まれ続ける娘たちだ。

全身になすりつけられた雄汁が乾いて、さらに強烈な臭気を放っていた。顔にかかってくる髪もカピカピになっている……。

哀れとしか言いようのない状態にされた少女を見る男たちは、どうやら二度の射精のため冷静になったらしい。純粋な敵意が蘇っていた。中には行為中は捨て去っていた懐刀を持ち出している者までいる。

……うつすらと視線を男たちに向けると、そこには髪を掴まれ引きずられてきた茜の姿があった。何度射精したか分からない、白濁汁にまみれた肉塊は、脚の間に差し込まれた触手に刺激されなおも硬くそびえている。だが目は伏せられ、意識はすでないらしかった。

「あ……かね……」

愛する妹の姿に、少女の瞳にはごくわずかに生気の輝きが戻る。

「どっ、どうなってやがるんだ！ お前が失神しても化け物は動きを止めないし……。さ、さっさと女たちを放さんか！ この妖魔を殺すぞ！」

体力が限界なだけなのだが、冷たい目で自分を見つめる水輝がよほど怖いらしい。男たちの一人が震えた声で怒鳴りながら、刀を茜の首元に突きつけた。

それはあくまで脅しにすぎなかったのだろう。だが巫女は、茜の命に危険が迫っていることだけを見て、男たちに最後の力を振り絞り殺気のこもった視線を向けた。あくまで村人にすぎない彼らは、歴戦の戦士が放つ気配の前に、必要以上に恐怖心をかき立てられる……。

「ヒィッ！ こっ、殺すぞ！ 本当に殺すからな……！」

「……やめて…………！」

……水輝が意識して行動したのは、身体を起こしたところまでだった。

だが彼女が青畳の上に起き上がったのに伴って、茜の首筋に突きつけられていた銅製の刀が……。刃先だけ折れてその場に落ちる。

「な……ッ？」

不可思議な現象を驚いたのは、男たちだけではない。部屋の隅で成り行きを見守っていた夜巳も、おそらくそれを成しただろう、水輝自身もだ。

「……いつ、いかん！」

夜巳が思わずあげた声よりも早く巫女は反応した。軽く右手をたなびかせる様に振るうと、途端に男たちは糸を切られた人形のようにその場に倒れ伏してしまふ。

呪力の封印が解けた……。いや、それ以上である。いま使われた力は、術式を用いて現象を役する呪とは違う。事象のほう彼女の望むよう自ら形を変えた感じだった。いわば……。

「神通力……？ 馬鹿な……」

どんな方法で用いるのか。どういった理由で扱えるのか。夜巳にはそこまで分からない。ただ使役したあとに結果だけが事象として残る、まさに『神の力』があることを彼女は知っていた。四年前に彼女の師にあたる人物が、まったく同じ力を用いたことがある……。

男たちを眠らせた奇跡は、触手に犯される娘たちはもちろん、触手の元である肉塊にまで作用したらしかった。これまで熱気と嬌声で轟いていた室内を異様なほどの静寂が包む。そしてさらには、夜巳までも、くらくらと頭の中に猛烈な眠気が込み上げてくるのを感じていた。

水輝は次に、眠った化け物のほうへ手を向けた。すると砂の城が水に溶けゆくように、さらさらと緩慢な動作で肉塊は粒子状に変換されていく。それは伸ばされた触手一本一本の先まで作用し、最後は女たちの秘苑を汚す肌色のなにかへと変わり果てた。

「う、うそじゃ……。こんなことが……」

茜の腹部に手をあてて、蟲を下すように口から蛇型式を吐き出させる水輝を見る夜巳は、目の前で起こる異常事態よりも彼女の存在が持ち始めた雰囲気恐怖していた。

四年前に同じ気配を感じたことがある。彼女にとっては師でもある現世最強の陰陽師。名を果心居士……。

すべての処理を終えてから、水輝はゆっくりとこちらを向いた。表情は凍りつきまったく読み取れない。しかし少なくとも、敵意の浮いた目で。

肉塊の式が呪力を大量に奪い取っており、水輝の呪力量自体はすでに大したことはないのが夜巳には分かる。だが先ほどから見せている神通力がある以上、いまやりあつたら、昼の砂浜での戦闘よりあっけなく惨敗することになるだろう。なにせ彼女の使役する最強の式神は、たったいま水輝によって粒子化されてしまったのだから。

少女がこちらに向かって手を掲げた。なにをするつもりかは分からないが、それが己の命を奪うであろうことは分かり――。

「……フフ……ッ」

――絶体絶命の状況に、夜巳は笑った。

「フハハハハハハハハハッ!! 素晴らしい! 欲しい……。絶対に手に入れる!!」
おそらくこれまでで最も凄艶で、妖しく、狂気めいた笑いだった。

「フフフフッ……。お前に殺されるのは至上の悦びであろうな……。しかし——」

水輝がなにか行使するより先にさっと彼女へと手を向ける。

たちまち水輝の顔色が変わった。腹部になにかが走ったらしい。両手で下腹部を押さえながら内股になり、その場でよろよろとふらついてしまう。

「——まずはお前とつながりたい……。フフ、今度は極上の魔羅を用意してくるとしよう」
恍惚の表情を残し夜巳は、ピッと下方へ指を向けた。その途端いかな仕掛けがしてあったのだろうか、畳が浮かび上がると彼女の身体を隠す。四枚の畳が落ちるころには、姫君の豪華な着衣は忽然と消え失せていた。

敵が逃げたのを知った途端、水輝は突如としてへなへなとその場に崩れ落ちた。

神通力の発現とともに呪力の封印が解けたらしいのはいいのだが、陵辱されきった乙女の疲弊は言語を絶する。実は立っているのも辛いほど体力が残っていないのだ。

加えて夜巳が残していった小細工によって、肉体が熱く疼いていた。呪力中枢に残された五通神法がその本領を発揮し、乙女の肉芯に淫らな影を刻み込んでくるのである。むしろ封印の解けた水輝の力なら簡単に解呪することができるが、疲れと強制的な発情熱のせいで腰が抜けてしまい、やつを追うことはできそうになかった。

「はあ……。助かった……」

まったく、自分でもわけが分からないうちに掴んだ勝利だった。

おそらく茜が命を狙われたことで瞬間的に集中力が高まり、呪力封印を打ち破ることができたのだろう。それはともかく事態の収束をはかれたのは神通力らしきものが使えたおかげなのだが……。実はなぜあんな奇跡を起こせたのかさっぱり分からなかった。処女でなくなったことが作用したのか。もしくは、皮肉なことにこの世で最も憎む父親から引き継がれた能力が覚醒した。ということなのか。

どちらにしろ、二度は使えそうになかった。夜巳が気づかず退いてくれて助かったが、茜の身体から蛇を下したのが最後で神通力は消えてしまっていた。

「お姉ちゃん……」

緊張から解き放たれその場に横たわっていると、目を覚ました茜が身体を起こして近寄ってきた。寄生虫が死んだために理性を取り戻したらしく、目に涙を浮かべている。

「ごめんなさい……。あの、わたし……」

貪り合ってしまった負い目があり顔を合わせられないながら、水輝はお茶を濁すように慰めつつ、おかつぱの髪を優しく撫でてやった。

「いいのよ……。今日はお疲れ様。もう全部終わったわ」

今日は……。である。これからのほうが大変だ。周りを取り囲むように気を失っている、自分たちがこれまで仲良くしてきた百姓衆たちを見て、水輝は暗鬱げにため息をついた。

まあ明日からのことは明日考えればいい。どんな状況になったとしても、茜さえいればそれ以外になにも望むものはないのだから……。

と……、おかつぱ頭を抱き締めた拍子に、まだギンギンのナニが目に入った。

「あ……」

早いうちになんとかしないと、とは思うのだが、骨が折れそうである。寄生した式神が死んでもそのままということは、呪力に操られはしたものの、肉体が自主的に膨張した結果なのだろう。たんこぶのようなもので、ゆっくり癒す必要がある。繊細な部分なので乱暴にもできないことだし……。せめて神通力がまだ使えればよかったのだが……。

「ふう……。茜、とりあえず今日はもう帰って休むことにしましょう。もうクタクタだわ。それは明日になったら治してあげるから」

「うん……」

いつもと変わらない、さばけた姉を見て、少し安心したらしく茜の表情にもわずかに穏やかなものが見られた。……が……、それは次の水輝の言葉で、すぐさま色を変える。

「ベタベタして気持ち悪いから、その前にどっかの川で身体を洗っていいこうか」

全身にこびりついて乾いた精液の悪臭を気にしているのだろう。だが、その一言で、妹の顔には妙に可愛く、とろんとしたものが宿った。

「……う、うん。そうだね。大丈夫。ぜんぶ綺麗にしてあげるから……」

「へ……？」

あからさまな表情と声色の変化に、やや青くした顔を妹のほうに向ける水輝。

「あの……。茜……？」

「えへっ。明日でなくなっちゃうんなら、今日は使わなきや損だよね。前ではまだシテナいし……」

昨日までは絶対にしなかった清々しさ皆無の無邪気顔で蕩けるような笑みを浮かべ、可愛らしい上目遣いで、着衣のはだけた姉を見た。

純白の薄布一枚しか羽織っておらず、五通神にわずかながら昂ぶらされたことで火照り、艶も帯び始めた美しい身体が、妹の『男』をいいカンジに刺激してしまったらしい。

「うっっ!! やっぱ洗わなくても大丈夫だよ! わたしが全部なめなめして綺麗にしてあげるうっ!!」

「のわあああっ! まっ、待った! 茜っ、ちよっと待ったああうっっ!!」

くの一と術師という質の差か、精神的ななにかが違うのか。ほぼ同じことをされたはずなのに水輝は、元気な妹に押し倒されてしまう……。

最後の一枚だった巫服の布地が、ふあさりと乙女の微熱をはらんだまま床に落ちた。

あとがき

というわけで皆様、二次元ドリームマガジンVol.14を持ってない方に初めまして。持っている方に覚えてますか？ さかき傘と申します。

いやはや、わけの分からないうちに単行本ですよ。勝手に分ならず、関係各位にはご迷惑をおかけしました。

では執筆作業を含め、お世話になった方々にこの場を借りてごめんなさい。そしてありがとうございます。ご挨拶をば。

編集様。なんか本文の二倍近い赤ペンを出してしまい本当にごめんなさいでした。この作品は間違いなく編集様のおかげで仕上がったものです。ありがとうございました。

ごまさとし先生。素敵なイラストをありがとうございました。うわ！ 茜がめっちゃ可愛い！ ってキャラ画見て悶えてしまいましたよ。

友人D様。資料用にH小説くれてありがとうございます。ちょっとだけ役立ちました。そして最後まで読んでくださった読者様方。本当にありがとうございます。まだ読んでない方はちょこちょこ目を通してくださいね。

それでは、またいつかお会いできたら幸いです。

エンジンエムシールド

機甲少女隊2043



赤き疾風ローズナイト、緑の閃光エスメロード、青い稲妻ラピス。人類支配を企む組織の怪人と戦うヒロインたちを淫欲の罠が襲う。長大な舌に乳房を搾られ、秘唇を守るべき人々へ露わにされる変身少女。貪りつくされる彼女たちは、全身を駆け巡る肉悦によって、宿敵の慰み者とされてしまう。

小説：御前零士 イラスト：A1

好評
発売中



正義の姉妹シスターガーディアン。長姉の由香里と次女の玲奈は、姉を憎む三女によって学園で陵辱されることに。素肌の上に絵の具で描かれた聖なる衣を絵筆でかき回され、肉房を竹刀で穿たれながら母乳を噴き出させてしまう姉妹。数々の奉仕を強要される彼女たちは徐々に悦楽の虜になってゆく。

小説：江崎トオル イラスト：さあぺんと

変幻聖女シスターガーディアン2

好評
発売中

宇宙刑事ルフィア

奇怪モンスター軍団の淫網



地球の平和を守る宇宙刑事ルフィア。宇宙海賊「毒蟲十字軍」の淫らな罠に搦め捕られてしまった彼女は、蛇に密着スーツ内を這い回られ、市民を人質にとられて自慰を強要される。さらに、牝蜘蛛怪人の擬似肉根で肛虐までも受けることに。勝気な宇宙刑事は次第に肉の誘惑に抗えなくなるのだった。

小説：庵乃音人 イラスト：園部一晶

好評
発売中

二次元

ドリームマガジン

2D DREAM MAGAZINE

2004年6月号

Vol.16

282ページ

表紙イラスト8本町圭祐

特別
付録

『魔法少女沙枝』の楠沙枝ちゃんが
実際につけていた手袋付き!

二次元ドリーム
ノベルズの雑誌!

業界唯一のオリジナルアダルトノベル雑誌! 読みごたえ満点のえっち小説、えっち漫画はもちろん、「二次元ドリームノベルズ」の注目作品を発売に先駆けて一部公開したり、外伝小説を掲載しちゃったりします!



魔人形ハンター琉衣

魔法に関する犯罪を取り締まる「禁呪封印局」のエージェント、琉衣。両親の仇である自律型ホムンクルス「魔人形」絡みの事件を担当する魔法戦士の少女は、漆黒の戦衣を纏って相棒のフェリスとともに名門学園へ潜入する。だが、魔人形に関係するという学園長の捜査を進めるうちに、享楽主義者のフェリスが音信不通に。独自に調査をしていた琉衣も、事件の核心まで切り込むものの逆に宿敵の手に落ちてしまう。淫魔の触手に全身を粘液まみれにされ、その肉蛇を呑み込まれる銀髪の少女。肉体の内側から熱と白濁粘液で陵辱された琉衣は、魔悦に溺れ始め、終いには獣との交合までも受け入れてしまう。肉の虜にされた仲間とともに、魔戦士は魔人形の餌食となってゆく――。

小説：蒼井村正 イラスト：よしき龍馬

6月
月上旬
発売予定!

作家&イラストレーター募集!

編集部では作家、イラストレーターを募集しております。プロ、アマ問いません。作家応募の方は原稿をFDで送ってください。また、原稿をプリントアウトしたものと簡単なあらすじも送っていただくと助かります。イラストレーター応募の際には原稿のご返却はできませんので、コピーしたもの、もしくはMO、CDで送ってください。小説、イラストともにE-mailで送っていただいても結構です。なお、電話でのお問い合わせはご遠慮ください。採用の場合はこちらから連絡させていただきます。

E-mail : 2d@microgroup.co.jp

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

(株)キルタイムコミュニケーション 二次元ドリーム小説、イラスト投稿係

※2003年10月より送り先が(株)マイクロマガジン社から(株)キルタイムコミュニケーションに変わりました。

版元変更のお知らせ

株式会社マイクロマガジン社と株式会社キルタイムコミュニケーションは、マイクログループの出版部門として、これまで様々な出版物を発行してまいりましたが、平成15年10月をもちまして、それぞれの出版社としての性格を明確にする為、組織改編をさせていただき運びとなりました。それにともない「二次元ドリームノベルズ」は今後、株式会社キルタイムコミュニケーションよりの発行となります。これからもより充実した出版を行っていく所存ですので、引き続きご愛顧賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。

編集局一同

式神戦巫女水輝

呪淫の生贄

2004年6月4日 初版発行

著者 さかき傘
発行人 武内静夫
編集人 岡田英健
編集 田畑吉康
内田 佳
装丁 マイクロハウス クリエイティブ事業部
印刷所 図書印刷株式会社
発行 株式会社キルタイムコミュニケーション
〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル
TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

禁無断転載 4-86032-094-8 C0293

©KILL TIME COMMUNICATION 2004 Printed in Japan

乱丁、落丁本はお取り替えいたします。